

# ダーク・ムーン

第一部 トライアングル・ブルー

\* 1

呉達龍は煙草をくわえた。ハンドルにもたれかかり、窓の外に目をやった。チャイナタウン - - ほとんどの建物が派手に飾りたてていた。どの店の軒先にも赤い紙が張りつけられ、爆竹の束が吊るされていた。

明日は大晦日。明後日の春節になれば世界中の中国人が浮かれ狂う。ヴァンクーヴァーも例外ではない。目の前のチャイナタウンと郊外のリッチモンドで大勢の移民が新しい年を祝うだろう。酒に酔った市民たちが爆竹を打ち鳴らす。麻薬にラリった古惑仔たちが銃をぶっ放す。

ヴァンクーヴァー市警と騎馬警察、それに C L E U ( Coordinated Low Enforcement Unit - - ブリティッシュコロンビア州連合捜査局 ) は春節を目前に控えて合同で特別警戒態勢を敷いていた。アジア系マフィア - - 黒社会は今ではカナダ全土にとっての頭痛の種だ。

呉達龍はヒーターの温度をあげた。外は雨。気温はマイナス五度。冷たい雨の降りつづける季節。香港を思い、身体を震わせた。煙草に火をつけた。相棒のケヴィンが車を降りていってから二時間近くになる。野暮用 - - ケヴィンはいった。おおかた、どこかの香港女の尻を抱えているのだろう。ヴァンクーヴァーには火照った身体を持て余した女が溢れている。旦那たちは香港に戻り、向こうで金を稼ぎ、向こうに女を作る。ヴァンクーヴァーに取り残された女たちの楽しみはショッピングと井戸端会議、それに、白人漁りだ。白人の男なら、選り好みさえしなければ餓えることはない。

ルームミラー - - 浅黒い肌。薄い眉。細い目。横に広がった鼻。呉達龍は自嘲した。プライドの高い香港女が自分に股を開いてくれる可能性は限りなくゼロに近い。

呉達龍は目を細めた。ルームミラーに映る自分の顔の奥。ブルゾンを頭まで引きあげ、濡れた歩道をかけてくる男 - - 趙偉。ヒモ、ポン引き、こそ泥、タレコミ屋。いくつもの仕事を持っている。十四K系組織のチンピラだった。

「龍哥、待たせたかい？」

趙偉はリアシートに滑り込んできた。

「おれのことを気安く兄貴なんて呼ぶな」

呉達龍は英語でいった。哥という広東語は兄貴分を意味する言葉だった。

「ミスタ呉なんていえるかよ」

趙偉は広東語で返してきた。

「じゃあ、呉先生だ」

呉達龍は今度は広東語でいった。

「あんたとおれの仲じゃないか」

「おい - - 」ルームミラーの中の趙偉を睨んだ。「調子に乗るなよ」

「わかったよ。そう脅すなって。明後日は春節なんだ。少しぐらい舞い上がったとかまわないだろう？」

「春節だろうがなんだろうが関係ない」

「あんたにだって家族がいるんだろう？」

「それとこれとどういう関係があるんだ？」

ルームミラー - - 趙偉の目が左右に泳いだ。意気地のないチンピラ。だったら、最初からいきがるのをやめればいい。

「あんたは香港人らしくないってことさ」

「おれはカナダ人だ」

ルームミラー - - 煙草の煙をはきかける。

「そんなことは知ってる。おれがいいたいのは.....」趙偉は口ごもった。媚びるような目を向けてきた。「あんたもわかってるだろう？」

「呉先生だ」

「わかったよ、呉先生」

不貞腐れた顔。追い打ちをかける。

「耳に入れてきたことを話せ。おれが煙草を吸い終わる前にだ。それができなきゃ、おまえの尻を蹴り飛ばして車から叩き出す。そして大声で叫んでやる。趙偉は仲間を警察に売る狗だってな」

「ヴェトナム系の連中がなにか企んでるらしい」趙偉は咳込むように話しはじめた。「先月、風紀課のおまわりたちがイーストペンダー・ストリートのレストランに手入れをしたらどう？ 白粉がごっそり見つかったってやつさ。ヴェトナムのやつら、慌てて新しいヤクを買い付けようとしたんだが、どこかで話がこじれちゃったんだ。それで、このままじゃ飯の食い上げだってんで、一発ぶっぱなすってあちこちでふきまくってる」

話が漠然としすぎていてぴんと来ない。呉達龍は首を後ろに捻った。

「おれが聞きたいのはもっと - - 」

「わかってる。具体的な話だってんだろう？ それじゃ、こういうのはどうだ。三週間前、バーナビィで白粉をごっそり横取りされた。うちの組織が扱ってた

ヤクさ。先々週はまたヴァンクーヴァーで、今度は大圏仔の白粉が、先週はリッチモンドで新義安系の組織が動かしてる白粉が盗まれた」

「それで？」

「カナダは白粉に飢えてるってことさ。黒社会の連中が怒り狂ってるってことさ。たった一ヶ月で数百キロの白粉が消えちまったんだぜ。末端価格は跳ね上がるばかりだし、薬の切れたヤク中どもがあちこちに溢れてる。みんな、目の色を変えて盗人を捜してる」

「すぐに見つかるさ。黒社会の白粉を盗むなんてのは、馬鹿かなにも知らない素人がやることだ」

「噂じゃ、盗んだ白粉は東部に運ばれてるらしい」

「馬鹿らしい」

呉達龍は鼻で笑った。

「どこのだれにそんなことができるっていうんだ？ アンダーグラウンドの連中しかいないだろうが。そんなやつらが白粉の横取りに関わっているとったら、あちこちで戦争が起こる。もっとまともな話を聞かせろよ、偉仔」

「ここでもリッチモンドでもその話で持ちきりなんだぜ」

趙偉は唇を尖らせた。

「それがもし事実だとしても、それは風紀課の管轄だ。おれが喜ぶような話をおまえは知っているはずだ。それを話せよ、偉仔。おれは腹がへって気が立ってる。署で話を聞いてもいいんだ。あそこは温かいし、くそまずいチョコレートバーならただでいくらでも食える。ただし、署に入る前に、おまえの身体検査をしなければならん。まずそんなことはないだろうが、もし白粉が見つかったら、おれはおまえを拘留するし、おれの時間を無駄にしたってことで、市民権を取り下げられるような罪をでっち上げてやる」

呉達龍の脳裏にドレイナンの顔が浮かんだ。ヴァンクーヴァー市警凶悪犯罪課の警部。人種差別主義者 - - イエロウ・モンキィ扱いされなくなかったら犯罪者どもしょっ引いてこい。今月は鄭奎に頼まれた仕事で忙しかった。まだこそ泥とヤク中をふたり挙げただけだ。ドレイナンをなだめる餌がいる。

「勘弁してくれよ、龍哥。みんな春節前で浮き足立ってるんだ。ろくな話なんかありゃしないよ」

呉達龍は趙偉の髪の毛を掴んだ。そのまま、シートのヘッドレストに趙偉の顔を叩きつけた。

「おれを龍哥と呼ぶなとittedらう。話せ。ここはチャイナタウンだ。なにかあるに決まってる」

手を離した。趙偉の鼻から血が垂れてきた。背筋を電流が走りぬけた。拳が疼いた。

「“蓮華”と“中青堂”のガキたちが明日の夜、リッチモンドで派手な出入りをするってさ」趙偉は鼻を押さえながらいった。恨めしげな目。睨むこともできない小心者。「それから、李耀明の娘がリッチモンドに来てるの、知ってるだろう？」

呉達龍はうなずいた。李耀明 - - 香港黒社会の大物。昔はカナダにいた。今は、中国への返還をおそれて家族をカナダに送っている。

「その娘が、ケベックから来た古惑仔に熱をあげてるんだ。相手はフランス語を喋るいけ好かないガキで、ミッシェルとか名乗ってる。李耀明がそのガキを消すために殺し屋を雇ったって話をちらっと聞いたよ」

呉達龍は首を振った。香港の十四Kは、カジノの利権を巡ってマカオの組織と血みどろの抗争を繰り広げているはずだ。どれだけ大事にしていたとしても、殺し屋を雇うほどの余裕があるはずはない。

「他の話だ。そろそろ、おれの胃袋が悲鳴をあげるぞ」

「阿一って男を知ってるか？」

「福建から来たダニだ」

たしか、シアトルから来た男。どこの組織にも属さず、数人の女を抱えて売春稼業を営んでいる。だれも手を出さないのは、アメリカの福建幫が怖いからだ。福建から来た連中は命知らずで通っている。

「そう、てめえでてめえのことを一哥って名乗ってる馬鹿さ。ここんところ、あいつの抱えてる女の数が増えてるんだ。どうしてかわかるかい？」

「焦らすなよ、偉仔」

「太空人のかみさんだよ」

太空人。カナダに移民したのに、家族だけカナダにおいて香港に戻った連中のことだ。ヴァンクーヴァーやリッチモンドの新移民の母子家庭率は五十パーセントを超えるている。

「それで？」

「あいつ、太空人のかみさんたちに近づいて、白粉を使わせるんだ。最初はただでさ。で、女たちが中毒にかかったところで、吹っかけるのさ。ヤクが欲し

かったら金を払え。金を作りたかったら、身体を売れ」

また背筋に電流が走った。暴力の予感。一匹狼なら、どれだけぶちのめしても後腐れはない。いくらそいつが福建幫の一員だとしても、警官に復讐するためにアメリカからやってくる馬鹿もいない。

「そいつのヤサはどこだ？」

「パウエル・ストリートの四三三。だけど、あいつを探すんならカジノにいった方が早いぜ。あいつ、カジノで客を物色するのさ。しこたま儲けた客に目を尾けて、“旦那、どうだい、素人のいい女がいるんだけどな”。ひどい訛りの広東語でさ - - 」

呉達龍は百ドル札を放り投げた。

「鼻の治療代だ。とっととおれの車から出ていけ」

無線 - - 思いとどまる。携帯電話を使った。呼び出し音。いつまでも鳴りつづけた。諦めかけたとき、相手がでた。

「ケヴィンか？ ロンだ」

呉達龍は英語でいった。

「どうした？」

「パーティがあるんだが、どうだ？ いかれた中国野郎をぶちのめすんだ」

口笛が聞こえた。

「そいつは豪勢だな。ちょうど野暮用が終わったところだ。どこに行けばいい？」

「ロイヤル・カジノ」

「OK。ところで、いつもの科白、いってもいいか？」

「好きにしるよ」

「あんた、本当に変わってるぜ。中国人をぶちのめすのが好きな中国人ってのを、おれは初めて見たよ」

白人をぶちのめすと問題が大きくなるからだ - - 喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「じゃあ、後でな、ケヴィン」

「すぐに行くよ、ロン」

呉達龍は携帯電話を助手席のシートに叩きつけた。

\* \* \*

悪党どもは警官の体臭を敏感に嗅ぎわかる。香港のやくざたちはこういった。

「あんたからはおまわりの匂いがしないな、龍哥」言外の意味はこうだ - - あんたはおれたちの仲間だからな。間違っておまわりになった男。間違っただけに生まれ落ちた男。呉達龍の左腕には龍の刺青が彫られている。若いころ - - 本当にガキだったころ、遊び仲間に笑われたくなくていれた。呉達龍は決して半袖のシャツは着ない。

呉達龍は相棒のケヴィン・マドックスを車に残し、カジノの入ったビルに足を向けた。

チャイナタウンの南の外れ - - メイン・ストリートに面した古ぼけた雑居ビル。ケヴィンを待っている間にも、何十人ものアジア系が出入りした。

エレベーターには先客がいた。インド系がふたり。中国系が三人。

「こいつ、おまわりじゃないのか」

北京語が耳に飛び込んできた。

「おれがおまわりだとまずいことでもあるのか？」

口にだして臍を噛んだ。この性格は直さなければならない - - 鄭奎にもいつもそういわれている。幸い、相手は広東語がわからないらしかった。仲間の中国人が肘で脇をつつき、慌てたように目を伏せた。

カジノ - - スロットマシン、ルーレット、ブラックジャック、ミニバカラ。客の入りは六分。ほとんどがアジア系。白人がちょろちょろ。原住民が二、三人。

呉達龍は二百ドルをチップに替えた。テーブルにはつかず、ぐるりとカジノ内を一周した。顔見知りのチンピラたち、カジノのスタッフ - - 目で挨拶をしてくる。大袈裟にふるまうやつはいない。そんなことをすれば、後でぶちのめされる。だれもが理解している。二年の間に理解させた。呉達龍はただのおまわりじゃない。ただの悪徳警官でもない。金を握らせればいうことをきくというわけじゃない。

見つけた。五台あるルーレット台のうちのひとつ。奥からふたつめの台。チップを目の前にうずたかく積みあげた中国人 - - 見たことはない。恐らくは旅行者か新しい移民。そいつの一挙手一投足に目を光らせている阿一。浅黒い肌、細い目、潰れた鼻 - - まるで呉達龍の弟のようだった。

ホイールの中を球が転がった - - ノーモア・ベット。かけ声が飛んだ。球が音をたてるとまり、チップを積みあげた男が飛び上がった。

「おい、これで五回連続だぞ、信じられるか？ 博奕の神様がおれに幸運をさ

しだしてくれたんだ」

北京語だった。男の前にさらにチップが押しやられた。阿一が下卑た笑みを浮かべて男に近づいた。

「馬鹿ツキですね、旦那」

「ああ、このチップを見ろ。マカオでも韓国でもこんなことはなかったぞ」

男はいいながらチップを賭けはじめた。阿一が目配せした。ディーラーが顎を引いた - - ぴんとくる。阿一とディーラーはできている。男の張り目に球を起き、男を儲けさせる。損をするのはハウス側でディーラーじゃない。もっとも、ハウス側は損失を埋めるために他の客をカモにする。

男がまた飛び上がった。ディーラーの目配せ - - そろそろヤバイ。阿一がうなずいた。気づいていないのは男だけだった。

「旦那、そろそろやめておいたほうがいいんじゃないですか。いくらついてるといっても、七回連続で目が出るはずないですよ。おれもカジノ遊びは好きだけど、そんな話、きいたこともない」

喜びに水をさされて、男は唇を歪めた。掌で包みこんだチップを音を当ててこすりあわせた。

「しかし、こんなについでる夜は滅多にないんだ。もしかすると、一生で最高についでる夜かもしれん。ここでやめて損をしたら、おれは泣くに泣けないよ」

「だったらこうしませんか」阿一がほくそ笑んだ。餌に食いついた魚。後は釣り上げるだけだ。「次は百ドルだけ賭けるんです。それで当たれば続ければいいし、当たらなきゃ、今夜のツキはここまでだってこととおしまいにする。どうです？」

「それはいいが、しかし、時間はまだあるんだ。ここでやめるわけにはいかん……」

「旦那……」

阿一は男の耳に口を寄せた。呉達龍は唇を読んだ - - ヴァンクーヴァーには他にもおもしろい遊びができるところがあるんですよ。

男は合点がいったというようにうなずいた。

「後で酷い目に遭うんじゃないだろうな？」

「そんなことはありません。ここは香港じゃないんですから」

男はうなずき、百ドルのチップを一枚、三十の目の上に置いた。

ノーモア・ベット - - 他の客たちは、三十を中心とした張り目にチップを置



いていた。乾いた音を立てて球がとまった - - ゼロ。ため息。

呉達龍は踵を返し、カジノを後にした。

\* \* \*

「あの男は何者だ？」

ケヴィンが口を開いた。目は真紅の寶馬 - - BMWのテールランプを追っていた。

「大陸から来た中国人さ」

無線でBMWのナンバーを照会した - - そのナンバーは登録されていませんという返事が返ってきた。盗難車。呉達龍は右の拳を左の掌に叩きつけた。阿一を叩きのめすための理由が少しずつ増えていく。

「そうじゃなくて、車を運転している方だ。あんたに似てるじゃないか」

「おまえらには、中国人はみんな同じ顔に見えるんだろう」

「いいや、それは違うな。おれたちには中国人と日本人と韓国人の顔が同じに見えるんだ」

ケヴィンの身体からは石鹸の匂いがした。それがケヴィンの体臭を消していた。夏、ケヴィンと一緒に車に乗ることを考えると気が滅入ってくる。

「どこの組織に属してるんだ？」

「あいつは一匹狼だ」

「そんな中国マフィアがいるのか？」

「噂によると、あいつはシアトル辺りを根城にしてる福建幫の一員だ。向こうでなにかやらかして逃げてきたらしい。おまえも知ってるように、ヴァンクーヴァーじゃ福建幫の力は弱いからな。他の中国人は福建人が嫌いなんだ。だから、あいつはだれともつるめない」

BMWはフレイザー川をわたりはじめた。このまま突き進めばリッチモンド。阿一お抱えの素人淫売たちの街まで一直線。

「あんたには好都合ってわけだ」

「ああ、そういうことだ。後腐れのない点数稼ぎができる。ドレイナンの野郎にぐちゃぐちゃいわれると心臓に悪いからな」

「あんた、ここんところ仕事をサボりがちだったからな。まあ、おれはあんたがどんな小遣い稼ぎをしようが気にしないが、ほどほどにしておいたほうがいいぜ」

「ああ、わかってる」

BMWのウィンカーが点滅した。リッチモンド市内へ入っていく。

「なあ、ケヴィン」

「なんだ？」

「あんたが今日寝てた相手は香港の女だろう？」

ケヴィンの目がぎょろりと動いた。顔に張りついていた笑みが奇麗に消え去った。

「それがどうした？」

固い声。ケヴィンには太った女房がいる。ケヴィンは女房に頭があがらない - - 市警でよく聞く噂話。

「少し探りを入れてくれないか。おれが聞いた話じゃ、最近、リッチモンドあたりの香港女の間でヘロインが流行ってるってことだ。ヘロイン買う金ほしさに、売春をやる女もいる」

「ああ、そういうことか」

ケヴィンの肩から力が抜けた。

「わかったぜ。耳を傾けておく」

ケヴィンはブレーキを踏んだ。BMWが停まったところだった。住宅街の一幅。BMWのクラクションが鳴った。白壁の住宅から女がでてきた。呉達龍は目を細めて女を観察した。香港女にしては最高の部類 - - 幼さを感じさせる顔は女優といっても通じるくらい整っていた。首から下は毛皮のハーフコートに覆われて見えない。コートの裾から伸びた脚 - - 男なら涎を垂らしそうなプロポーションであることは間違いなさそうだった。

ケヴィンが口笛を吹いた。

「香港の女にも凄いのがいるじゃないか。あれがヘロインをやって身体を売ってるってのか？」

「ああ」

呉達龍は上の空でうなずいた。女から目を離すことができなかった。ヴァンクーヴァーの中華社会で香港女といえは不細工な女のことだ。それぐらい、香港の女には美人が少ない。だが、BMWに乗り込んだ女は別物だった。

BMWが動きだした。ケヴィンがアクセルを踏んだ。呉達龍は女の家住所を手帳にメモした。BMWの中で、大陸から来た男が女の肩に手をまわすのが見えた。理由のない怒りの発作に呉達龍は身体を震わせた。

「おれもああいう女と寝てみたいぜ」

ケヴィン - - 薄笑いを浮かべていた。呉達龍は気づかれないように腰の銃を握った。怒りの発作はまだ続いていた。

「で、どうする？」

「やつらは連れ込み宿に向かうだろう。あの福建野郎は男を女を部屋に送り込んだ後で、その辺をぶらつくはずだ。客と女を送らなきゃならないからな。まず、福建野郎の身柄を拘束しよう。それから、部屋に踏み込む」

いって、舌打ちをした。英語を話していると自分が自分でなくなったような気分がする。口から出る言葉と頭に浮かんだ思考が一致しない。

本当にいいかかったことはこうだ - - 阿一をぶちのめしてから部屋に踏み込もう、男を脅してから追い出し、それから、あの女を二人でいただきちまおう。

銃から手を離し、ケヴィンの横顔をうかがった。ちんけな白人。小額の賄賂なら喜んでうけとるが、額が大きくなるととたんに怖気づく。黄色人種を馬鹿にしているが、香港女と寝、黒社会の連中や呉達龍を恐れている。一日風呂に入らないと酷い体臭を発するようになる。

こんなやつとあの女を分けあうのはごめんだ - - 呉達龍は口の中でつぶやいた。

\* \* \*

けばけばしいネオン - - 嘉禮客棧。連れ込みホテル。BMWの中では、阿一が男に話しかけていた。女の横顔が見える。つんとすましている。薬が欲しくて身体は売るが心まで売るわけではない - - そんな態度。馬鹿な女だ。

BMWのドアが開いた。男と女が連れ込み宿に消えた。呉達龍は銃を抜いた。ケヴィンはリアシートからショットガンを引っ張りだした。

「さてと、パーティをはじめようか、相棒」

ケヴィンがいった。無線が鳴りだした。

「緊急連絡、緊急連絡。ポート・ロードウェイ四三三の路上で殺人事件発生。くり返す。ポート・ロードウェイ四三三の路上で殺人殺人事件発生。詳細はわかっていない。捜査員はただちに現場に急行せよ。くり返す - - 」

呉達龍とケヴィンは目を見合わせた。

「パーティは中止か？」

「そういうことだな、くそっ」

呉達龍は唇を噛んだ。目の前のBMWと連れ込み宿に何度も視線を往復させた。

\* 2

ウェイターが恭しく頭を下げた。キャサリン・デボアがにっこりと微笑んだ。ハリィ加藤は静かにため息を漏らした。

料理はまずいくせに、目玉の飛び出るような料金を請求する一流レストラン。泡の弾けるピンク・シャンパン。胸も露なドレスで着飾ったキャスイ - - チャイナタウンでヌードルをすすっていた方がよっぽどまじだった。

「なにに乾杯しましょうか、ハロルド？」

細長いシャンパングラスを指でつまんで、キャスイがいった。キャスイはハリィをハロルドとしか呼ばない。自分のこともキャサリンとしか呼ばせない。

「ぼくたちの両親のパートナーシップのためについているのは？」

「それじゃありきたりすぎてつまらないわ」

キャスイは唇を尖らせた。雀斑がうねったように思えた。

「君のお気に召すままに」

「あなたっていつもそうなのね、ハロルド。今夜は久しぶりのデートなのよ。もう少し気のきいたことがいえないの？」

「だったらこういうのはどうだい？ ぼくたちの両親に利用されるぼくらの未来に乾杯」

「大人になってよ、ハロルド」

もちろん、大人になる。大人になって君と結婚しよう。ベッドで君のがさがさの肌を舐めまわそう。君のゆるゆるのプッシィに、だらしなく萎んだあれをいれてやろう。だからキャスイ、頼むからそれ以上口を開かないでくれ。

「わたしはパパのためにあなたを愛したわけじゃないわ。あなただってそうでしょう？」

「そりゃそうさ」

そう。父さんのために君と付き合ってるわけじゃない。出世のためだ。白人の上流階級の娘との結婚 - - それで黄色い肌が白くなるわけじゃない。だが、気づかないふりをしてくれる人間が増えるだろう。

ハリィはグラスを掲げた - - 大人になれよ、ハロルド。警官の仕事は多忙だ。特にC L E U (Coordinated Law Enforcement Unit - - ブリティッシュコロムビア州連合警察局) の対アジア系組織犯罪班の刑事は。結婚しても家に寄りつかなければいい。外に女を作ればいい。多分、キャスイは荒れるだろう。だが、これだけプライドの高い女が、自分から離婚をいいだすはずもない。

「君の寛大さに乾杯しよう。明後日は君の誕生日なのに、ぼくは休暇を取れなかった。なのに、君は許してくれた」

「だって、仕方ないじゃない。わたしの誕生日は中国人のニュー・イヤーにぶつかるんでしょう？　なんていったかしら」

「シュンセツ」

ハリィは日本語でいった。広東語なんてくそ喰らえ。北京語もくそ喰らえ。

「そう、そのシュンセツ。わたし、これでもあなたの仕事に対しては理解を持っているつもりよ。あなたがお父様の手伝いをせずに、警察官という職業を選んだことにも……あなたは昔から妙な正義感に取り憑かれていたもの」

君はなにもわかっちゃいない、キャスイ、本当になにもわかっちゃいない。

「乾杯、するのかい？　しないのかい？」

ハリィはグラスを揺らした。細かな泡が立ち、弾けて消えていく。グレート・ヴァンクーヴァーの中国人たちの命のように。

「するわ。でも、わたしの寛大さになんてごめんだわ」

「二日早い君の誕生日に。ぼくたちの未来に。いつか生まれてくるだろうぼくたちの子供のために」

むかつきを押しさえながらハリィはいった。

「気に入ったわ、ハロルド。乾杯しましょう」

キャスイの大きな胸が揺れた。その胸にありったけの銃弾を叩き込みたいという衝動をハリィはなんとか抑えこんだ。

\* \* \*

味のしないステーキと格闘しているときに携帯が鳴った - - 天の助け。

「携帯電話は切っておくといいのに」

キャサリンが声をひそめて抗議した。携帯電話を恥ずかしい持ち物だと思える階級の人間の言い草だった。

「忘れていたんだ。ごめんよ、キャサリン」

席を外し、電話に出た。

「ハリィ？」

周瑞強 - - パトリック・チャウ。CLEUの潜入刑事。ハリィの相棒。

「どうした、パット？」

「デートの最中に申し訳ないんだがな、今夜、ヤオハンショッピングモールの駐車場で地元の悪ガキどもとバーナビーの台青のガキどもが大がかりな出入り

をするって話を小耳に挟んだんだ」

頭の中に地図が広がった。リッチモンド。日本の会社を作り、中華系の金持ちが後を引き継いだショッピングモール。リッチモンドのど真ん中。

「確かな情報か？」

「ああ。悪ガキどもが刃物やバットをかき集めてる。中には銃を持ってるやつもいる。本部に連絡を入れて人をかき集める。出入りがはじまる前に連中を抑えるんだ」

「わかった。後で連絡を入れる」

ハリィは席に戻った。

「キャサリン、本当に申し訳ない。急な仕事が入った」

「ハロルド - - 」

「この埋め合わせは必ずするよ。だから - - 」

「わかったわ。いってらっしゃい。でも、このデイトのキャンセルは高くつくわよ」

「わかってる。これ、受け取って」

ハリィはジャケットのポケットから指輪のケースを取り出した。キャスイの手に握らせた。キャスイは震えていた。

「ああ、ハロルド - - 」

「開けてみなよ、キャサリン」

キャサリンの震える指先がケースを開けた。ダイヤとルビィをあしらったエンゲージ・リング。ボーナスのほとんどを注ぎこんだ。

「ああ、ハロルド - - 」

「婚約指輪だ。今夜はそれで機嫌を直してくれるね？」

「もちろんよ、ハロルド。わたし、こんな素敵な指輪、見たことないわ」

嘘つきめ。君の寝室にはその指輪の何倍もするアクセサリーがゴミクズのように散らかってるじゃないか。

抱きついてこようとするキャスイをかわして、ハリィは仕事に戻った。

\* \* \*

混乱と騒動 - - 警棒が肉にめり込む音。パトカーのサイレン。バットや肉きり包丁を手にした中華系の若者たちが駐車場に集まってくる。それを片っ端からしょっ引く。CLEU、リッチモンド市警、リッチモンド騎馬警察の警官たち。駐車場では英語と広東語、それに北京語が飛び交っている。大麻とヘロイ

ンでラリった悪ガキども。手錠をかけられても悪びれるふうはない。ヴォランティアの通訳たちの顔が蒼醒めている。

制服警官に左腕を掴まれた若者と目が合った。若者が広東語でなにかを訴えた。早口と周りの騒音で聞き取れなかった。ハリィは首を振った。

「日本人」

若者は唾を足元にはいた。

「加藤巡查部長」耳もとで英語。「ガキどもは蟻みたいに湧いてきます。護送車の数が足りません」

アングロサクソンの制服警官。若い。うんざりした気分が顔に現われている。数年前の自分を見ているようだった。

「バットしか持っていなかったガキは名前と住所、IDナンバーを控えて帰せ。刃物と銃、それに薬物を所持していたガキを選別して護送車に乗せるんだ」

「そのとおりにしてます。それでも、護送車が一杯なんです」

ハリィは舌打ちした。若い警官についてこいと顎をしゃくった。

「巡查部長、お尋ねしてもいいですか？」

「ひとことで答えられる質問なら」

若い警官は口ごもった。きかなくてもわかっていた - - なんだって中国人のガキはこんなにクレイジィなんですか？

香港と台湾から来たガキども。父親は仕事のために地元に戻っている。母子家庭もしくは十代の若さで異国の土地に一人で放り出されたガキども。金はある。教育もある。家族の愛情に餓えている。だから、ストリート・ギャングの真似をして偽物の家族の絆に縋りついている。

ハリィは司令車の窓ガラスを叩いた。窓が開き、CLEUのウィリアム・ヴィンセンス警部補が顔を覗かせた。

「どうした、ハリィ？」

「護送車の数が足りません。警官の数もです。ヴァンクーヴァーとバーナビーに協力を要請できませんか？」

ヴィンセンスの顔が歪んだ。

「おまえも知ってるだろう、ハリィ。グレート・ヴァンクーヴァーの各警察は今日から特別警戒態勢に入っている。余分な人手なんかどこにもありゃしないさ」

「だったら、この混乱をどうするつもりなんですか？」

「ガキどもに聞けよ。それとも、くだらない情報をおまえに伝えておれたちをうんざりさせてるパトリックにきいてみたらどうだ。おれにいわせれば、中国人のガキどもなんて、勝手に殺しあいを見せておけばいいんだ」

ハリィは司令車の屋根を拳で叩いた。振り返り、若い警官にいった。

「聞いたとおりだ」

若い警官は途方に暮れたような顔つきになった。

「巡査部長」

「質問はなしだ。おれにだってどうすりゃいいかわからないんだからな - - 」

乾いた破裂音 - - ハリィと警官は腰を屈めた。

「銃声ですよな？」

「くそっ！」

ハリィは銃声のした方向に走りはじめた。

\* \* \*

サイレン - - 猛スピードで走り去っていく救急車のテイルランプ。

三人の警官が一人のガキをアスファルトに押さえつけていた。怒号と罵声。ガキの傍らに転がったオートマティック。ガキは北京語で喚いている。警官の一人がガキの口許を殴った。それでもガキは喚くのをやめなかった。唇の端に溜まった白い唾の泡、血走った目 - - ヤク中。

「なにがあった？」

ハリィは訊いた。騒然とするガキどもを静止していた制服警官が振り向いた。「このガキが、いきなりぶっ放したんです！ ヘロインをやってるに違いありません」

「怪我人は？」

「香港系のガキが腹を撃たれました。今行った救急車に乗っています」

ハリィはもう一度ガキを見た。年齢をどれだけ高く見積もっても十七歳というところだった。逮捕はできる。だが、裁判にはかけられない。ブリティッシュコロンビア州は少年法を改正すべきだ。

ガキどもの間に不穏な空気が広がっていた。仲間を撃たれた香港系のガキどもが腹をたてている。そいつをぶち殺せと喚いている - - 広東語で。ヤク中のガキの仲間が喚き返している。おまえらこそぶち殺すぞ - - 北京語で。

キャスィとデートを続けていた方がまじだったかもしれない。

「そのガキをしょっ引け。他のガキどもをきっちり分離するんだ。生意気なガ



キは拳でいうことを聞かせてやれ！」

ハリィはその場を離れた。五十年も年を取ったような気分 - - ビールを飲みたかった。あるいは、よく冷えた吟醸酒。ノース・ヴァンクーヴァーの父の家、地下のワインセラーに横たわっている菊姫の大吟醸。ハリィは首を振った。いつか、おまえは酒で失敗するな - - 父にいわれた言葉。恐怖の呪文。勤務中に酒のことを考えるなんてどうかしている。アペリティフのシャンパンと食事中に飲んだ白ワインがまだ胃の中でうねっている。

駐車場の周囲 - - 野次馬たち。大抵は白人だ。さっきの銃声か、野次馬たちの顔は赤らみ、蒼醒めている。ハリィは人ごみの中にパットの顔を見つけた。苦虫を噛みつぶしたような顔。広東人には際立った優男。それに広州訛りの広東語。これ以上はない罔捜査官。パットは中国公安警察、トロント市警を経てCLEUにやってきた。初めてコンビを組まれた日から馬があった。パットは広州人には珍らしく酒が好きだった。一緒に日本酒を飲みながら、嫌な顔一つせずに広東語と北京語を教えてくれた。

パット - - 罔捜査を嫌がっている。人をはめる仕事にうんざりしている。

ハリィは足をとめた。パットのいる場所から左に十メートル。二人の中華系 - - 男と女。ふたりともまだ二十代の前半。もしかすると十代。女は長い髪の毛をアップにまとめていた。白いワンピース。街灯に照らされて身体の線が浮き上がっていた。男は今時珍らしくポマードで頭を固めていた。整った顔立ちがシニカルに歪んでいた。ジャン=ポール・ゴルチエの肌にあびたりくつついたシャツ、パンツ。恋愛映画のスクリーンから抜けだしてきたようなカップル。

頭の中のファイルが音をたててめくっていった。女の顔を見つけた。

李少芳 - - 香港黒社会の大物、李耀明の娘CLEUの要注意人物リストにプロファイルが載っていた。男 - - 頭の中のファイルをいくらめくってもそれらしい顔を思いだすことができなかった。

男は李少芳の腰を抱いていた。李少芳は首を捻って男の顎にキスしていた。トラブルの予感がした。黒社会のボスの娘とジゴロ風の男。香港の親がこのことを知ったら、きっとただでは済むまい。

頭の中のメモ用紙 - - 男の身元をチェックすること。

ハリィは気づかれぬように二人の観察を続けた。李少芳は楽しそうだった。男に惚れ込んでいるのが一目瞭然だった。男は暗い目をしていた。ハリィは寒気を感じた。そんな目をした人間を今まで見たことがなかった。

男がハリィの視線に気づいた。ウィンク - - ハリィは凍りついた。あんなのこと、知ってるぜ - - 男の目はそういていた。

\* 3

「ロン！」

対面の男が手牌を倒した。万子で染めていることはわかっていた。だが、とまらなかった。落ち目の自分には当然の流れ - - 富永脩は薄笑いを浮かべながら金を払った。腰をあげた。

「もう帰るのか？ もう少しつきあえよ」

対面の男がいった。この辺りではアソウという何で知られている。どういう漢字を使うのかは知らない。古惑仔をまとめあげて親分を気取っているいけ好かない男だ。

「もう、おけらだ。また遊んでくれ」

富永はいった。下手くそな広東語。それでも、喋れないよりはよっぽどましだ。

「日本人なのに金がないっていうのか？」

アソウが嗤った。他の二人も愛想笑いを浮かべた。

「それに、おまえのボスは李耀明じゃないか。金がないなんて話、聞けないぜ。それともなにか？ 李耀明は香港人の手下には金をばら撒くが、日本人にはただ働きをさせるのか？」

思わず頭に血がのぼる - - やめろ。アソウは騒ぎを起こしたがっている。おれに喧嘩を売って、李耀明からなにかを取り立てようとしている。それに - - また博奕に手を出したことを知られたら、李耀明にいいわけできない。富永は右手で左手にはめた黒革の手袋をいじった。

「勘弁してくれよ、アソウ」

富永は薄笑いを浮かべたままいった。

「ソウの兄貴、だろ？」

足が動きかける。なんとか思いとどまった。

「勘弁してくださいよ、ソウの兄貴」

「腰抜けの日本人がそういつてるが、どうしたもんかな」

わざとらしい声 - - 落ち着け。こいつらはつるんでる。それを知っていて麻雀をつづけたのはおまえだ。落ち着け。

「もう、勘弁しておあげよ、アソウ。サムは金はきっちり払ったんだろ？」

他の客と卓を囲んでいた馬麗華が気怠そうな目をこっちに向けていた。雀荘の女主人。この辺りを束ねる老大の母親。アソウでも頭はあがらない。

「まあ、小姐がそういうなら……」

「サムもサムだよ。あんた、李耀明から博奕、禁止されてるんだろう？ いい加減にしないと、今度は本当に酷い目に遭うよ」

「やかましいんだよ、てめえら」

富永は日本語でいった。雀荘を出た。

\* \* \*

旺角から湾仔へ。地下鉄に乗ればあっという間の距離。それでも、旺角なら李耀明の耳には入るまいと思っていた。距離の問題ではない。問題はマカオ - - カジノ。利権を巡る泥沼の抗争。明後日は旧正月。つまり、今年に入ってまだ一ヶ月しか経っていない。それなのに、李耀明は三人の手下を殺された。その報復に五人のマカオやくざを殺した。抗争が沈静化する兆しはない。李耀明は忙しすぎる。博奕狂いの部下に目くじらを立てる暇はない。

地下鉄は混んでいた。中国への返還を目前に控え、旅行者が香港に雪崩込んできている。日本人、韓国人、欧米人。他人事の不幸を、今や遅しと待ち構えている。

「あのう……」

傍らに立っていた日本人の女に声をかけられた。ジーンズにスニーカー。背中にリュック。右手にガイドブック、左手にはグッチの紙袋。富永は鼻を鳴らした。

「コースウェイベイに行きたいんですけど、このまま地下鉄に乗っていても…  
…あの、日本の方ですよ？」

「それぐらい、自分で調べな」

富永は広東語でいった。女は怯えたように目を伏せた。周りの香港人が、富永の下手くそな広東語に奇異の視線を向けてきた。

「おまえら、なに見てやがんだ？」

もう一度、広東語。乗客たちが視線をそらした。

「すいません。もう、結構です」

女がいった。富永は唇を歪めた。手袋をはめた左手を女の肩に置いた。震えおののく柔らかい身体 - - 笑いがこみあげてきた。

「なあ、おねえちゃん、おまんこさせてくれないか？」

女の耳元に囁いた。地下鉄が中環についたところだった。ドアが開き、乗客が降りていく。女は身体を震わせながら、走るようにして電車を降りた。富永は声をあげて笑った。雀荘での腹立ちが紛れた。そんなことで自分をごまかしている自分に腹が立った。笑うのをやめた。

携帯が鳴った。

「畏？」

広東語でもしもしと出して出た。

「サムか？」

李耀明の声。肝が冷えた。

「そうです、大老」

「話がある。九時に JJ's 夜総会 に来い」

どうしてバレたのか。「大老、なんの話でしょう？」

「会ったときに話す」

電話が切れた。

\* \* \*

仕事 - - 日本のやくざと打ち合わせ。その後、女をあてがう。李耀明のせいで予定が狂った。富永は携帯電話を使った。

最初の番号 - - だれもでない。

二つめの番号 - - 目当ての男はいない。

三つ目の番号 - - 当たり。

「サムだ。頼みがある」

「またかよ。あんた、おれにいくつ借りがあると思ってる？」

口の中でこね回したような広東語。許家榮。湾仔のなんでも屋、情報屋、タレコミ屋。湾仔で起こっていることで、許が知らないことはなにもない。

「これから、日本のやくざと飯を食うことになってるんだが - - 」

「蛇頭の仕事か？」

「おい - - 」

「心配するなって。ここにはおれしかいないよ」

「とにかく、飯の後に、やくざどもを夜総会に連れていくつもりだったんだが、大老から呼び出された。ポン引きの役、替わってくれないか？」

ため息。「勘弁してくれよ、サム。日本のやくざはあれに真珠を埋めこんでるだろう。それにしつこいから女どもが嫌がるんだ。あんたも知ってるだろう」

「おまえが葉のやつをサツに売ったこと、大老に教えてもいいんだぞ」  
「それはいわない約束だろう。だったらおれも、おまえが旺角の雀荘で博奕にトチ狂ってること、大老にいつけるぞ」

「家榮……」

「わかったよ。やくざは引き受ける。どこに行けばいいんだ？」

「八時半にニューワールド・ハーバービュー」

富永はホテルの名前を英語でいった。

「新世界海景だな」

電話を切る気配 - - 慌てて言葉を繋ぐ。

「それからな、家榮。大老の周りでなにか変なことが起こってないか？」

「変なことって？」

「おれは大老から直に呼び出された。年が明けてからこっち、そんなことはなかった。おかしいだろう。今はマカオの一件で死ぬほど忙しいはずだ」

沈黙。富永は耳に神経を集中させた。

「いいや、おれはなにも知らないな。明後日は春節だぜ、サム。黒社会の連中だって、正月は人殺しをやめて先祖を敬うんだ。この時期に騒ぎが起こるってのは考えられないよ」

「そうか」富永はため息をついた。「悪かったな。じゃあ、やくざのことは頼んだぞ」

電話を切った。李耀明の真意がわからない。尻の穴をだれかに覗かれているような嫌な感じがつきまとっていた。

\* \* \*

「凄いと聞いていたが、香港の旧正月ってのは話以上だな。街全体が真っ赤じゃないか」

田村義明が口を開けた。黄ばんだ歯が剥き出しになった。

「明日からはほとんどの店が休みます。中国人にとっちゃ、新暦の正月よりこっちの方が大切なんですよ」

富永は鮑を一切れ、口に放りこんだ。ゆっくり噛んだ。やくざたちの皿は大方が空だった。馬鹿高い広東料理の醜い残骸。がさつな連中と一緒に、味もわからない。

「明日帰ることにしておいてよかったよ。こっちの若いもんは香港の女をもっと楽しみたいといっていたんだがな」

笑い声が起こった。富永は愛想笑いを浮かべただけで鮑を食べつづけた。

「富永さん、今夜はどうなっているんだ？」

「わたしは用事があって付き合えませんが、替わりのものが皆さんをナイトクラブにお連れします。店側とは話をつけてありますんで、好きな女を好きなだけ選んでくれて構いません」

「金は？」

田村の赤らんだ顔が下品に歪んだ。

「もちろん、こちらで持ちますよ」

大山と名乗った若いチンピラが紹興酒を田村と富永のグラスに注いだ。ウェイターが口を曲げて見守っていた。自分の仕事を奪った粗野な日本人に対する侮蔑が見え隠れしていた。富永はウェイターに手招きした。

「なんでございましょう？」

広東語訛りの英語。

「あのな、一流レストランの一流のウェイターを気取るんなら、その人を小馬鹿にしたような面を引っ込めろ」

富永は広東語でいった。ウェイターはばつが悪そうに顔を伏せた。

「広東語がおできになるんですか？」

「広東語ができなかったら、おまえら、客を馬鹿にするのか？」

やくざたちの声が途切れた。なにごとかというように富永とウェイターのやり取りを見守っていた。

「とんでもありません」

「あのな、こいつらは馬鹿だ。日本の黒社会の連中だから、下品で卑しい。おまえがこいつらを馬鹿にするのは構わんが、おれの目の前ではするな。おれも日本人だ。日本人が香港人にいいようにあしらわれるのを見てると腹が立つ。もう一度さっきと同じ顔でおれたちを見たら、支配人を呼ぶぞ」

「ご気分を悪くさせるつもりではなかったんです。申し訳ありません」

ウェイターは深々と頭を下げた。愛想笑いが引き攣っていた。

「行っていい」

富永は顎をしゃくった。ウェイターは逃げるように去っていった。

「なにかあったのか？」

田村が聞いてきた。

「食い物がうまいと誉めてやったんですよ」

「それにしちゃ、口調が険呑だったな」

「広東語ってのは、なにをどう喋っても喧嘩してるように聞こえるんです。関西弁と同じですよ」

「たいしたもんだな、あんた」

田村は紹興酒を飲み干した。大山がまた新しい酒を注いだ。大山は田村の左脇にぴったり寄り添っている。ボディガードを気取っているのか。飼い主に忠誠を尽くす犬みたいな男なのか。

「なにがですか？」

「その若さで、こっちの蛇頭の組織を仕切ってるじゃないか。こっちの言葉もぺらぺらだし、英語もできるんだろう？」

「日常会話だけですよ」

蛇頭の仕事も、おれはただの使いっ走りだ - - 口には出さなかった。

「噂を聞いたんだが……」田村は声を潜めた。「あんた、昔、デカだったんだって？」

富永は聞こえなかったふりをした。酒を飲み、鮑を食べた。だが、田村には通じなかった。

「新宿の極道の渡世じゃ少しは名前も知られていたってじゃないか。新宿署の防犯にいたんだろう？」

「今は生活安全課ですよ」

富永は諦めて箸を置いた。この話を途中でやめたがるやくざはいない。

「ある組の幹部の女房とできちまって警察をやめたって話、本当かい？」

富永はうなずいた。恭子 - - 覚醒剤とセックスにとち狂っていた日々。

「警察をやめただけじゃなく、日本にもいられなくなりましたがね」

「あんた普通のデカじゃなかったんだろう？ 極道から銭を受け取ってるデカが極道の女房に手を出したらどうなるかわかってたんじゃないのか？」

「ええ、十分にわかってましたよ」

「それがどうして？」

「その女のおまんこが死ぬほどよかったんです」

田村の取り巻きが笑った - - 大山は笑わない。動かない目で富永を見ていた。「なるほどな。命を張っても惜しくない女だったわけか。その女もこっちにいるのかい？」

「死にましたよ、日本で」

田村はわかったというようにうなずいた。

「だけど、あんたは香港でこんな仕事をしてる。あんたを追いかけてる組の耳に入ったらえらいことになるんじゃないのか？」

「うちのボスが向こうの組長に話をつけてくれたんです。おれが日本に戻らない限り、すべてはなかったことにするってね。おかげで、こうやって大手を振って歩いていれるわけです」

「信じられんな。日本のやくざが香港の連中と手打ちをしたって？」

「うちのボスはやり手なんです。じゃなきゃ、こうして日本の組織と仕事をすることなんてないでしょう。それに - - 」富永は左手の手袋を外しはじめた。

「それなりの代価は払ってるんですよ、田村組長」

やくざたちの視線が富永の左手に集まった。富永の左手には小指がなかった。

\* \* \*

馬鹿みたいにだだっ広いナイトクラブ。支配人の後について女たちをかき分ける。夜総会に人が来るにはまだ早い時間だった。客待ちをしている女たちにとって、富永はかっこの標的だった。

「サム、今度わたしのあそこを舐めて。日本人ってうまいんでしょう？」

「ねえ、サム。日本人は女を縛ってやるのが好きって本当？」

「サム、日本に帰ってきたらスキンを買ってきてよ。こっちのスキンはすぐ破れちゃうのよ」

「サム、ディズニー・ランドに連れてってよ」

富永は女たちを無視した。ブーイング。ただでやらせてくれる可愛い女たち - - ほとんどが大陸からやってきた。

店の一番奥 - - V I P 席。李耀明がひとりでブランディ・グラスを弄んでいた。富永は唾を飲み込んだ。李耀明が部下より先に来るということはあり得ない。なにがあったのか。なにをさせられるのか。

「来たな」

李耀明は英語でいった。目は、ブランディグラスを見つめていた。博奕のことがばれたわけではなかった。もっと悪いなにかが起こったに違いなかった。

「なにがあったんですか、大老」

富永は広東語でいった。英語はしばらく使っていない。広東語の方が楽だった。

「まあ、座れ」



李耀明は自分の向かいのソファを指し示した。富永はそれに従った。

「大老 - - 」

「英語で話したいんだが、付き合ってくれるか？」

李耀明は疲れていた。こんなにくたびれた顔をした李耀明を見るのは久しぶりだった。

「いいですよ、ボス」

「おまえの広東語もずいぶんましになったが、それでも英語の方がよっぽどいいな」

「英語はちゃんと勉強しましたからね。広東語は耳で覚えてるだけだ」

支配人がそばに突っ立ったままだった。声をかけようかどうしようか迷った。富永は手袋をはめた手を振って支配人を追い払った。李耀明の顔 - - 女を侍らす気分には見えなかった。

「初めて会ったときのことを覚えてるか？」

自分のグラスにブランディを注ぎ、富永はうなずいた。忘れるはずがない。富永ははめられたのだ。マカオのリスポアカジノ。蛇頭組織のために日本語のできる男を探していた李耀明。バカラの卓。二時間ぶっ通しの馬鹿ヅキの後は、五時間連続して負けつづけた。からくり気づいたときには借金でがんじがらめにされていた。

「あの時、おれは久しぶりに英語を使った。おまえはおれの英語がよくわからないといった」

「そうでしたね」

富永はブランディをすすった。顔をしかめた。酒は強くない。酒よりも女と博奕。そういうタイプだった。

「おれはどこで英語を覚えたと思う？」

「カナダじゃなかったですか？」

少芳をカナダにやることが決まったとき、何度も聞かされた話だった。

「そうだ。カナダだ。おれはヴァンクーヴァーで一儲けして香港に戻ってきた。あの頃はおれも若かった。なんでもできたし、なにも恐くはなかった」

「ボス - - 」

開きかけた口 - - 李耀明が手で制した。

「少芳がいなくなった」

李耀明は相変わらずブランディグラスを見つめていた。琥珀色の液体の中に、

自分の探しているものがあると思い込んででもいるように。

「もう一度行ってください」

「少芳がいなくなったんだ。探しに行ってくれ」

富永はグラスの中身を飲み干した。胃で火花があがり、炎が全身を駆け巡った。

「どうしておれが.....その前に、どうなっているのか、順を追って説明してください」

李耀明はグラスを見つめるのをやめた。富永は息をひそめた。湾仔の虎 - - 李耀明はそう呼ばれていた。敵対するものは情け容赦なく叩き潰す。それが李耀明だった。李耀明のそういう生き方が顔にも滲んでいた。剃刀を思わせる酷薄な顔 - - その顔が歪んでいた。悲しみに戸惑っていた。

「一ヶ月ほど前に報告が入った。モントリオールから来たジゴロまがいの古惑仔に少芳が熱をあげているとってな」

李耀明はブランディを一気に煽った。苦いものを飲み干すようだった。富永は新しいブランディを李耀明と自分のグラスに注いだ。

「おれは向こうの連中にいったよ。そのチンピラを殺せ。少芳に食らいつこうとするダニは、相手がだれであろうとぶち殺せ」

「そうでしょうね」

李耀明は娘を溺愛していた。李少芳 - - くそ生意気な牝犬。富永は李耀明の娘が嫌いだった。李耀明以外のだれもが、李少芳を嫌っていた。そのことを知らないのは李耀明だけだった。

「しかし、なんだっておれが？ おれは向こうの事情には詳しくないし、第一、日本人が向こうのチャイナタウンに潜りこんだって目立つだけじゃないですか？」

「マカオとの件で、おれの身内を向こうにやることはできないんだ」

言外の意味 - - おまえは身内じゃない。

「しかし - - 」

「黒社会というのは、いってみれば一つの家族だ。おれは父親ってことになる。自分の娘のために、他の家族を危険にさらすことはできん。わかるな、サム？」

富永は答えなかった。手袋の小指の部分を神経質にひっかいた。

「それに、ヴァンクーヴァーも少々きな臭いことになっている。そこに、香港のやくざ者が乗り込めば、なにが起ころかわかったもんじゃない。サム、おま

えがうってつけなんだ」

「大老。お嬢さんは男に誑かされただけでしょう。そのうち戻ってきますよ。男に捨てられてね」

「サム、おれの娘がどうなってもいいというのか？」

光り輝く目 - - 湾仔の虎の目。富永は怖気をふるった。

「とんでもありません」

「ヴァンクーヴァーの知りあいに話はつけてある。ひとり、助っ人を出してくれるそうだ。行ってくれ、サム。娘を探してくれ。娘を誑かしたくそ野郎を殺してくるんだ」

「おれは殺し屋じゃありませんよ、大老」

「おまえはおれの飼犬だ、サム。おれがしろといったことをおまえはするんだ。おれがおまえの母親を殺せといったら、おまえはそうするんだ」

嫌な音がした。富永は視線を落とした。手袋の小指の部分が千切れていた。

\* 4

薬の切れたヤク中が金目当に通行人に襲いかかった - - せっかくの獲物を棒に振ったというのにくだらない事件。

呉達龍は道端に唾をはいた。拳を掌に叩きつけた。こんな馬鹿騒ぎを起こしたヤク中を叩きのめしてやりたかった。だが、肝心の獲物はパトカーの中。先に現場に到着した風紀課の刑事が尋問していた。

いくつもの赤色燈が道路を照らしていた。道端に倒れた白人 - - 高そうなスーツを着たビジネスマン。血が広がっていた。どす黒く変色した臓物がてかっていた。

「獲物は先に狩られちまうし、パーティを続けていた方がよかったな」

ケヴィンがあくびをした。

「まったくだ。ヤク中のくそ野郎め」

呉達龍はパトカーに視線を走らせた。うなだれたヤク中 - - ヴェトナム系。おそらく、風紀課の連中には中華系かヴェトナム系かの見分けもつくまい。

「市警本部に戻るか？」

「いや、あれを見ろよ」呉達龍はパトカーを指差した。「連中、そのうち助けられて泣きついてくる」

「十分で泣きついてくる方に二十ドル」

「なら、おれは五分だ」

野次馬が集まって来つつあった。呉達龍は車の中から警棒を取りだした。警棒をぐるぐる回しながら、野次馬に近づいた。

「見世物じゃない。とっとと帰りな」

英語と広東語でいった。野次馬たちの顔を見回す - - ほとんどが中華系。裕福な白人は家で家族と過ごしているか豪華なディナーを楽しんでいる時間だった。

「なんてこった」

ケヴィンの声に振り返った。二十ドルの儲け - - パトカーから風紀課の刑事が降りてくるところだった。

「ロン、ちょっと手を貸してくれないか。英語がまったく通じないんだ」

くたびれた中年の刑事。たしか、グレンヴィルという名だった。

「構わないぜ」

呉達龍は警棒を振りまわしながらパトカーに乗りこんだ。饑えた汗の匂い。ヤク中は小康状態を保っていた。まだ若い - - というよりガキ。

「名前は？」

広東語で訊いた - - 反応なし。

「名前は？」

北京語で訊いた - - ガキの目が動いた。

「小安」

「台湾人か.....身分証明書を持ってるな？ 出せ」

「お、おれ - - 」

「口答えするな。身分証明書を出すんだ」

呉達龍は唸るようにいった。ガキが震え上がった。金はかかっているが薄汚れてしまったブルゾンのポケットからIDカードが出てきた。呉達龍はそれを奪いとった。

王志安。十九歳。学生。住所はノース・ヴァンクーヴァー - - 金持ちのどら息子。

「おまえは強盗殺人と麻薬不法所持の疑いで逮捕された。裁判にかけられれば、十年は喰らいこむ」少年法の話は口にしなかった。「両親は台湾か？」

「お、おれ - - 」

「両親は台湾か!？」

「そ、そうです」

「学生だって？」呉達龍はIDを運転席の刑事にわたした。「英語もろくに喋れないでなにが学生だ。親の金でろくでもないことをしまくってるんだろう。白粉はどこで買っていた？」

「け、刑事さん、おれ - - 」

「白粉はどこで手に入れていたと訊いてるんだ」

「金葉酒家」

イーストヘイスティングス・ストリートのレストラン - - ヴェトナム系の溜り場。半年前に手入れをくらい、経営者が変わった。だが、実体にはなんの変化もない。

「あそこで白粉を買えることをだれに訊いた？」

「だれって.....友達がみんな - - 」

呉達龍は表情を緩めた。目の前にいるのは馬鹿な子供にすぎなかった。どこかの幫 - - 組織に属しているストリート・ギャングとは話が違った。

「おまえは白粉を買う金欲しさに、見ず知らずの通行人を襲って殺した - - 認めるな？」

「お、おれ - - 」

「認めるな!？」

「.....やったよ。これでいいんだろう？」

開き直ったガキ - - ぶちのめしてやりたい。だが、他の警官の目があった。呉達龍は運転席の方に身を乗りだした。さり気ないふうを装って、ガキの脇腹に肘を打ちつけた。うめき声 - - 溜飲が下がった。

「こいつの名前は王志安。十九歳。台湾系の移民だ。両親は台湾にいる。強盗を認めたよ。とっとと署に連行して、この馬鹿げた騒ぎを終わりにしようぜ」

\* \* \*

ケヴィンは家に帰るといった。呉達龍にはやることがあった - - ケヴィンを途中でおろした。車を東に走らせた。

金葉酒家。どぎついネオン。入口のあつこちに貼られた赤い紙 - - 恭喜發財。お金が儲かりますように - - 中国人の新年の挨拶。

レストランの前にはガキどもがたむろしていた。呉達龍が車を降りると、ガキどもは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。ドアボーイが愛想笑いを向けてきた。

店の中は満員だった。ヴェトナム系が六割、中華系が三割、白人が一割。客

たちの話す声が壁や天井にこだまして騒がしかった。

ドアボーイが店主のトランを連れてきた。

「これは呉先生、お食事ですか？」

訛りのきつい北京語 - - ヴェトナム系は言葉でわかる。

「そうだな。食わせてもらおうか」

トランは満員の店内に視線を走らせた。柄の悪い連中が占拠している円卓の上でその視線がとまった。

「ディエップと一緒にいいですか？」

「そうしてくれ」

トランが卓に向かった。ディエップと話を始めた。ディエップ・チードゥン。漢字で書くと狄其東。越青と呼ばれるヴェトナム系ストリート・ギャングのボス。年齢は二十八。

狄の視線が呉達龍を捉えた。ディエップがうなずくと、取り巻きの連中が席を開けた。呉達龍は取り巻きたちを睨みながら足を踏みだした。

「なにを食う、おっさん？」

狄は笑っていった。円卓に頬杖をつき、煙草をくわえていた。

「伊麵」

呉達龍は狄の隣に腰をおろした。

「ここはヴェトナム・レストランだぜ、おっさん」

「おれは“おっさん”じゃない。呉先生だ」

「固いこというなよ、おっさん。おれたち、なあなああの仲じゃねえか」

呉達龍は腕を振った。狄がくわえていた煙草が吹き飛んだ。

「なにしやがる!？」

狄の手が腰にのびた。

「その銃で何をやる気だ？ おれを撃つのか？」

「おっさん、からかうのはよしにしようぜ」

狄の手がとまった。狄はじろりと呉達龍を睨み、荒い息を吐いた。

「さっき、ポート・ロードウェイで殺しがあつた」

呉達龍は煙草をくわえた。煙草の先をこれ見よがしに狄に向けた。わななく唇 - - 狄はライターを取りだし、呉達龍の煙草に火をつけた。

「殺しがなんだったんだよ。おれはずっとここにいたぜ」

「落ち着けよ。だれもおまえをパクるとは言ってない」

呉達龍は煙を吐きだした。煙が渦を巻いてのぼっていく。それを見ながら自問した - - こんなところでおれはなにをやっている？ 答えはわかっていた。金のため。金を貯めて、広州にいる家族を移民させるため。そのためなら糞だって食うだろう。

「殺したのは白粉が切れた台湾のガキだ。バックはいない。こっぴどく脅されればべらべら喋りだすタイプだ」

「そいつ、おれのところで白粉を買ってたのか？」

「おれにはそういった」

「名前は？」

「王志安。自分のことを小安とっていたな。白人の馬鹿な刑事たちがあいつから事情を聞きだすにはしばらく時間がかかる。今のうちに白粉をどこかに移して姿を隠せ」

狄が鋭い声を発した - - ヴェトナム語。取り巻きたちが一斉に緊張するのがわかった。いくつかのやり取り。狄がなにかを命令した。取り巻きどもが四方に散った。店の中にあるヘロインを始末しにいったのだ。

「助かったぜ、おっさん。半年前にも手入れをくらったばかりだからな」

呉達龍はそれには答えなかった。じっと狄の目を見つめていた。狄の手が動いた。ジーンズの尻ポケット。分厚く膨らんだ財布。抜き取られる百ドル札 - - 五枚。

「とっておいてくれ」

呉達龍は差し出された金を無視した。

「これだけか？ おれが教えに来なけりゃ、警察に白粉を押収されていたぞ。そうになったら、おまえ、いくら損をすることになったんだ？」

「あんまりがめついこというなよ、おっさん。最近、評判悪いぜ。龍の旦那は最近がめつすぎるってな。おれたちみたいな悪にたかるのはいいが、ほどほどにしておきな」

狄は薄笑いを浮かべた。頭の中でなにかが爆発した - - 呉達龍は立ち上がった。銃を抜いた。

「おまえを逮捕する。両手を頭の上に乗せて後ろを向け」

「なにとち狂ってるんだよ、おっさん？」

「いわれたとおりにしろ」

呉達龍は銃身で狄の顔を殴った。店内のざわめきがやんだ。狄の取り巻きど

もが怒鳴った - - 沈黙が破られた。

「警察だ！」英語と北京語で叫んだ。それから、狄と取り巻きどもに向かっていった。「黙れ、じっとしてないと、こいつを撃つぞ！ さあ、狄。さっさと両手を頭の上に乗せて後ろを向け」

「こんなことをして、ただですむと思ってるのか」

呉達龍は銃口を狄の鳩尾にめり込ませた。狄は腹を抱えてうずくまった。そのうなじに銃のグリップを叩きつけた。手錠を取りだし、狄の両手にはめた。

「なめやがって、なめやがって、なめやがって!!」

喚きながら狄を引き起こした。手早く身体をチェックした。九ミリのオートマチック。ナイフ。そして、ビニールの包みに入れられた白い粉。

「銃器の不法所持、ならびにヘロインの不法所持だ。おまえを逮捕する」

呉達龍は狄の耳元に囁いた。唇が吊りあがっていた。

\* \* \*

呉達龍は狄を車に乗せた。取り巻きどもが後を追ってきた。気にしなかった。

「ふざけんなよ、おい。いつまでこんな馬鹿げたことを続けるつもりだ」

狄の口から血が飛んだ。

「おまえがなめた口をきくからだ。おれを甘く見るとどうなるか、思い知らせてやる。おとなしく乗ってるよ」

呉達龍は狄の手錠をリアシートの手すりに繋いだ。

「おっさん、おれたち仲間だろう？」

「おれは警官でおまえはたちの悪いチンピラだ」

呉達龍は運転席に乗り込み、車を走らせた。

「金がほしいんならくれてやる」

「金の問題じゃない」

ゴア・ストリートを下りた。ルーム・ミラーに映る取り巻きども - - 空き缶や石を投げていた。

手に狄を殴った余韻があった。頭の中が燃えていた - - そうなると、自分でも手がつけれない。だれかをいたぶることでしかこの炎は消すことができない。

「なあ、おっさん。勘弁してくれよ」

泣き言 - - 無視して車を走らせる。ダウン・タウンを突っ切って、スタンレイパークへ。ひとけのない駐車場で車をとめた。



ルーム・ミラーを覗いた。狄 - - 視線が絶え間なく左右に動いていた。鬱蒼と繁る森。その奥の闇。さっきまでの威勢のよさは完全に消えていた。呉達龍は警棒を握った。運転席を降り、リアシートに滑り込んだ。

「な、なにをやる気だ？」

「聞きたいことがある」

呉達龍は歯を剥いた。

「おまえ、白粉をどこで仕入れてる？」

「あんたの知ったことじゃねえ」

「最近、カナダのあちこちで大量の白粉が押収されてる。だれかがタレこんだって話、聞いたことがないか？」

「そんなことをするやつ、いるわけがねえだろう。もしバレたら、てめえだけじゃなく、一族皆殺しだぜ、おっさん」

警棒で狄のがら空きの脇腹を小突いた。うめき声 - - 最高の子守り歌。

「痛えよ.....くそっ」

「もう一度聞くぞ。白粉はどこから仕入れてる？」

「あんた、知ってるじゃねえかよ」

警棒。額を一撃。手錠の鎖がこすれる音。「あちこちの組織を警察にタレこんでるのはだれだ？」

「知らねえって」

警棒 - - 向こう脛。頭の中の炎が燃え盛った。

「おれを舐めるなよ、狄」

「さっきのことは謝る。だから - - 」

警棒 - - 鳩尾にめり込ませた。

「おまわりにいいようにいたぶられたなんて、恥ずかしくてだれにもいえないだろう、狄？」

「勘弁してくれ.....頼む。あんたのいうことはなんでも聞くからよ」

「おれの口を塞いだ方がいいんじゃないのか、狄？」

「そんなこと、しねえよ。あんたのバックには鄭奎がついてるじゃねえか。鄭奎の後ろには - - 」

呉達龍は狄の髪の毛を掴んで引き寄せた。

「それ以上いうと、本当に死ぬぞ」

「勘弁してくれって。あんたを恨んだりやしねえよ。今夜のことはおれが悪か

った。調子に乗りすぎた。だからよ - - 」

「わかったよ、狄。これぐらいで許してやる」

呉達龍は警棒を助手席に放り投げた。狄がほっと息をついた。その横顔を張り飛ばした。狄が声を発しなくなるまで殴りつづけた。

\* 5

書類仕事 - - いくらタイピングしても書類が減ることはない。ハリィはため息を洩らし、書類を投げ出した。

昨夜の馬鹿げた騒ぎ - - 検挙者三十八名。ほとんどが銃器と麻薬の不法所持。それぞれの調書を今日中に提出しなければならないというのに、昼を過ぎても半分も進んでいなかった。

ハリィはタイプの手をとめた。首を回した。関節が嫌な音をたてた。コーヒーを飲むために腰をあげた。オフィスの入口に、レイモンド・グリーンヒル警部が立っていた。ポール・スチュワートのトラッドスーツ。鼈甲縁の眼鏡の奥でグレイの目が冷たく光っていた - - その目がオフィスを一回りし、ハリィの上でとまった。

「ハリィ、オフィスまで来てくれ」

「今すぐ行きます」

グリーンヒルが背を向けるのを待って、ハリィは顔をしかめた。コーヒーを飲もうなんて思わなければよかった。ネクタイの結び目を直し、ハリィはグリーンヒルの後を追った。

「なんでしょう、警部？」

グリーンヒルのオフィスは相変わらずだった。たぶん、CLEU内でもトップクラスの清潔さ - - 他人を息苦しくさせる。

「座りたまえ、ハリィ。コーヒーはどうだ？」「いただきます」

ハリィはデスクの横の椅子に腰をおろした。グリーンヒルはインターカムでコーヒーを注文した。

「キャサリン・ヘスワースと婚約したそうだな」

ハリィは思わずグリーンヒルの顔を見た。

「どうして知ってるんです？」

「今朝、オフィスに来る前に州政府の庁舎に顔を出してきた。みんな、その噂で持ちきりだった。噂のもとにはヘスワース州議会議員ご自身だ」

「参ったな」

「おめでとうというべきかな。いずれにせよ、ミスタ・ヘスワースは次の下院選挙に出馬するつもりだろう？ 徹底的に利用されるぞ、ハリィ。博愛主義はミスタ・ヘスワースの政治色だ。“わたしの娘、キャサリン・ヘスワースは、前途有望な日系カナダ人の青年と婚約しております。このこと一つを取っても、わたしがどれだけ人種差別主義者を憎んでいるかの証明になりえます”」

グリーンヒルはヘスワースの声を真似ていった。

「出世のためとはいえ、これが君自身の幸せに繋がるのかどうか、わたしには疑問だな」

「わたしは純粹にキャサリン・ヘスワース個人を愛しています。だから、婚約したんです - - ねえ、警部。くだらないゴシップはこれぐらいにして本題に入ってください。昨日の馬鹿げた騒ぎのおかげで書類仕事が溜まってます」

「だったら、君もうぶな警官のふりをするのはやめたまえ。わたしは君に警官の仕事を一から教えた。君がどんなタイプの人間なのかもわかっている」

「どんなタイプなのか教えてくださいよ」

「君は冷徹な人間だ。キャサリン・ヘスワースを愛している？」冷笑。「本当のところは憎んでいるといった方が正しいんじゃないか？」

こみあげてくる怒り - - こらえようとした。こらえきれなかった。

「わたしが冷徹な人間なら、あなたはなんでしょうね？ 冷酷な人間ですか？」

「わたしは職務に忠実な警官だ。もっとも、忠実過ぎて一部の警官には嫌われているがね」

オフィスのドアが開いた。秘書官のミシェル・ホーンがコーヒーカップを乗せたトレイを運んできた。

「あら、ハリィ。婚約おめでとう」

「君まで知っているのか、ミシェル」

デスクに置かれたコーヒーカップを苦々しく見つめた。

「これであなたも警部の立派な後継者ね。出世の糸口を見事掴んだじゃないの」

ミシェル - - 彼女のオフィスで、一度ファックしたことがある。最悪だった。ミシェルはハリィのが小さすぎるといって笑った。ハリィはミシェルのがゆるすぎるといって怒った。疲労感が襲ってきた。首の付け根にしこりができたような感じだった。

「ミズ・ホーン。無駄話は別の機会にしてくれないか」

グリーンヒルの冷たい目が光った。

「申し訳ございません」

ミシェルはオフィスを出ていった。冷笑だけを残して。だれもがハリィのことを笑っている - - やめろ、いつもの自意識過剰だ。

「彼女のいうとおり、君は出世の糸口を掴んだ。ただし、あくまでも糸口だ。もし、ミスタ・ヘスワースが下院選挙に勝てば、君の出世は約束される」

ハリィはコーヒーに口をつけた。苦みが口に広がった。グリーンヒルの好み - - 濃いエスプレッソ。カナダ人の舌にはあわない。

「用件はそれですか？」

ハリィはかまをかけた。グリーンヒルは動じなかった。

「ミスタ・ヘスワースと話をしてきたよ。彼は選挙の動向についてわたしに聞いてきた。彼は鄭奎のことを気にしているんだ」

頭の中のファイル - - めくる必要もなかった。鄭奎は一九七〇年代前半に香港からカナダに渡ってきた。一代で巨大な建築会社を作り上げ、新移民の伝説と化した。黒社会との繋がりを絶えず噂されているが、馬脚を露したことはない。ここ数年は政治に色気を見せており、次の下院選挙に出馬すると見られている。

「去年のクリスマスに、どこかのナイトクラブが放火されましたね。犯人はつかまりませんでした。パットが噂を聞きつけてます」

「どんな？」

「あそこの店主が鄭奎の政治資金の寄付を断った。黒社会の連中がやってきて、見せしめに火をつけた.....よくある話です」

「そういう事件、あるいはそういう噂を君やパットはどれくらい聞いている？」

ハリィは記憶の襞を探った。報告書には書かなかったチャイナタウンの諍いおどおどした目、だれかにこっぴどく殴られた痕が残る顔、ひそひそ話。

「はっきりこれといえるのはありませんね。ただ、思い当たる節はいくつかあります。他の連中にも聞いてみましようか？」

「いや。この件は君以外の耳に入れるつもりはない」

「警部 - - 」

グリーンヒルは苛立たしげに眼鏡を外した。冷たいグレイの目 - - 冷たさを

増した。

「ミスタ・ヘスワースは鄭奎が暴力を背景にして票集めを行っていると睨んでいる。君も知ってのとおり、中華系の移民はあまり警察と関りたがらない。そこを利用しているんだ、とな。どう思う？」

「充分ありえますね。生不入官門、死不入地獄」ハリィは北京語でいった。「連中の口癖です。意味はわかりますか？」

グリーンヒルは首を振った。

「生きている間は役所に入るな、死んでからは地獄に落ちるな」

「君のいいたいことはわかった。実は、わたしもある噂を聞いたんだ。聞きたくはないかね？」

「聞きたくなくても聞かされるんでしょう。どうぞ、話してください」

「鄭奎は警官と懇意にしているそうだ。暴力に屈しない連中に対しては、その警官が出向いていく。罪をでっちあげたり、私生活を調べあげていうことをきかせるらしい」

「そんな馬鹿な」ハリィは笑った。「ヴァンクーヴァーやリッチモンドの警官にそんなことはできませんよ。中国語も話せないやつらになにができるというんです」

「話せたら？」

グリーンヒルの冷たい目は瞬きもしなかった。ハリィは寒気を覚えた。

「どういうことですか？」

「わかっているだろう。中国系の警官だよ、鄭奎から金を受け取っているのはな」

「うちにも、ヴァンクーヴァーやリッチモンドの市警にも、騎馬警察にも中国系の警官は数えるほどしかいませんよ」

「それだけ調べるのが簡単だということだ。書類仕事は他の者にやらせたまえ。今から君には特殊任務をいいわたす」

グリーンヒルの魂胆がやっと読めた - - 遅すぎた。

「待ってください、警部。わたしの中国語では - - 」

「この仕事に中華系の人間を使うわけにはいかん。ミイラ取りがミイラになる可能性がある。それに、君はミスタ・ヘスワースの親戚になる予定だ。これが公式な任務でないことは、君にだってわかるだろう？ 君以外の人間にやらせるわけにはいかんのだ」

「しかし - - 」

「出世のためには汚いことをする必要もある。ミスタ・ヘスワースの力になれ。彼が選挙で勝つように協力しろ。そうすれば、君の願いはかなう。父親を見返すことができる」

ハリィは立ち上がった。

「それ以上、わたしの私生活に口を出したら、あなたでも許しませんよ、警部」

「わたしを叩きのめしたかったら、わたしより出世することだ、ハリィ。なんのために好きでもない女と婚約したのかをよく考えろ」

目の奥がちかちかした。なにかが喉を絞めあげて呼吸が苦しかった。

「レイモンド」

「それから、ミシェルに口止めしておいたほうがいい。君が彼女とファックしたことをわたしは知っている。ということは、他にも知っている人間がいる可能性があるということだ」

「レイモンド - - 」

電話のベルが鳴った。ハリィは口を閉じた。グリーンヒルが電話に出るのを見た。すぐに電話が終わりそうにもないと悟ると、身体を反転させた。荒々しくドアを叩きつけ、グリーンヒルのオフィスを後にした。

\* \* \*

「くそったれ！」

ハリィは叫んだ。新しい任務 - - 仲間の警官を調査する仕事。犬の仕事。なにが出世のためだ。せめてもの救いは調査対象が中華系の警官に限られるということだ。白人警官はハリィがなにをしようと思わないだろう。

気晴らしが必要だった。胸のむかつきを抑えるなにか - - 昨日の夜の光景が頭に浮かんだ。恋愛映画のスクリーンから抜け出てきたようなふたり。李少芳と正体不明の男。犯罪の匂いがした。ハリィを見つめた目。あの男を追い詰める - - 刑事の勘が囁いていた。オフィスに戻り、書類仕事を放り出した。代わりにファイルに目を通した。中華系移民のブラックリスト。李少芳が乗っている。だが、男の写真を見つけることはできなかった。

「クラレンス」ハリィは隣のデスクに声をかけた。「あんた、昨日の馬鹿騒ぎに加わってたかい？」

「ああ。ガキどもをぶん殴って気分がよかったよ」

クラレンス・スンは間延びした英語で答えた。

「野次馬の中に李少芳がいたの、見たか？」

「いいや。いっただろう。ガキどもをぶん殴るのに忙しかったんだ」

舌打ちをこらえてハリィは言葉を続けた。

「今度ランチを奢るぜ、クラレンス。だから、他の連中に訊いておいてくれな  
いか。昨日、駐車場の周りで李少芳を見なかったかって」

「いいけどよ、香港の大老の娘になんの用だ？ 下手に触ると火傷するぜ」

「娘と一緒にいた男の方に興味があるんだよ」クラレンスの目が動いた。「 -  
- なにか知ってるのか？」

「噂だけだな、李耀明の娘がジゴロに騙されてるって話を、どこかで聞いた覚  
えがある」

「そのジゴロだ。名前は？」

「知らねえな。パトリックならなにか話を聞いているんじゃないか」

ハリィは電話に手を伸ばした。

\* \* \*

ヴァンクーヴァー、ダウンタウン。パットは寿司が食べたいといった。ハリ  
ィはジョージア・ストリートの寿司レストランに個室を予約した。パットはカ  
ウンターで食べたがるだろう。だが、パットと二人でいるところをだれかに見  
られるわけにはいかない。

パーキングに車をとめ、レストランに入った。顔馴染みのマネージャーが笑  
顔を向けてきた。

「加藤さんのお坊ちゃん。ずいぶんご無沙汰ですね」

日本語が耳に心地いい。だが、マネージャーの愛想笑いは不快だった。

「お坊ちゃんはよしてくれ」

「まあ、そうおっしゃらずに。お父様はお元気ですか？」

「もう半年以上顔を見てないよ。個室を予約してる。連れが来るから通してく  
れ」

マネージャーの顔が曇った。

「もうお越しになっておりますよ」

ハリィは腕時計を覗いた。新記録 - - パットは餓えているに違いなかった。

まだ話し足りなそうなマネージャーをその場に残して、ハリィは個室に向か  
った。個室といっても、金屏風で周りからしきただけの悪趣味な空間だった。

「日本語っていうのはいつ聞いてもとらえどころがないな」

にやついたパットの顔が目映った。

「おれには台湾人の北京語も同じように聞こえるがな」

パットの真向かいに腰をおろした。突き出された手 - - 油にまみれ、薄汚れている。マネージャーの顔が曇った理由がわかった。くだらない。ハリィはパットの手を勢いよく握った。

「電話じゃえらい勢いだったな。なにがあった？」

「あんたの地獄耳に頼りたいんだ。人間の食べ物を使うのは久しぶりだろう。なんでも好きなものを食べよ。山葵をたっぷりつけてな」

「おまえの金か？」

「親父の金だ」

パットは嬉しそうに笑った。

「とりあえずビールを頼んである。おまえのくそつたれな親父に乾杯しようぜ」

「ビールだって？ 昼間からいいのか？」

「固いことはいうなよ、ハリィ。昨日のあの騒ぎのせいでむしゃくしゃしてるんだ。ビールぐらいどうってことはないさ」

アル中パット - - 警官仲間の口さがない噂。噂がなければ警官は生きていけない。昼間からバーで飲んだくれてるパット。兇捜査は辛いさ、酒ぐらい許してやれよ、ここはアメリカじゃないんだ。何度、そんな噂を聞いたらう。

ハリィは頭を振った。出世のことを考える - - グリーンヒルの声が呟した。

ビールと刺し身が運ばれてきた。運んできたのはマネージャーだった。刺し身はサーヴィスだった。パットは奇声をあげてキリンビールをグラスに注いだ。特別に運ばせた山葵を大量に醤油にとかした。中国人の食べ方で、パットは刺し身を食べはじめた。

「板前さんに任せるから、握りをどんどん運んできて。おれはともかく、おれの友達は普段、まともな飯を食べてないんだ」

「かしこまりました」

慇懃に頭を下げてマネージャーが退場した。

「で、おれに聞きたいことってなんだ？」

パットはサーモンの刺し身を頬張り、ビールで流し込んだ。

「昨日の夜、野次馬の中に李耀明の娘がいた」

ハリィは自分のグラスにビールを注いだ。昼間から酒を飲む息子を見たら、



父はなんと思うだろう。

「そういや、いたかもしれないな」

「男と一緒にだったよ。気がつかなかったか？」

「ああ、フランス野郎だろう」

「そいつのことを教えてくれ」

「有名な話さ。あの李耀明の馬鹿娘が、モントリオールから来た女たらしに入れこんでるってな」

モントリオール、ケベック - - C L E U のリストに載っていないのもうなずけた。

「そいつは自分が相手にしてるのが黒社会の大物の娘だってことを知ってるのか？」

「さあな.....おまえ、食わないのか？」

「おれは寿司をつまむ。それより、そいつの名前を教えてくれ」

「知らんよ。みんなはフランス野郎って呼んでる。フランス語を話すいけない野郎だってな」

「調べてくれ」

パットは箸をとめた。まじまじとハリィの顔を覗きこんだ。

「なにをそんなに入れこんでるんだ、ハリィ？ 馬鹿な女が馬鹿な男に入れあげてるだけだぜ。そのうち李耀明が殺し屋を差し向けて、男は殺される。女は家に帰る。それだけだ」

「わかってる。だが、どうも気になるんだ。調べてくれるか、パット？」

「いいさ。寿司が食えるのはおまえのおかげだ」

パットは破顔した。ちょうど、寿司が運ばれてくる場所だった。

\* 6

カナダ - - ヴァンクーヴァー。行ったことはない。行きたいと思ったこともない。

湾仔から中環 - - 富永脩はタクシーを拾った。軒尼詩道を西へ、皇后大道中から狭い路地に入り、坂を登った先で降りた。蘭桂坊 - - 白人たちのパラダイス。いくつもの洋風の酒場。ブロンドやブルネットの髪をなびかせた白人たち - - 片手にはビール瓶。香港人の姿は極端に少ない。白人たちのパラダイス。来るたびに胸がむかつく。

「クソどもが、とっとと国に帰りやがれ」

富永は独りごちた。人ごみをかき分けた。一軒の飲み屋の前で足をとめた。

カサ・ノヴァ 黒い扉に金のイタリック文字。周囲の雰囲気からは浮き上がった店。ドアを押す - - ダークスーツを着た白人がふたり。バウンサー。鋭い視線が富永を射貫いた。

「ミスタ・リーに用がある」

富永は英語でいった。白人たちの視線は揺るがなかった。右の男は固太り、左は長身。固太りはブルネット、長身は長いブロンドを頭の後ろで結っていた。

「お名前は？」

ブロンドがいった。

「知ってるだろう」

「お名前は？」

固太りがいった。

「サムだ。早く行ってボスに伝えてこい。ゴリラ野郎め」

固太りが前に出ようとした。ブロンドがとめた。

「口には気をつけるよ、サム。いつもいってるだろう」

「おカマが気どってるんじゃないか」

ブロンドは短く口笛を吹いた。目が細くなった。

「ずいぶん機嫌が悪そうじゃないか」

富永は嗤った。

「そのゴリラに尻を犯されるのはどんな気分だ、え？」

固太りが吠えた。ブロンドは涼しげに微笑んだ。

「あんたの挑発には乗らないよ、サム」ゴリラに顔を向けた。「カール、ボスにお客だと伝えてこい」

「いわれっぱなしで黙ってるつもりか、イアン？」

「いいからいってこいって」

ブロンドは固太りの尻を押した。固太りは富永を睨みながら店の奥へ姿を消した。

「いくらおれがゲイでもな、サム。あんな下品なやつは相手にしない。覚えておけよ」

「おれはジャップだがな、イアン。おまえを見てるとむかついてくるぜ」

ブロンド - - イアンは首を振った。

「あんたはインテリのくせに時々わざとチンピラみたいな真似をする。おれに

は理解できないね」

「今度、おれのをしゃぶってくれ。そうしたら教えてやる」

イアンの表情が変わった - - 唇の端が細かく震えた。絞りだすような声が聞こえた。

「ボスの許しが出たら、あんたを残酷に切り刻んでやる」

「その調子だ、イアン。気どってるより、そっちの方がよっぽどました。おれの尻を犯しながら、その袖の下に隠してるスティレットでおれを切り刻め」

「本当に、いつかだれかに殺されるぞ、サム」

「望むところさ」

富永は神経質そうに笑った。

\* \* \*

黒で統一されたインテリア。ブロンドのホステス。衣装は黒のタイトミニ・スーツ。黒いエナメルのパンプス。

秘書をイメージしてるのさ、サム。だれだって自分専用の秘書を持つような身分になりたいだろう？ それも、とびきりのブロンドの秘書だ。そいつを奴隷みたいに扱ってやる。アジア人の夢だ。それをおれが提供してやってるんだ。

李冠傑はそういつていた。お笑いだった。店の客は白人しかいなかった。

李冠傑 - - サミュエル・リー。おまえもサムか？ おれもサムだ。それからビジネスがはじまった。

李冠傑はカウンターの端っこに座っていた。葉巻をくゆらし、スコッチのオン・ザ・ロックをすする。後退した額、その上に茶色がかった短髪が申し分けなさそうにのっかっている。香港人ばなれした彫りの深い顔が退屈にくすぶっていた。イギリス人とのハーフ。広東語と同じように英語を話す。月の半分は北米大陸で過ごしている。それでも、中華の血の方が濃い。

富永はフロアを横切ってカウンターに向かった。李冠傑の吐き出す葉巻の煙を鼻で嗅いだ。李冠傑は富永に視線を向けようとしなかった。富永は李冠傑の横のストूलに腰をおろした。

「ご機嫌斜めだそうじゃないか、サム」

葉巻の煙。李冠傑はカウンターの中のバーテンダアの動きを目で追っていた。

「金髪の気どったおカマを見てると、いらいらしてくる」

「だから、おまえはだれからも嫌われる。この香港でおまえのことを気にかけてるのはおれと、おまえのボスだけだ。おれがおまえのことを気に入ってるの

はおまえに学があるからだし、おまえのボスがおまえを気にしてるのは、おまえが使える男だからだ。だが、他の連中は違う。知ってるか、サム？ 湾仔の連中が陰でおまえのことをなんて呼んでると思う？」

「日本鬼」

李冠傑が溜め息をついた。

「こういうときは知ってても知らないふりをしろよ、サム。だからおまえはみんなに嫌われるんだ」

「別に好かれないとは思っちゃいないさ。それより、あんたはどうなんだ、サム？ 退屈そうな顔をしてるじゃないか」

富永は李冠傑の方に手を伸ばした。放り出したように転がっていた葉巻を取りあげた。シガー・カッターで吸い口を切った。

「いつもと同じさ。くだらない連中を相手にして金を稼いでる。黒社会の連中に頭を下げて回ってる。死にたいぐらい下劣で退屈な人生だ」

李冠傑は“黒社会”という単語だけを広東語で発音した。ジッポのライターを取りだした。音をたてて炎があがった。富永は顔を近づけ、葉巻に火をつけた。煙を味わう - - 銘柄や、デリケートな味はわからない。ただ、高い葉巻だということがわかっただけだった。

「また鬱病がはじまったのか？」

「女にふられたんだ、サム。ゴージャスな女だった」

「アメリカ人か？」

李冠傑が富永に顔を向けた。富永の目を覗きこんだ。ゆっくり、首を振った。

「フランス女だ」

「処置なしだな」富永は指を鳴らした。バーテンダァが音もなく近寄ってきた。

「フローズン・マルガリータをくれ」

バーテンダァの動きが止まった。

「今の季節はフローズンは - - 」

「いいから出してやれ」

李冠傑の声 - - 重く沈んでいた。バーテンダァは弾かれたようにあとずさった。

「聞いてくれよ、サム。いい女だったんだ。東洋美術をビジネスにしている。そのくせ、フランス語しか喋らねえ。おれはフランス語を習ったぜ」

「おれにフランス語を聞かせるつもりならやめておけよ、サム」富永は李冠傑

に指を突きつけた。「アメリカ人やカナダ人なら、好きなだけ遊べ。だが、ヨーロッパの連中は別だ。あいつらの人種差別は年季が入ってるし、おためごかしもずっとうまい」

「おいおい、人の話は最後まで聞けよ、サム」李冠傑は嬉しそうに頬を震わせた。「おれはフランス女だといったがな、フランス人とはいわなかったらどう？」

富永は葉巻を灰皿に押しつけた。なにかを確認するように何度もうなずいた。

「カナダ人か？ モントリオール辺りの？」

「それよ。ニューヨークで知りあったんだ。半年ほど香港を留守にしたが、それもこれもあのモニカのせいだ。白人女にしちゃ小柄で、その分、胸は物足りねえが、あそこが抜群にいい。それにおしゃぶりもだ。サム、おまえにもあの感触を味わわせてやりたいぜ……」

李冠傑は夢見るような視線を宙に向けていた。薬でハイになったように喋っていた。富永は目の前に置かれたグラスに口をつけた。フロズン・マルガリータ - - 恭子の好きな酒。恭子もフェラチオがうまかった。うまいだけじゃない。好きだった。富永が声を荒げなければ、いつまでも口の中に含んでいた。

「おい、聞いているのか、サム？」

李冠傑がいらだたしげに葉巻の煙を吐きだした。

「ああ、聞いているさ、サム。いいところでカナダの話が出てきた。うちのボスから連絡があったらどう？」

「ああ、おまえ、ヴァンクーヴァーに行くんだってな。ご苦労なこった」

李冠傑の目尻が痙攣した。話を途中で遮られたことに対する怒りが目の奥でくすぶっていた。その視線を富永は受け流した。

「ヴァンクーヴァーの様子を教えてくれ」

「サム、中環界限でな、おれの話を守るやつはそうはいないぜ。おれとおまえはダチだが、だからって、おれの機嫌を損ねてもいいわけじゃない。おまえ、おれのことを怖くないのか？」

「おれが怖いのはおれのボスだけだ。ヴァンクーヴァーのことを教えろよ、サム」

「みんないってるぜ、サム。おまえは死に場所を探して香港に来たんだってな」

「馬鹿らしい」

富永は喉を震わせて笑った。

「ヴァンクーヴァーには呉達龍がいるぜ」

吐き出すように李冠傑がいった。富永の笑いがとまった。

\* \* \*

李冠傑から聞いたヴァンクーヴァー - - 中華系の見本市。入り組んでいて錯綜している。

昔からの華僑がいて、九十年代になって大挙して押し寄せた新華僑がいる。ヴェトナム系がいて、大陸の連中がいる。台湾の連中も数を増している。人が動けば、黒社会も動く。

昔からの連中はある程度まとまっている。新しい連中はばらばら。ガキどもがのさばっている。

李冠傑が挙げた名前 - - 凌松勇、張文健、鄭奎、呉達龍。

凌松勇は旧華僑系のボス、張文健は新華僑のボスのひとり。鄭奎は李耀明の昔の仲間 - - ただし、堅気。そして、呉達龍 - - 元香港皇家警察対黒社会捜査班のおまわり。やくざより下品でやくざより乱暴だと噂された男。富永は何度となく因縁をつけられ、小銭をせびられた。日本鬼 - - 最初にその言葉を使ったのも呉達龍だった。呉達龍を殺そうと思った。実行に移す前に呉達龍は香港から消えた。女房と娘を広州に残して。

ヴァンクーヴァー - - 呉達龍。どうせおまわりをやっている。それしかできない男だった。面倒なことになるかもしれない。

携帯電話 - - 広州へ。

「畏？ おれは香港のサムだ.....そう、湾仔の日本人だ。楊先生はいるか？ 変わってくれ」

携帯を耳に当てたまま、富永は煙草をくわえた。意味もなく明滅するネオン、その向こうにヴィクトリア湾、さらにその先は九龍の夜景。かりそめの時間とかりそめの土地 - - 欲望だけが渦巻いている。

「楊先生、湾仔のサムです。お願いがあるんですが.....呉達龍を覚えてますか？ えー、あのくそつたれのおまわりです。あいつの家族がたしか広州にいたんですが.....楊先生、もしわたしがお願いしたら、そいつらをさらうこと、できますか？」

富永は煙草に火をつけた。

\* \* \*

行きがけの駄賃 - - 富永は旺角に戻った。真夜中をまわった裏町。どこから

か爆竹の音が聞こえる。春節の真夜中。堅気の連中は家で新年を祝っている。人の気配はない。ネオンだけが皓々と輝いていた。

香港名物の工事現場。いつもどこかで古い建物が解体され、新しいビルが建築されている。足元に転がった鉄パイプ。拾い上げ、腰にさした。ジャケットで隠した。

情報は集めてあった。アソウ - - みかじめを集めてまわっている。集金が終われば、女を買う。ネオンがまたたいている - - 日本小姐。アダルトビデオがまき散らした幻想。日本の女はスケベでなんでもしてくれる。そこら辺に 日本小姐 の文字が飛び交っている。だが、日本の女がいるわけじゃない。幻想 - - すべては幻想だ。

緑と赤のネオンに照らされた粗末な雑居ビル。アソウが出てきた。にやけた笑顔。大きく開いた鼻の穴。売春宿の若い衆に送られて大物ぶっている。右手の脇にヴィトンのセカンドバッグを抱えている - - 金。アソウは鷹揚に手を振り、歩きだした。ビルの影 - - 暗闇。富永は嗤った。

彌敦道を西へ折れて三本目の路地 - - 上海街。人通りが途絶え、ネオンの明かりが途切れる。

富永はアソウに近づいた。鉄パイプを抜いた。気配に気づいてアソウが振り返る - - 顔を見られる前に鉄パイプを振った。鈍い音 - - 腕に痺れ。アソウがふっ飛んだ。血が飛び散った。ヴィトンがアスファルトの上に転がった - - 拾いあげた。アソウのうめき声。顔を両手で覆い、転げ回っていた。

鉄パイプを放りだし、富永は走りだした。

行きがけの駄賃 - - 五万香港ドル。多くはないが少なくもない。

彌敦道 - - 光の渦。富永は口笛を吹いた。

\* \* \*

リムジン - - 李耀明が用意した。大切な娘を救う騎士のために用意された白馬。まんざらでもなかった。

娘を頼む - - 李耀明はいった。

これが軍資金だ - - 李耀明は紙包みを用意していた。紙包みの中身は五万米ドルだった。

リムジンはごみごみした香港の道路を走った。

キャセイ航空、香港発ヴァンクーヴァー行き 256 便。この数年、カナダ行きのフライトは倍増した。啓徳空港は春節を故郷で祝い、ヴァンクーヴァーに帰

る移民たちでごった返していた。

富永脩はチェックインした足で免税店へ向かった。ビジネスクラス - - しかし、キャセイに喫煙席はない。八時間以上のフライト - - 酔っぱらって眠るしかなかった。

最高級のブランディを買い、ラウンジへあがった。ボトルに直接口をつけてブランディを飲んだ。周囲のエグゼクティブたちが嫌悪の目を向けてきた。富永はブランディを飲みつづけた。

\* 7

ウェスト・ヴァンクーヴァー。昔は白人たちの高級住宅街。九十年代からこっちは、中華系移民が大挙して押し寄せている。白にしろ黄色にしろ、住めるのは金持ちだけだということは変わらない。海とダウンタウンを見下ろして悦に入っている金持ちども。

呉達龍は唇をねじ曲げながら車を走らせた。早朝の道はずいていた。重々しく立ちこめた雲が細かな雨を降らせていた。出勤前の寄り道というには時間がかかりすぎるドライブ。それでも、鄭奎との約束をすっぽかすわけにはいかなかった。

ハイウェイをシャーマンで降り、サンディ・コーヴへ向かった。曲がりくねった道 - - そのまま下っていけば鄭奎の家が見えてきた。

鄭奎 - - 伝説になった新移民。七十年代、無一文で香港からやってきての上がった。建設会社を基盤にいくつもの企業を傘下におさめ、白人どもとディナーを食べる。金儲けだけでは飽き足らず、今度は選挙に打って出ようとしている。

呉達龍は正門を通りすぎた。裏門 - - 狗の出入り口。ベントを洗車していた運転手が面倒くさそうに鼻を鳴らし、セキュリティを解除した。虫けらでも見るような一瞥を呉達龍のホンダに向けた。挨拶はなし。北京語を喋れない福建人。呉達龍にも運転手に用はなかった。ゆっくり門があいた。門が開ききる前に呉達龍は車を敷地の中に滑り込ませた。

使用人用のガレージにスペースを見つけた。そこにホンダを駐めた。グラブボックスからホルスターに入ったオートマティックを取りだし、腰に取りつけた。鄭奎はタフな男を好む。いかつい顔にがっちりした体格で、いつも腰からオートマティックをぶら下げているおまわり - - 呉達龍が鄭奎に見初められたのにはそれなりのわけがある。



車寄せを横切って裏庭へ向かった。ゴルフクラブを振り回す音 - - 鄭奎の日課。ときには女房が付き合うこともある。裏庭 - - 綺麗に刈り込まれた芝生。呉達龍のアパートの何倍もの広さがあった。ゴルフクラブを振る鄭奎。その周りを飛び跳ねているゴールデン・レトリバー。鄭奎が打ったゴルフボールが専用のネットを揺らす。落ちてきた球を犬がくわえる。

ここに来るたびに、いつも呉達龍は歯を噛み締める。鄭奎と自分の間にどんな違いがあるというのか - - 頭の中で疑問が渦巻く。娘をこんな家に住ませたい - - 欲望が身体を引き裂こうとする。

犬が呉達龍に気づいた。吠えながら駆け寄ってくる。撃ち殺してやりたい - - 欲望をこらえて呉達龍は犬に手をさしだした。濡れた舌が掌を舐め回した。鄭奎が振り向いた。呉達龍は表情を消した。

「おはようございます。鄭先生」

呉達龍は広東語でいった。鄭奎が首を振った。

「リックだ、ロン。我々はカナダ人なんだぞ。何度いったらわかるんだ」

洗練からはほど遠い英語。それでも、意味は掴める。鄭奎の意志を汲みとることもできる。

「すみません、リック。英語にはまだ自信がないもので」

鄭奎は呉達龍に背を向けた。プラスチックのターフの上に球を置き、アドレスした。スウィング。クラブが球の芯をとらえた。球は弾丸のように飛び出してネットを揺らした。

「いつも使っていれば英語なんかすぐに上達する」

満足げな笑み。自分が持っている金と権力に満足している者の笑み。これ以上、なにが必要だというのか。

「こっちに来て、何年になる？」

「もうすぐ、二年です」

「短い割には、おまえの英語はちゃんとしている。我々のためなところは、どこへ行っても広東語で通そうとしてしまうことだ - - おい、終わりだ。片づけてくれ」

鄭奎が北京語で叫んだ。裏庭の奥から年老いた男が現われた。大陸からの難民。鄭奎は彼らを法外に安い賃金で雇っている。男がゴルフクラブを片づけるのを、鄭奎は苦々しげな顔で見守った。

「こいつはヴァンクーヴァーに来て四年になる。それなのに、英単語一つ喋る

ことができん。こういう輩は一生だれかにこき使われるだけだ」

呉達龍は足を踏みだした。

「リック、あまり時間がないんです」

「ああ、それはすまなかった。中で食事を取りながら話をしよう。サンドウィッチとコーヒーだが、食べるだろう？」

お粥と油条とポーレイ茶 - - 食事はすませてきた。だが、呉達龍はなにもいわずにうなずいた。

\* \* \*

「年寄り連中は頭が固い」

鄭奎はサンドウィッチを頬張った。右手に握ったリモコンでテレビのチャンネルを次々に変えた。ニュース番組が画面に映るとリモコンを置いた。

ニュース - - この夏行われる選挙の情勢。ブリティッシュ・コロンビア州。鄭奎とジム・ヘスワースの一騎討ち。ブロンドのキャスターがヘスワースが頭一つリードしていると告げていた。

「中華移民が一つにまとめれば、ヘスワースなど敵ではないんだがな」

「ですが、中華系移民を一つにまとめるのは至難の技ですよ」呉達龍はコーヒーをすすった。「古い華僑は我々新移民を苦々しく思ってます。新移民にしても、香港やら台湾やら大陸やら、いろんな連中がでたらめをやっていて、統制を取ることができないのが現状でしょう」

「だが、新移民のほとんどはわたしに投票するはずだ。わかっているか、ロン。グレート・ヴァンクーヴァーの全人口の二十五パーセント以上を中華系移民が占めようとしているのに、行政は相変わらず白人どもの手の中だ。もっと国会に中華系の移民を送りこまなければ、我々の伝統と文化は白人どもに蹂躪されるだけだ」

「リック、おれの前で建前を演説するのはやめてくださいよ」

呉達龍は知っている。鄭奎はヴァンクーヴァーの黒社会と結びついている。悪どく儲けている。国会議員になればその儲けが倍増する。

「あなたが何者であるのか、何を望んでいるのか、おれは知ってます。おれが待っているのは命令ですよ、リック。あれをしる、これをしる。命じてください。おれはそれをやってきます」

「チャイナタウンの年寄りどもをなんとかしてくれ、ロン」

呉達龍は顔の前に手をかざして振った。

「おれひとりじゃ無理ってもんです、リック。おれはただのおまわりですよ。張文健あたりに頼んだ方がいいんじゃないですか？」

テレビは天気予報に変わった。鄭奎はまた、リモコンを手にした。

「黒社会の連中を使って派手に動くわけにはいかん。わかっているだろう。ヘスワースのやつはわたしの動きに目を光らせている。こんな早い時間におまえを呼び出しているのはなんのためだと思っているんだ？」

鄭奎はモニタを睨んだままいった。

「しかし、リック……チャイナタウンの連中は結束が固い。しかも、トップにいるのは郭寶明だ。おれひとりじゃとても - - 」

「そこをなんとかしろ」

テレビ画面 - - アニメーション。デフォルメされた猫と鼠。猫が鼠を追いかけていた。鄭奎がリモコンを放り投げた。吳達龍は底光りのする目でテレビ画面を睨んだ。

「そのためにわたしはおまえに金を払っているんだ。違うか？」

「おれひとりじゃ無理ですよ」

吳達龍は繰り返した。

「なにか手を考えるんだ、ロン」

テレビ画面 - - 追いつめられた鼠が反撃を開始した。

「わたしが議員になれば、大陸にいる君の奥さんと娘がカナダに来る手助けをしてやれる」

甘い言葉 - - しかし、それしか縋る術はなかった。カナダは移民法を改正した。大陸からの移民は難しい。金がなければ、コネがなければ絶望的だ。

テレビ画面 - - 鼠が猫を撃退した。猫は鄭奎、鼠は吳達龍。そう考えると気分がましになった。

「わかりましたよ、リック。なにか、考えましょう」

吳達龍は腰をあげた。

「待て。まだ話がある」

「なんですか？」

「香港から人が来る」

「香港から？」

「李耀明の手下だ。あれの娘がろくでもない男にひっかかっているらしくてな、子守り役が派遣されるというわけだ」

李耀明。香港黒社会の大ボス。娘がヴァンクーヴァーにいるという話は聞いていた。

「それがおれになにか？」

「李耀明とは古いつきあいだ。助けてくれといわれたら、むげに断るわけにもいかん。あれの手下がなにか助力を求めてきたら助けてやってくれ」

鄭奎と李耀明 - - 七十年代のヴァンクーヴァー。二人の新移民の成功物語。一人はヴァンクーヴァーに残り、もう一人は香港に帰った。ヴァンクーヴァーに来る中華系移民は、必ずこの二人の話を聞かされることになる。しかし、聞かされるのは噂と推測だ。真実はだれも知らない。

「香港から来るという男の名前は？」

「オサム・トミナガ。日本人だそうだ」

日本鬼のサム - - 命知らずを気どったくそ野郎。湾仔で肩で風を切って歩いていた。その姿を見るとむかついて、なにかといいがかりをつけた。

サム - - 横顔が脳裏に浮かんだ。背中が震えた。

\* \* \*

凶悪犯罪課のオフィスは閑散としていた。当直の刑事がふたり、眠たげに目を瞬いている。冷めたコーヒーをすすっている。

「早いじゃないか、ロン」

当直のひとり - - スタントンが顔をあげた。

「ちょっと調べたいことがあってな」

呉達龍は自分のデスクに座った。ガラクタ置き場のように散らかった机の上。いくつかの伝言。目を通す - - くだらない。メモを捨てる。スティールの収納棚に向かい、目当てのファイルを探した。ファイル - - ダウンタウンのチャイナタウンを根城にするやくざたちのブラックリスト。写真と名前に目を通した。神経になにかがひっかかってくるのを待った - - 時間の無駄。連中のことはすべて頭に叩きこんである。今さら新しい情報が得られるはずもない。

オフィスが騒がしくなってきた。肩を叩かれた。

「精が出るじゃないか、ロン」

呉達龍は顔をあげた。ケヴィンが微笑んでいた。

「ドレイナンにくれてやる餌を探さなきゃならないからな」

「午後一でミーティングをするらしいぞ。張り切らなきゃな」

ケヴィンは自分のデスクに向かっていった。呉達龍は唇を噛んだ。苛立ちが

募る - - ヴァンクーヴァーに来てから、苛立ちが消えたことはない。

ミーティング - - ドレイナンの赤らんだ顔が脳裏に浮かんだ。

「ケヴィン」呉達龍はファイルを脇の下に抱えこんだ。「今の話、聞かなかったことにするぜ」

「おい、ロン。そいつはまずいぜ」

「あの豚野郎がなにかいいたら、適当にごまかしておいてくれ」

呉達龍はオフィスを後にした。廊下を出て左、署の奥へ向かった。出入り口は右。だが、そちらに向かえばドレイナンと鉢合わせするおそれがある。視線を落として先を急いだ。いくつかの廊下を曲がると、煙でいぶされたような空間が広がった。署内でただ一ヶ所の喫煙エリア。コーヒーの自販機にパトロールの警官たちが群がっている。呉達龍はファイルを空いているテーブルの上に置いた。ポケットの中の小銭を探した。舌打ち - - 小銭がなかった。

「だれか、悪いが小銭を貸してくれないか」

警官たちが振り返った。口を開く者はなかった - - 全員が白人だった。全身の血が沸騰するような感覚に襲われた。

「黄色人種には小銭も貸せねえっていうのか？」

呉達龍は口を開いた。冷たい声が漏れてきた。

「貸すよ」

背後からの声 - - 反射的に振り返る。同じ東洋人がコインを放ってよこした。呉達龍はコインを受け取った。訛りのない英語。艶やかな肌。たかそうなスーツ。中華系ではない。中華系なら北京語が広東語で話しかけてくる。日系か韓国系が - - いずれにせよ、どこかで見た顔だった。ただ、どこで見たのかが思い出せなかった。

「悪いな」

沸騰していた血が冷めていく。呉達龍はわざとらしく警官たちをかき分けた。自販機にコインを放りこんだ。紙コップにコーヒーが注がれる。待ちながら考えた - - 思いだした。ハロルド加藤。CLEUの捜査官。金持ちの息子。なにをとち狂ったか警官になった。親父の金でCLEUに引き抜かれ、アジア人だというだけの理由でアジア系組織犯罪班に放りこまれた - - そんなやつがなぜここにいる？

コーヒーを取りだし、振り返った。ハロルド加藤がファイルを覗きこんでいた。

「おい、そのファイルは部外秘だぞ」

「うちにも同じものがあるよ」

ハロルド加藤は動じなかった。童顔に微笑を浮かべ、手をさしだしてきた。

「CLEUのハロルド加藤だ。君の名前は？」

最後の科白は北京語だった。まずくはない。だがネイティブのそれからはほど遠い。

「呉達龍だ」

呉達龍は広東語で答えた。

「呉達龍」ハロルドは北京語でいい直した。「いい名前だな」

自慢げな笑い - - 広東語も北京語もわかるんだぞと訴えている。呉達龍はその笑みを無視した。差し出された手も無視した。

「コインは助かった。そのうち返す。悪いが忙しいんだ。CLEUのお坊ちゃんに付き合っている暇はない」

「冷たいことをいうじゃないか」

ハロルド加藤は英語でいった。相変わらず動じる気配はなかった。呉達龍はコーヒーに口をつけた。苦くて熱いだけだった。煙草をくわえ、火をつけた。ハロルド加藤が顔を歪めた - - 煙草には弱いらしい。

「二、三、質問に答えてくれたら消えるよ」

「おれは忙しいんだ」

煙草の煙をハロルド加藤にふきかけた。ハロルド加藤の表情が動いた - - 目の奥に敵意とも取れる光が浮かんで消えた。

「一昨日の夜、リッチモンドでガキどもの出入りがあったの、知ってるだろう？」

「知らん」

「そこで、李少芳を見た」

ハロルド加藤が顔を覗きこんできた。呉達龍は耐えた。つい一時間前に話題に登った女の名 - - 頭の中で警報ベルが鳴り響いた。

こいつの狙いはなんだ？ こいつはここでなにをしている？

「李耀明の娘だな。カナダの市民権を取得してリッチモンドに住んでいる。若い娘だから、夜、出歩くことも珍らしくはない。それがどうしたっていうんだ？」

「見たこともない若い男と一緒にいた。李耀明の娘だぞ、気になるだろう？」

「おれはならんな。日々の仕事をこなすので精一杯だ。金もコネもないアジア系の移民は、この国で生きていくのに苦労する」

「どういう意味だ？」

呉達龍は笑った。若造の顔つきが変わっていた。痛い所を突いてやったらしかった。

「別に、深い意味はない。おれにはおれの仕事があるんだ。とっとと消えてくれ」

「待ってくれ、もう少し話を - - 」

呉達龍はハロルド加藤の身体を太い腕で押しやった。

「おまえさんもしつこいな」

「これも仕事なんでね」

ハロルド加藤の顔に宿っていた表情は消えていた。呉達龍は煙草の煙を深く吸いこんだ - - ゆっくり、ハロルド加藤に吹きつけた。

「失せろ」

ハロルド加藤が驚愕した。

「日本語ができるのか？」

できはしない。香港にいたころ、サムによく浴びせられた言葉を口にしただけだった。

「どこで日本語を覚えたんだ？」

ハロルド加藤は英語で問いつづけた。呉達龍はそれには答えなかった。視線をファイルの上に落とした。意識からハロルド加藤の存在をしめだした。

\* \* \*

午後一のミーティング - - はじまる頃を見はからって喫煙エリアを後にした。きっかり一時間、ドレイナンに出くわすことはない。

呉達龍は総務課のドアを押し開けた。

「小姐、頼みがある」

サンドウィッチをぱくついていた呉海媚が顔を向けてきた。同じ呉姓だということ、なにかと助けになってくれるオールドミス。

「あら、龍哥。珍しいじゃない。わたしになにをしてほしいの？」

「データベースにアクセスしてCLEUの捜査官のプロファイルを呼び出してほしいんだ」

呉達龍は広東語をまくしたてた。オフィスにいるのは白人ばかり。だれにも

意味は理解できない。

「CLEUの捜査官？ どうして？」

「やってくれ、マギー。頼むよ」

「わかったわ」呉海媚は肩をすくめた。「その捜査官の名前と所属部署は？」

「ハロルド加藤。対アジア系組織犯罪班だ」

「少し待ってね……」

呉海媚の指がキーボードを叩きはじめた。やがて、コンピュータのモニタにハロルド加藤の顔が浮かび上がってきた。

「手に入れたわよ。プリントアウトする？」

「頼む」

「可愛い顔をしてるじゃない、この子」

「金持ちの日本人だ」

呉達龍は吐きだすようにいった。

「あら、金持ちの白人よりはよっぽどましじゃない」

そのとおりだった。

プリンタが用紙を吐きだしはじめた。呉達龍は吐きだされた紙を手を取った。

「どういうことなのか、説明してくれるの？」

「そのうちな、呉小姐」

プリントが終わるのを待って、呉達龍は総務のオフィスを出た。

ハロルド加藤 - - 父はアキラ加藤。パシフィック - アジア・トレーディング社社長。母親のケイコ加藤は一九七九年に死亡 - - 押しこみ強盗に殺害される。兄弟はいない。ブリティッシュ・コロンビア大学法学部卒。一九九三年、ヴァンクーヴァー市警に。翌年、CLEUに移動。未婚。賞罰なし。

平凡なプロフィール。神経にひっかかるところはなにもない。それでも - - 李耀明の娘。偶然か、それとも裏があるのか？

呉達龍は頭をふった。香港で得た教訓 - - 考えてもわからないことは無視しろ。わかることだけをしろ。

わかること - - 鄭奎のご機嫌を取る。ドレイナンに餌を与える。いずれにしても、チャイナタウン。ダウンタウンカリッチモンドか？ - - リッチモンドには李少芳がいる。ヘロインに溺れて身体を売るあの女がいる。

呉達龍は車を出した。リッチモンドに向かった。

\* 8



犬の仕事 - - 簡単だった。パットが知っていた。ヴァンクーヴァーに巣くう悪徳警官。アンダーグラウンドの連中ならだれもが知っている。知らないのは警官だけだ。

呉達龍。三年前、香港から移民してきた。粗野ではあるが成績優秀な警察官。白人どもはなにもわかつちやいないのさ - - パットは唇を歪めていった。呉達龍は街の古惑仔を脅して金をまきあげる。組織の仕事に目をつぶる代わりに親分連中から小遣いをもたらしている。鄭奎に飼われて犬のようにおべっかを使っている。香港でも同じことをしていたらしい。

鄭奎 - - ヘスワースのライヴァル。尻尾を掴め。

呉達龍を尾行するのはやめた。パットは、頭の回転の悪い粗野な男として呉達龍を説明した。実際にあった印象 - - 粗野だが、頭は悪くない。ハリィの出現に違和感を抱いていた。下手に尾行すれば悟られる。

ハリィは刑事部屋に向かった。

将を射んと欲すれば先ず馬を射よ - - 父親の口癖。意味はわかっている。何度も繰り返された日本語教育。熟語もことわざも日本人並に理解することができる。上着のポケットの中には発信器が入っている。

凶悪犯罪課のオフィスはざわついていた。思い思いの恰好をした刑事たち。九割が白人、残りが東洋系。

「ロナルド・ン刑事を探しているんだが」

ハリィは入り口のすぐそばにいた刑事に声をかけた - - 芝居がからぬように務めながら。

「ロナルド・ンだ？」 禿げあがり、赤らんだ額。ケチャップの染みのついたシャツ。「ああ、ロンのことか。いいか、坊や。ここじゃ、あいつのことをロナルド・ンなんて呼ぶやつはいない。みんな、ロンかドラゴンって呼ぶんだ。ロナルド・ンなんてのはな、どこかの間抜けが名乗る名前だぜ」

「ロンはどこにいます？」

「さてな。相棒に聞いてみるよ」

「相棒というのは？」

刑事は苛立たしそくに顔を歪めた。右手の人差し指をオフィスの置くに向けた。指の先 - - ハンサムなブロンドがいた。

「ケヴィンだ。この部署でロンのお守りがつとまるのはあいつだけだ」

ケヴィン・マドックス。CLEUのファイルにあった顔。ハリィは刑事に礼

をいった。刑事は鼻を鳴らしたただけだった。オフィスの中に足を踏み入れる。ハリィに注意を向ける人間はいなかった。

「ケヴィン・マドックス？」

ブロンドが振り返る。寝不足にむくんだ顔がハリィを見返した。

「なんだ、おまえ？」

「CLEUのハロルド加藤。あんたの相棒に用があるんだが……」

「ロンか？　ロンなら逃げたぜ」

「逃げた？　なにから？」

「うちの課長さ。こちこちの人種差別主義者だ。ロンは目の仇にされてるんだ。あんたも課長が姿を現さないうちに逃げた方がいいぜ」

「ロンはどこに逃げたんだ？」

「さてな……あんた、ロンになんの用だ？」

用心深げな声 - - しかし、本人が思っているほどには効果がなかった。

「いま、追いかけている事件の参考人が捕まらないんだ。いろいろ聞いてまわったら、ここのロンならなにかを知っているんじゃないかと思ってね」

「あんたが探してるのは中華系か？」

「そうだ」

ケヴィンの無遠慮な視線がハリィを上から下まで舐めまわした。

「あんたも中華系？」

「いいや。おれは日系だ」

「そうかい？」

ケヴィンは肩をすくめた - - どちらでも違いはないというように。

「悪いが、おれにもロンがどこにいるかはわからない。そのうち、連絡が入るだろう。名刺でも置いていってくれよ。これから、ミーティングなんだ。中国人どもの正月のせいで、めちゃくちゃだよ。あんたも知ってるだろうがね」

ケヴィンは腕時計を覗きこんだ。文字盤を盗み見る - - 午後一時。

「時間だよ。デスクの上に名刺を置いて行ってくれ。ロンと合流したら、あんたに連絡するようにしておくから」

書類をまとめて、ケヴィンは机を離れた。ハリィを気にする様子もなかった。チャンス - - ポケットから発信機を取りだした。机の上に散らばった私物と支給品。一瞬で吟味する。手錠の入った革のケース。勤務中は必ず携帯するはずだ。ケースを開けた。手錠を取りだした。ケースの奥に発信器を貼りつけた。

振ってみる。発振器はケースの底に張りついたままだった。手錠を収め、机の上に置いた。何食わぬ顔でオフィスを後にした。

\* \* \*

犬の仕事 - - しばらくはすることがない。

本来の仕事 - - チャイナ・マフィアの動向を探る。李少芳とボーイフレンド。あの夜の目つき。忘れることができない。リッチモンドへ。パットがなにかを掴んでいるかもしれない。

グランヴィル・ストリートを南へ。道はすいていた。オークストリート・ブリッジを渡ってリッチモンド。李少芳の家は、オフィスのファイルで確認してあった。

ブランデル・ロードを西へ、レイルウェイ・アヴェニューを南へ。白壁の家が続く。ヴァンクーヴァー郊外のベッドタウン。河の中州 - - 湿地帯。土地はべらぼうに安かった。あるとき、デヴェロッパが香港から高名な風水師を招いた。風水師はこの血を龍珠と呼んだ。地図を見れば、河の兩岸に挟まれた中州は、龍の口にくわえられた珠に見えなくもない。だが、でたらめだ。風水師は莫大な金をもらって香港に帰った。入れ代わるようにして、香港から人がやって来た。移民はみな、リッチモンド - - 龍珠を目指した。風水によって成功を約束された地を。今では、香港系移民はリッチモンド総人口の二十五パーセント以上を占めている。

ハリィは車を降りた。ひとときわ瀟洒な邸宅。静まり返っていた。年老いた中華系の女が間延びした動作で庭を掃いていた。家の持ち主は李耀明。住人は李少芳と黄葉 - - 庭を掃除している老女。他に何人かの黒社会メンバーが出入りしているのが確認されている。

ジャケットの内ポケットからバッチを取りだし、門に近づく。

「李小姐は在宅かい、お婆さん？」

北京語で老婆に声をかけた。老婆は顔をあげようとしなかった。ハリィは広東語で同じことを聞いた。

「あんた、どこの出身だい？ 酷い広東語だね」

「おれは中国人じゃないよ。李小姐はいるかい？」

老婆は手をとめた。ハリィが手にしたバッチを見つめた。

「警察が小姐になんの用だい？」

「先日、リッチモンドで悪がきたちが騒ぎを起こしたんだ。発砲事件があって

ね、目撃者を探している。騒ぎが起こった場所で小姐を見かけたのさ。それで、なにか聞けないかと思ってね」

警察学校で真っ先に教えられるカリキュラム - - うまく嘘をつけ。市民に真実を教えることはない。

「小姐は夜に外出するようなふしだらな娘じゃないよ。それに、この家は、警察がめったにやって来れるような家じゃないんだ。お帰り」

老婆の嘘も堂に入っていた。

「警官の話を聞いてくれる気があるかどうか、小姐に聞いてくれ」

「わたしを嘘つき呼ばわりする気かい？ 小姐はいないよ。とっととお帰り」

老婆は背中を向けた。取りつく島はなさそうだった。ハリィは首を振り、門を離れた。

近所の子の聞き込み - - ここ一週間ほど、だれも李少芳の姿を見ていない。

推論 - - 李少芳はケベックから来たチンピラと暮らしている。

肌が泡立った。このことが香港の李耀明の耳に入れば、リッチモンドに血の雨が降る。

ハリィは車に戻った。携帯電話でパットに電話した。

「畏？」

パットの声 - - 用心深く、苛立っている。

「おれだ。いま、だいじょうぶか？」

「夜にしてくれないか？」

「わかった。李少芳の件だ。まずいことになるかもしれない。また、電話するよ」

電話を切った。唇を噛んだ。日系人の限界 - - 決して中華系社会に入りこむことができない。パットの強力がなければ、満足な情報を仕入れることができない。望んで就いた部署ではない。しかし、成績をあげなければ出世の階段を昇ることもできない。

歯噛みしたい気持ちを押さえて車を出した。携帯が鳴った。

「畏？」

「わたしよ。変な中国語を使うのはよして」

キャスイだった。

「勤務中だよ、キャスイ」

「わかってるわ、ごめんなさい。でも、パパに頼まれたの。すぐあなたに連絡

を取ってくれって」

パパ - - ジェイムズ・ヘスワース。出世への糸口。

「ミスタ・ヘスワースがぼくになんの用だい？」

「明日の夜、パーティがあるの。今度の選挙に立候補する予定の人たちが集まって、クリーンな選挙を訴えるのよ。パパが、ぜひ、あなたにも出席してもらいたいって」

「それを望んでるのは君のパパなのかい？ それとも - - 」

「もちろん、あなたのお父様もパーティには出席するわ。ジム・ヘスワースの大切な後援者ですからね」

父親と顔を合わせる - - 気に入らない。それでも、ヘスワースの機嫌を損ねるわけにはいかない。

「行くよ。場所はどこだい？」

「フォー・シーズンズのバンケット・ホール。八時からよ」

「了解」

「わたしを迎えに来てくれる？」

「了解」

「クリスマスに買ったヴェルサーチのスーツを着てきて」

「了解 - - キャスイ、申し訳ないが、本当に工作中なんだ。今夜、電話するよ」

「待ってるわ、ダーリン」

ダーリン - - 背筋に震えが走った。ハリィは携帯電話を助手席のシートに叩きつけた。

再び、犬の仕事。カー・ナビゲーションをオンにする。最新のハイテク兵器。ケヴィン・マドックスの手錠ケースに仕込んだ発信機 - - モニタに映し出される道路地図の上で点滅していた。ハンサムなブロンドはまだ市警本部にいた。

「くそ。呉達龍はどこにいる？」

呟いた。犬の気分がわかったような気がした。

\* 9

ヴァンクーヴァー国際空港 - - 富永脩は香港とは異質の湿度を感じた。骨の芯まで凍りつくような湿気。空は低く、小雨がいつまでも降りつづいている。

足早にパスポートコントロールを抜けた。手荷物を受け取り、ロビィに出る。出迎えようのロビィは啓徳空港と同じだった - - ごった返している。春節を終

えた幸せな堅気たち。ロビィの一角に不自然な空間 - - 陰呑な雰囲気漂わせ  
た男たち。アルマーニのスーツにサングラスをかけた男が富永に顔を向けた。  
頬の筋肉がほころんだ。男は近寄ってきた。

「あんた、サムだな？」

香港訛りの広東語 - - 富永はうなずいた。

「あんたは - - 」

「おれは許光亮。マックと呼んでくれ。あんたのことは大老から聞いている。  
なんでもいいつけてくれ」

香港人のイングリッシュネーム - - 由来を聞いても無駄だ。連中は勝手にイ  
ングリッシュネームを名乗る。

「とりあえず、風呂に入りたい」

富永は目尻をこすった。ブランディがまだ体内に残っているような感覚を覚  
えていた。

「なかなかいい家を用意してある。そこへ行こう」マックは背中越しに声をか  
けた。「おい、サム哥の荷物をお持ちしろ」

マックの手下たちが飛んできた。富永は手荷物をひったくられた。

ベンツ S 500 - - リムジンよりは落ちる。だが、快適であることに変わり  
はない。昔見た夢が現実になったような錯覚に襲われた。

金を掴み、遊び暮らす - - 恭子と見た夢。シャブを打って、一日中やりまく  
り、くたびれきった揚げ句に見た夢。恭子は死んだ。富永は小指を失った。

ベンツはフレイザー河を渡ったところだった。前方にヴァンクーヴァーの街  
並みが広がっていた。

「あんたは大老の娘のことはどれくらい知っているんだ？」

マックに声をかけた。

「ほとんどなにも知らん。大老のいいつけでな、少芳小姐にはなるべく近づか  
ないようにしてたんだ。もちろん、ときどき様子はどうかがってたけどな。大老  
は、あの子を黒社会とは関係のない人間として育てたかったんだろう」

マックの横顔は苦々しかった。おそらく、李少芳のひねくれた根性に振り回  
されたことがあったのだろう。

「そもそも、おれらの縄張りにはヴァンクーヴァーの方にあるんだ。リッチモン  
ドには別の組織があって、おれらがしょっちゅう顔を出すと、きな臭いこと  
になるおそれがある」

「大老もそうだったよ。だから、日本人のおれが来たんだ。小姐をひっかけた野郎ってのは？」

「それもよくわからねえんだ。どうも、モントリオールから来た古惑仔らしいんだがな。一応、人を使って調べさせてるんだが、よその組の縄張りだもんで、うまい具合にはいかねえ。まだヤサも掴んでねえっていう体たらくさ。申し訳ねえんだがな」

ベントンはヴァンクーヴァー市内を進んでいた。香港や東京に比べると田舎臭さは拭えない。代わりに、落ち着いた雰囲気をかもし出している。

「ヴァンクーヴァーのことはどの程度知ってるんだ？」

「ほとんど知らない。北米大陸自体がはじめてなんだ」

「寒いのを除けば、いい街だぜ。白人どものレストランは死ぬほどまずいが、ちゃんとした中華レストランは腐るほどあるし、日本の鮭もいける」

富永はコートの内ポケットから地図を取り出した。香港で買い求めた地図。眺めるのは初めてだった。

「今はどの辺りを走ってるんだ？」

地図をマックに見せた。マックの指が地図の上をたどった。薬指に嵌められた太い金の指輪が光っていた。

「ここだ」

マックが指差したのはヴァンクーヴァーの西側だった。

「街の西側は住宅街でな、静なもんだ。あんたのヤサはそっちに用意してある」指が動く - - 東へ。「東側はいわゆるダウンタウンさ。正式にダウンタウンって呼ばれるのはこの辺りで、チャイナタウンがここらだ」

海に向かって突き出た岬。

「今夜の飯はダウンタウンで食おう」

富永はいった。

「おれはかまわないが……」

「家についたら少し休みたい。晩飯のときに、ヴァンクーヴァーのことをいろいろ教えてもらおう」

「そうだな、太平洋を渡ってきたんだ、くたびれてるだろう。夜までゆっくり休みな。女が欲しけりゃ、用意してやるぜ」

富永は地図を畳んだ。窓の外に目を向けた。

「そうだな。金がかかってもいいから、飛び切りの女をひとり、用意してくれ」

\* \* \*

東京で生まれ育ち、香港へ渡った。土地の狭さが身体に染み込んでいる。富永脩は部屋の中を歩き回った。だだっ広いダイニング、書斎、ベッドルームとゲストルームはふたつずつ、トイレとバスルームも二ヶ所 - - 眩暈がしそうな広さだった。

富永はキッチンに回った。そこだけ生活臭が拭い落とされていなかった。ここに住んでいただれか - - 追いだされた。富永のために。李耀明の威信はヴァンクーヴァーでも揺らぐことがない。

荷物をほどき、衣類をクローゼットに押しこむと、することがなくなった。ダイニングのソファに身を投げだし、テレビをつけた。こちらの英語に耳を馴らしておく必要があった。広東語訛りの英語に馴れた耳には辛い作業だ。

リモコンのボタンを押す。画面が切り替わる。ニュース - - 富永はリモコンを足元に放り投げた。

旧正月で賑わうチャイナタウン。ストリートギャングたちの抗争事件。ヘロイン中毒者による犯罪の激増。リポーターの喋る英語はなんとか理解することができた。ところどころ、埋まらない個所もある。だが、この街に馴れればそれも埋まっていく。

ニュースが変わった - - 選挙報道。ジョナサン・ハンター下院議員死去に伴う、ブリティッシュ・コロンビア州選出下院議員選挙。候補者の中に中国系の顔が映った。画面に流れた名前は鄭奎だった。蘭桂坊のサムから聞いた名前。李耀明のかつての仲間 - - つまりは黒社会の一員。そいつが、国会議員選挙に立候補している。地球は丸い。どこに行っても同じことが起こっている。

富永はテレビから流れてくる英語に神経を集中した。鄭奎は有力候補と目されていた。近年増大している中華系移民の支持を得て、泡沫候補から一気にステップアップしたとリポーターは早口の英語で伝えた。最新の世論調査では支持率二位。一位はジェイムズ・ヘスワース。

画面がヘスワースの顔を映し出した。上品な物腰の白人。ブルネットの髪に青みがかかった灰色の瞳。微笑が顔に張りついていた。

「どうせ、おカマか、サディストか、ロリコンだろうが」

富永はひとりごちた。眠たげに伏せられていた目が、偏見の色を湛えて鈍く光った。

リポーターは喋りつづける - - ジェイムズ・ヘスワースは明日、ヴァンクー



ヴァーの有力支持者を集めてパーティを開く。場所はフォーシーズンズ・ホテルのバンケットルーム。開始は午後八時。

富永は情報を頭の隅に書き留めた。ヘスワースは鄭奎をパーティに招くだろうか。白人好みのパフォーマンスだ。充分にありえそうな気がした。鄭奎と話をしたければ、明日、パーティに顔を出してみるのもいいかもしれない。

富永はテレビを消した。左腕のロレックスを覗きこんだ。マックは七時すぎに迎えに来るといった。時間はまだ充分にある。情報を集めろ - - 頭の中で声がする。サムから聞いた番号に電話をかける。その声と同時に欠伸がもれた。八時間のフライトと一本のブランディ。身体は休息を欲していた。食事の後は女も来る。

「ここは日本じゃないんだ。あくせく働いたってしょうがないだろう」

富永は言い訳するようにひとりごちた。ソファに身体を伸ばし、目を閉じ  
\* 10

リッチモンド市フランシス・ロード5811。白い外壁の家。表札にはアルファベットで「K・M・TAM」。無線で家の持ち主を調べた。譚家明 - - 知らない名前。職業、映画俳優 - - ピンときた。芸名は譚子華。八十年代に名を馳せた俳優。黒社会との繋がりをすっぱ抜かれて、その後、人気を落とした。だが、いまだに香港の主だった組織の幹部連中と親交がある。香港で一度、飯を食ったことがある。その時、背中に掘った龍の刺青を見せられた。

「なるほど、そういうことか」

呉達龍は目を細めた。譚子華の女房 - - 劉燕玲。おそらくは元女優。だからあれほどの顔と身体を誇っている。

黒社会と繋がりのある女がヘロインに中毒し、身体を売っている。阿一と名乗る福建人は女が何者か知っているのか。

トラブルと金の匂いがした。

呉達龍は頭の中に女の姿を浮かべた。女を裸に剥いた。白い肌と桃色の乳首。それを思う存分蹂躪するおのれ - - 呉達龍は笑みを浮かべた。

無線がケヴィンの声を伝えてきた。

「どこにいるんだ、ロン？」

呉達龍は笑みを消した。

「リッチモンドだ、相棒」

「昼間のリッチモンドなんかでなにをやらかそうっていうんだ。ドレイナンは

カッカ来てるぜ。餌をやらなきゃ、おまえを食い殺すかもしれないくらいだ」  
「OK、ケヴィン」呉達龍は唇を舐めた。「ダウンタウンで狩りをはじめよう  
じゃないか」

タレコミ屋の趙偉の言葉が頭の中で呟した - - パウエル・ストリート433。  
阿一のヤサ。やつを脅してなにかを吐かせるのもいいかもしれない。それに、  
鄭奎の仕事もある。チャイナタウンのじじいたちを脅しつける。

「署で待ってる。ピックアップしてくれ」

「すっ飛ばして迎えに行くぜ、ケヴィン」

無線を切り、アクセルを踏んだ。ルームミラーの中、譚子華の家が小さくな  
っていった。

\* \* \*

チャイナタウン - - 旧正月の余韻がくすぶっていた。路上に散らばる爆竹の  
破片。風に舞う赤い紙。商売を再開したレストラン - - リタイアしたじじいた  
ちが茶を飲んでいる。

「で、なにをするつもりだ？」

ケヴィンがいった。

「あのレストランのな - - 」呉達龍は車の斜め前にあるレストランを指差した。

「オーナーのガキがストリートギャングのメンバーなのさ」

「それで？」

「親父はもうガキのことを見限ってるんだが、爺さんの方は孫が可愛くて仕方  
がない」

「おい、ロン。回りくどい方がいい方はやめてくれよ」

呉達龍は小さく舌を鳴らした。ケヴィンには我慢ならなくなる時がある。

「その爺さんってのはな、古い華僑の末裔で、このあたりにかなりの影響力を  
持ってるんだ。孫を梃子にして揺さぶりをかけりゃ、ドレイナンが喜びそうな  
なにかがきつと出てくるって寸法さ」

「じゃあ、その爺さんを締めあげてやろうぜ」

ケヴィンは嬉しそうに笑った。ホルスターから銃を抜き、銃身をスライドさ  
せた。大口径のオートマチック - - ふにゃちんの代用品。ケヴィンは用もな  
いのに銃を誇示したがる癖がある。助手席の足元にはショットガン。ここをL  
Aかどこかと勘違いしている。

呉達龍は車を降りた。道を渡り、レストランに近づいた。新記飯店。入口

の横、ガラス張りになった厨房。吊るされた焼豚、鳥のロースト。世界中のチャイナタウンでお馴染みの景色 - - 広東料理のマーク。ドアを開けた。左脇のレジカウンターの中で中年女が欠伸をしていた。女は呉達龍を見て、欠伸をとめた。

「阿 S i r」

香港人のスラング - - おまわりさん。その言葉を口にして、女は店の奥に視線を向けた。縁起でもない、どうする - - 女の目はそう語っていた。

ケヴィンが入ってくる。女は首を振りはじめた - - 白人まで来やがった。

「どうしました、阿 S i r」

店の奥から度のきつい眼鏡をかけた男がやってきた。

「お食事ならなんだって注文してください。特別にサービスいたしますよ」

「あんたの親父さんに用があるんだ」

呉達龍は男を押しつけて店の奥に進んだ。

「阿 S i r、店のことは親父じゃなくわたしが仕切ってるんですが」

男の手が肩に置かれた。ケヴィンが銃を抜いた。空気が凍りついた。

「大袈裟すぎるぜ、ケヴィン」

呉達龍はうんざりしたようにいった。

「締めあげてやるんだろう？」

「こいつら相手に銃なんか必要ない」

ケヴィンが銃をホルスターに戻した。

「どういうことなんですか、阿 S i r？」

震える声 - - 潤んだ瞳。男の身体は細かく震えていた。

「なんでもない。親父さんに話があるだけだ」そう言って、呉達龍は声を落とした。内緒話をするように。「まったく、白人ってのは馬鹿でしょうがねえな」

男は引き攣った愛想笑いを浮かべた。その顔の真ん中に拳を叩きつけてやりたかった。衝動をこらえて、足を進めた。店の一番奥の円卓。干からびた老人が三人、座っていた。感情のないどんよりと曇った目を呉達龍に向けていた。

「杜徳鴻」

真ん中の老人に声をかけた。曇った目がぎょろりと動いた。礼儀知らずを咎める目だ。呉達龍はせせら笑った。

「わたしになんの用かね、刑事さん」

「おれのことを知ってるんだな」

「鄭奎の腰巾着を知らない者がいるかね？」

呉達龍は笑うのをやめた。目を細めて杜徳鴻を睨んだ。

「偉そうな口をきいてると、そのうち後悔するぞ、爺さん」

「その言葉はそっくりお前さんに返そう。杜徳鴻を敬わない者はそのうち、きつと後悔する」

呉達龍はさらに目を細めた。テーブルの上に身を乗りだし、小声で囁いた。

「あんたの孫もそうなりそうだな」

杜徳鴻は目を瞬いた。

「わたしの孫がなにかしたのか？」

「ここでその話はできないだろう」

呉達龍は身体を起こした。顎を引き、外を指し示す。

「これは正式な捜査なのか？」

「あんたの態度次第では正式な捜査になる可能性もある」

杜徳鴻は小さく首を振った。弱々しくはあった。だが、瞳の奥で敵愾心が燃えていた。

「それじゃ、しばらくお前さんに付き合ってみようか」

「そうするのが利口ってもんだ」

杜徳鴻が立ち上がった。途端に、周りの人間たちが喚きはじめた。干からびた老人たちの口から迸るマシンガンのような広東語。背後でケヴィンが銃を抜く気配がした。呉達龍は手を後ろに向けてそれを制した。

「騒がなくてもよろしい」杜徳鴻の重々しい声が喚き声をかき消した。「わたしがこの刑事さんと出かけるのはあんたたちが見ている。いくらこの刑事の評判が悪いからといって、酷いことにはならんさ」

「その点はおれが保証する」

呉達龍は静かにいった。ケヴィン以外の全ての目が自分に集まるのを感じた。狗を見る目 - - 心臓が不規則に脈打った。拳を握り締め、激情を抑えこんだ。

「行こう。外に車がある」

テーブルに背を向けた。ケヴィンが間抜け面をして突っ立っていた。

\* \* \*

運転はケヴィンに任せた。杜徳鴻と共にリアシートに腰を落ち着けた。車が動き出す - - メイン・ストリートを南へ。

ルームミラーの中のケヴィンと目が合った。

「この中国人は英語がわかるのか？」

杜徳鴻を見下したような声。自分の間抜けさ加減がわかっていない。

「あんたと同じ程度には理解するよ」

杜徳鴻がいった。訛りはある。だが、流暢な英語だった。ケヴィンは眉をしかめた。口の中で呪詛をつぶやく。老人たちが自分に向けた目 - - 頭の中から追い払う。口を開く。

「杜芝霖は“蓮花幫”のメンバーだ」

事務的な声でいった。蓮花幫 - - 旧移民の子孫たちが結成した愚連隊。新移民のガキたちの『中青堂』と反目し、抗争を繰り返している。

「違う」

杜徳鴻 - - 答えが早すぎた。

「先月の二十八日、ヘイスティングス・ストリートで、四十二歳の白人女性が強盗にあった。被害者は脇腹をナイフで刺されて全治二ヶ月の重傷。ハンドバッグの中に入っていた現金二八〇〇ドルとクレジットカード、それに身につけていた貴金属類を盗まれた」

呉達龍は口を閉じた。杜徳鴻を盗み見た。杜徳鴻は目を閉じていた。目尻がかすかに震えていた。

「目撃者の証言によると、被害者を襲ったのは三人の中国系の若者だ。目撃者は彼らが仲間の一人を中国訛りの発音で『ジョニー』と呼んだのを聞いている。

『ジョニー』だ」

杜徳鴻の反応はなかった。呉達龍は先を続けた。

「ここらでジョニーという名のチンピラといえば、葉錦輝に決まってる。ジョニー・イップ」

「それで？」

杜徳鴻が目を開いた。敵意はなく、輝きを失った瞳がじっと呉達龍を見つめた。

「おれはリッチモンドのカラオケボックスでジョニーを見つけた。散々てこずったが、ジョニーは吐いた。一月二十八日に白人女を襲ったのはやつだ。だが、女を襲った時、やつはヘロインを血管にぶち込んでいた。記憶があやふやなんだ。やつが覚えているのは、一緒に強盗をやったのは、蓮花幫の仲間だってことだけだ。そこで問題なのは、あんたの孫が蓮花幫のメンバーだってことだ」

「違う。芝霖はそこらのチンピラとはわけが違う」

「意地を張るのはやめな、爺さん。杜芝霖が始末に終えないチンピラだってことはチャイナタウンのだれもが知ってるし、あんただって知っているんだ」

杜徳鴻のこめかみ - - 細かく震えはじめた。

「ジョニーはおれが抑えてる。一緒に強盗をやったのは芝霖じゃないかと聞いたら、やつは、そうだ、と答えるぜ」

「なにが望みだ？」

杜徳鴻は吐き出すようにいった。呉達龍は笑った。ルームミラーに目をやる。ケヴィンが車のスピードをあげた。交差点を左折し、ブロードウェイ・イーストに入った。

「望み？ おれは自分の職務を遂行したいだけだ」

喜びがこみあげてきた。自分より弱いものをいたぶる快感に声がかすれた。

「無実の者を犯罪者にすることがお前さんの職務だということか」

「この街から始末に終えないチンピラを排除するのは、たしかにおれの職務さ」

「なにが望みだ？」

同じ言葉。だが、前よりも声が甲高く、震えも大きかった。

「あんたたちチャイナタウンの年寄り、鄭奎を目の敵にしている」

「豚め」

快感が霧のように消えた。代わりに冷気が臍を中心に全身に広がっていく。

「もう一度いってみろ」

低い声 - - 杜徳鴻は動じない。

「豚め。おまえは胡露娟の家に火をつけた。わたしは知っているぞ。鄭奎の土地買収に応じなかったあの婆さんを、おまえは焼き殺したんだ」

記憶がよみがえった。テストだ - - 鄭奎はいった。頑固婆あの首を縦に振らせる。そうすれば、狗として雇ってやる。

胡露娟は頑なだった。脅しても殴っても無駄だった。それどころか、呉達龍はくそ味噌にけなされた。焦りが深まった。金が必要だった。コネが必要だった。鄭奎の懐に潜り込む必要があった。

燃えあがった家。焼け跡から発見された死体。胡露娟は留守のはずだった。なぜ、家にいたのか、わけがわからなかった。現場に駆けつけたふりをして、証拠を処分した。自らの罪を忘れるために酒を呷った。ヴァンクーヴァーに来て、一年が経つか経たないかのころだった。

呉達龍は手を握りしめた。関節が鳴った。

「どうしたんだ、ロン？」

「なんでもない。黙って車を運転していてくれ」

ケヴィンの間抜けな声がふくれあがる憤怒と恐怖に水を浴びせた。呉達龍は深く息を吸った。自分にいい聞かせた。

- - これは遊びじゃない。これは遊びじゃない。これは遊びじゃない！ 広州にいるガキたちのことを思いだせ!!

「おれが豚なら、あんたはなんだ？ 自分の孫の面倒もみれない老いぼれ猿か？」

「わたしの親父が広州を出てカナダに来たのは一九一〇年の冬だ。金も縁故もなく、白人たちに虐待され、それでも、中国人の誇りを忘れずに働いてきた。この街にこうして中華街があるのも、そうした祖先たちの努力のおかげだ。だが - - 」杜徳鴻は目を剥いて呉達龍を睨んだ。「それから百年近くが経って、カナダに渡ってきた中国人は、誇りを忘れてしまった。ほとんどが、おまえや鄭奎のような豚みたいな連中だ」

「あんたの孫もそうだ」

呉達龍はいつて、足元に唾を吐いた。反吐が出そうな話 - - 杜徳鴻が言葉を発するたびに、生肉が腐ったような匂いがする。ルームミラーの中でケヴィンが眉をひそめていた。

「おれの知ってる話を聞かせてやろうか？ 去年、黄寶蓮という少女が自殺したのを覚えてるか？」

杜徳鴻は怪訝そうな表情でうなずいた。

「香港から来た女の子だ。足が不自由で車椅子に乗っておった」

「そう、彼女が寶蓮だ。拳銃で頭をぶち抜いて死んだ。まだ、十五歳だった。自殺の理由を知ってるか？」

「新聞には確か、将来を悲観して - - 」

「信じてるわけじゃないだろうな？」

杜徳鴻は目を剥いた。なにも聞きたくないというように首を振った。

「おれが掴んだ事実是这样だ。学校を出た寶蓮を数人のチンピラが連れ去った。誘拐だ。足の不自由な少女なら簡単に誘拐できるからな。チンピラどもは、金を要求するために寶蓮の家に電話した。だが、寶蓮の両親は留守だった。香港に戻ってたんだ。家の人間が戻ってくるのは二週間後の予定だった。馬鹿な連

中さ。計画性なんてあったもんじゃない。遊ぶ金欲しさに、行き当たりばったりで寶蓮を誘拐したんだ。二週間も待つ気はなかったんだ。それで、連中は寶蓮にヘロインを打って、代わる代わる彼女をレイプした」

「でたらめだ」

杜徳鴻の声はかすれていた。

「事実さ。寶蓮の死体からはヘロインが検出されたし、性器には裂傷があった。膣内からは複数の男の精液が出た。彼女の両親が提訴するのを拒んだから、表立った事件にはならなかった。それでも、警察は捜査をした。寶蓮を誘拐した連中の中に杜芝霖がいたことはわかってる。もっとも、芝霖は見張り役で、たいした罪は犯していないらしいがな」

「芝霖は - - 」

杜徳鴻は絶句した。目尻の震えは痙攣に変わっていた。勝利の確信に呉達龍はほくそ笑んだ。

「あんたは子供の育て方を間違えたのさ。あんたのいうとおり、おれは豚かもしれん。だが、あんたの孫は豚にもなれないクズだ」

「その話は本当なのか？」

「蓮花帮のガキどもを捕まえて聞いてみればいい」

杜徳鴻は視線を窓の外に向けた。小雨が降りはじめていた。雨に濡れた窓が老人の瞳に反射して、涙のように見えた。

「鄭奎はわたしになにを望んでおる？」

窓の外を見つめたまま杜徳鴻はつぶやいた。

「協力だ。鄭奎は選挙に勝つためならなんだってする気になっている。あんたが、チャイナタウンの爺さん連中を説得してくれれば、鄭奎はあんたに感謝する」

「やれるだけのことはやってみよう」

杜徳鴻は肩を落とした。

「孫をこの街から逃がそうとしても無駄だぜ」

呉達龍は杜徳鴻に顔を近づけた。首根っこを捕まえたら決して手を離すな - 警察学校の教官に教わった言葉が頭の中で呟っていた。

「そんなことをしたら、おれはどんな手を使ってでもあんたの面子をぶっ潰してやる」

「そんなことはせんよ。元の場所に戻ってくれんか」



「もう一つ、あるんだ」

「この年寄りから、まだなにかを奪おうというのか？」

「チャイナタウンで働いてる連中の中で、ヘロイン密売に関っているやつらの名前が知りたい。強盗事件をうやむやにしてやるかわりに、警察に差し出す餌が必要だ」

「わたしは知らん」

「名前だ」

呉達龍は強引に詰め寄った。杜徳鴻は相変わらず窓の外を見つめていた。車が左折した。ナナイモ・ストリート。このまま直進すればヘイスティングス・ストリートにぶつかり、そこを左折すればチャイナタウンに戻ることになる。

「洪尊賢」杜徳鴻が口を開いた。「『四海餐廳』のコックだ」

台湾系の華僑がやっているレストラン。洪尊賢も台湾系だろう。呉達龍は首を横に振った。

「たいしたもんだな、杜徳鴻。台湾系の連中なら売っても良心は傷まないというわけか」

杜徳鴻はなにも答えなかった。

\* \* \*

「で、どういうことになったんだ」

悄然として車を降りた杜徳鴻の背中を見ながらケヴィンがいった。

「洪尊賢ってコックがヘロインをさばいてる」

呉達龍はコックの名前を北京語で発音した。

「そいつをパクリに行くのか？」

「いや」腕時計を覗いた - - 午後三時。「この時間なら、店は休みだ。夕方、そいつが働いてるレストランに行ってみよう」

「じゃあ、どうする？」

「パウエル・ストリートに行ってくれ」

ケヴィンがアクセルを踏んだ。ボディが震えて、車が動きだす。雨がやむ気配はなかった。

「パウエル・ストリーのどこだ？」

「433。この前、女に売春をやらせていた中国人がいただろう。そいつのヤサだ」

「パーティの続きをやるのか？」

「うまくいけばな」

ケヴィンは車を路地に乗りいれた。パウエル・ストリートは一方通行路だった。車を東に向けて走らせ、それからパウエル・ストリートに入るしか方法がない。

「パーティはどの方法でやる？」

「サプライズ・パーティだ。一気に乗り込んで締めあげる」

「わくわくしてくるぜ。あれはいい女だったもんな」

劉燕玲。香港黒社会と深い繋がりのある俳優の女房。目を閉じれば、臉にあの夜見た女の姿が浮かぶ。自分がヘロインに中毒していること、ヘロイン欲しさに身体を打っていること - - だれよりも夫にばれることを恐れているはずだった。そこを押せば、なんとかなるかもしれない。まず、阿一を排除する。それから、ヘロイン片手に近づいていく。

背筋が震える。快樂の予感に、股間がうずく。

左折を二度繰り返して車はパウエル・ストリートに入った。かつての日本人街。今は見る影もない。日本人は去り、街はさびれた。貧しい人間たちが寄り集まり、夜になれば、アウトロウたちが通りを跋扈する。

「ここだな」

ケヴィンが車をとめた。通りの左側に古ぼけたアパートメントが建っていた。住居表示はパウエル・ストリート433。間違いなかった。

「準備をはじめよう」

呉達龍は腰のホルスターから銃を抜いた。グロック社製の九ミリのオートマティック。薬室に弾丸を装填し、セイフティをかけた。銃をホルスターに戻し、車を降りた。ケヴィンが続く。ケヴィンは両手でショットガンを抱えていた。吐く息が白い。雨が体温を奪っていく。武者震いが背中を駆けのぼった。ケヴィンに顎をしゃくり、呉達龍はアパートメントの中に入っていた。

むっとする匂いが鼻をついた。生ゴミと黴の混じりあった匂い。香港を思いだす。だが、香港はこれほど寒くはない。板張りの床は湿っていた。歩くたびに軋んだ音をたてた。

一階はホールになっていた。エントランスの脇に郵便受け。片っ端からあけていく。ダイレクトメールが零れ落ちる。

「なにか見つかったか？」

ケヴィンの声。増幅して聞こえる。神経が過敏になっている。白人の名前、

中華系の名前 - - どれが阿一かはわからない。2 - Bの住人宛のダイレクトメール。宛て名は、ジェシカ・マーティン。

「風潰しに行くか」

ケヴィンに声をかけ、エレベーターに向かった。がたのきたエレベーターで二階へ。一フロアにふたつの部屋。奥に向かう。2 - Bの呼び鈴を押す。反応はない。もう一度呼び鈴を押す。怒鳴り声が聞こえた。くぐもっていて意味は掴めなかった。

ケヴィンに肩を叩かれ、呉達龍は振り返った。ケヴィンは右手の親指を自分に向けていた。ウィンク - - ここはおれに任せろ。呉達龍は後退した。ケヴィンがもう一度呼び鈴を押した。

「こんな時間に、どこのどいつよ!？」

白人女の声。低く、囁れていた。

「ミズ・マーティン。我々はヴァンクーヴァー市警のものです。少しづつがいたいことがあるんですが」

「警察？ 待ってて。今、開けるから」

用心深い声が返ってくる。呉達龍とケヴィンはI・Dカードを胸にとめた。ドアが開いた。チェーン・ロックの鎖が伸びた。隙間から、くすんだブロンドが顔を出した。三十代後半から四十代のどこかといった年格好。荒れた肌、目の下の隈 - - 売春婦兼ヘロイン中毒者の証し。

女は疑心に曇った目でケヴィンのI・Dを睨んだ。

「ケヴィン・マドックス巡查ね.....なかなかいい男じゃない。そっちの黄色いやつはなによ？」

「ロナルド・ン巡查部長だ」

呉達龍は冷たい目を女に向けた。

「ロナルド・ン？ 人間の名前なの、それ？」

呉達龍は足を前に踏み出した。ケヴィンの腕に制された。

「ミズ、聞きたいことがあるんだ。このアパートメントに中国人が住んでいるだろう？」

「ここだけじゃないわ。中国人ならヴァンクーヴァー中にいるじゃない」

「ミズ - - 」

「わかったわよ。話すから、そっちの中国人をわたしの側に近づけないで。なんて目で人を見るのかしら」

呉達龍は腰の銃に手をかけた。口の中で呪詛をつぶやいた - - クソ売女め、いつか、ぶち殺してやる。

「それ以上へらず口をきいたら」ケヴィンが低い声でいった。正式な令状を取って、この部屋にガサ入れするぞ。ヘロインが見つかったら、ン捜査部長が喜んであんたを尋問する」

「どの中国人のことが知りたいのよ？」

ジェシカ・マーティンは不機嫌そうに頬を膨らませた。たるんだ肌が醜く震えていた。

「男だ」

「このアパートメントには中国人の男が四、五人住んでるわ。どの男のことなのか説明してくれなきゃ、答えようがないじゃない」

ケヴィンが振り返った。救いを求める目 - - 待っていた。呉達龍はケヴィンを脇にどけた。敵意を剥きだしにした視線を受け止めた。

「おれたちが知りたいのは、あんたがヘロインを買ってる中国人のことだ」

敵意が怯んだ。ジェシカ・マーティンは、一瞬、息をのみ、芝居がかった笑い声をたてた。

「わたしがヘロインを中国人から買うだって？」

呉達龍は銃を抜いた。銃口をジェシカ・マーティンの額に押しつけた。

「肌の黄色い連中は気が短いんだ。よく知ってるだろうが、売女め」

「まずいぜ、ロン」

「黙ってる、ケヴィン」

呉達龍は吐き捨てるようにいった。

「ゆ、許して.....殺さないで.....」

「おまえがヘロインを買うのは、どの階の中国人だ？」

「四階のAのフラットよ.....お願いだから - - 」

呉達龍は銃をおろした。

「ご協力、ありがとう、ミス。街で商売する時は、中国人のおまわりに気をつけな」

「せいぜい気をつけるわ。お礼にひとつだけ教えてあげましょうか。一時間ぐらい前にも、別の中国人がやつのことを聞きにきたわよ」

呉達龍はドアを叩き閉めた。

「どうした!？」

「先客がいる」

呉達龍はエレベーターに向かって走りだした。

\* \* \*

四階のAフラット。ドアに鍵がかかっていなかった。呉達龍はケヴィンに目配せをして壁に背中を押しつけた。銃を抜いた。ケヴィンがショットガンのポンプをスライドさせた。

「阿一、警察だ。中にいるなら返事をしろ！」

ドアの隙間から北京語で声をかけた。待つ - - 返事はない。

「阿一、警察だ」

広東語、ついで英語で叫んだ。部屋の中からは物音ひとつ聞こえてこなかった。

「突入するか？」

ケヴィンの声。普段は赤らんでいる頬が血の気を失っていた。

「おれが先に入る。カヴァーしてくれ」

ケヴィンがうなずいた。呉達龍はドアを蹴り開いて部屋の中に転がり込んだ。銃を突きだす。素速く左右に身体を動かす。

「警察だ！」

叫び声は湿った空気に虚しく吸い込まれた。バスルーム、ダイニング・キッチン - - 引っ掻きまわされた痕。キッチン・シンクに積み上げられたインスタント・ヌードルの空容器は腐臭を放っていた。左手をあげ、ケヴィンを招き入れる。ダイニングの奥に、朽ちかけたドア。蝶番がいかれ、軋んだ音をたてて揺れていた。

「阿一、いるのか？」

返事はない。呉達龍はケヴィンと顔を見合わせた。

「ひでえ匂いだ」ケヴィンが顔をしかめた。「食い残したもののぐらい片付けて欲しいぜ」

「食い物の匂いだけじゃない」

呉達龍は寝室のドアに手をかけた。ドアを開けた。噎せるような匂いが襲ってきた。クローゼットとダブルベッド。床にぶちまけられた白い粉。ベッドの上に、死体。目を潰され、喉をぱっくりと切り裂かれていた。呉達龍は死体の顔を覗きこんだ。阿一 - - 間違いなかった。

「なんてことだ……」

ケヴィンのかすれた声が聞こえてきた。振り返った。

「ケヴィン、無線で署に連絡してくれ」

「あんたは？」

「手がかりを探す。下の売女は先客は一時間前に来たといっていた。手配を早めれば、逮捕できるかもしれん」

「了解」

ケヴィンが走り去った。呉達龍は腰を屈め、床に飛び散った大量の粉を指に擦りつけた。匂いを嗅いだ - - ヘロイン。立ち上がり、手袋をはめた。死体の衣服を改めた。クローゼットを開けた。なにもない。ダイニング・キッチンに戻った。キッチンの収納棚、ライティング・デスクの抽斗 - - なにもない。当たり前だった。部屋の散らかり具合 - - 阿一を殺した連中が隈無く探しまわった痕。呉達龍は腕時計を見た。目が血走っていた。バスルームに飛び込み、血走った目をぐるりと一周させた。その目が上を向いてとまった。

貯水タンク。便器に足をかけ、タンクに手をかけた。蓋を外し、中を覗きこむ - - ビニール袋手をつき込み、引きずり出す。ビニール袋の中身は白い粉だった。もう一度、腕時計を見る。ケヴィンが出て行って五分。無線連絡にそれほどの時間はかからない。

呉達龍は迷わなかった。部屋を飛び出た。エレベーターの階数表示 - - 一階でとまったまま。非常階段をかけおろす。二 - Bの呼び鈴を押す。

「ジェシカ！ 金持ちになるビッグ・チャンスだ。早く開け！」

低い鋭い声。ドアはすぐに開いた。ジェシカ・マーティン。恐らく、戸口で階上の様子をうかがっていた。

「金持ちになるチャンスってどういう意味よ、刑事さん？」

ビニール袋をつきだす。叫ぶ。

「ヘロインだ。どこかに隠しておけ。儲けは山分けだ。下手なことは考えるなよ」

ジェシカ・マーティンの返事を待たず、背を向けた。階段を駆けあがった。呼吸があがった。肺が破れそうだった。阿一の部屋に飛び込む前にエレベーターを見た。階数表示のランプが二階から三階に切り替わる場所だった。

呉達龍はドアを締め、何度も息を吸いこんだ。

\* 11

ケヴィン・マドックスが血相を変えて飛び出てきた。車に飛び込み、無線の

レシーヴァーを掴むのを見た。

ハリィは反射的に無線をオンにした。声が飛び込んできた。

「パウエル・ストリート433で殺人事件発生。くり返す、パウエル・ストリート433で殺人事件発生。殺されたのは中華系の男性だ。容疑者はすでに逃亡した模様。こちらは本署のケヴィン・マドックス巡查。殺害現場の指揮を執っているのはロナルド・ン巡查部長。巡查部長は現在、殺害現場の状況保全を行っている。至急、応援を頼む」

無線でのやり取りが続いた。ハリィは無線のひび割れた声に耳を傾けながら、車の外の古ぼけたアパートメントに視線を向けた。

カー・ナビゲーション・システムのモニタ上で光の点滅が移動しはじめたのは一時間ほど前のことだった。車を飛ばし、チャイナタウンで呉達龍をつかまえた。

呉達龍の行動は解せなかった。『新記飯店』と看板のかかったレストランから連れ出した老人は何者なのか？ あの老人とこの殺人事件に関連はあるのか？ 調べなければならぬことが多すぎる。

ケヴィン・マドックスがアパートの中に戻っていった。ハリィは車を降りた。辺りを見渡す。古ぼけた建物のエントランスの階段に座り込んだ白人がひとり。他に人影はない。白人は澀んだ目を入江に向けていた。ヘロイン中毒者特有の気怠さが男の全身を包んでいた。

ハリィは手袋をはめた。アパートメントの前にとめられた車に近づいた。赤い赤色燈が屋根にのっかっている。ケヴィン・マドックスがのせていったものだった。車のドアを開けた。鍵はかかっていたいなかった。ここは合衆国じゃない。警察車をつかばらおうとするジャンキーもいない。

心臓が不規則に脈打ちはじめた。喉が渇く。舌が上顎に張りつきそうだった。ハリィはしきりに唇を舐めた。震える手で車内に残されたものを調べた - - ろくなものはなかった。グラブボックスや後部座席に散らばっているもの - - ガムの包み、電話帳、革ジャン、スニーカー。香港からやって来た中華系移民にはそぐわないものばかりだった。おそらく、すべてがケヴィン・マドックスの私物だ。

ハリィはジャケットのポケットから小さな塊を取り出した。小型の録音機。人の声に反応して録音をはじめた。テープの録音時間は四時間。なにかを掴めるかもしれない。くだらない与太話しか聞けないかもしれない。それでもなに

もしないよりはマシだ。

ハリィ運転席の足元に屈み込んだ - - 犬になったような気分襲われた。録音機をダッシュボードの真下に取りつけた。よほど用心深い人間でない限り見つけることはないだろう。

遠くでサイレンの音が聞こえた。ハリィは素速く車から抜け出た。ドアを閉め、自分の車に駆け戻った。ハンドルを握ろうとして、両手をじっと見つめた。細かく震えた手 - - ハンドルを握るところの話ではなかった。

「頼むぜ、おい」

ハリィはつぶやき、目を閉じた。

入れっぱなしにしておいた無線から声が飛び込んでくる。ヴァンクーヴァー市警の警官たちの声。すぐにここを離れるべきだった。市警とCLEUの仲は決していいとはいえない。殺人事件の現場にCLEUの捜査官がいたことが知られば、市警はなにごとかと警戒するだろう。

「くそっ」

ハリィは意を決したようにハンドルを握った。まだ手は震えている。かまわず、アクセルを踏んだ。スピードを出しすぎないようにパウエル・ストリートを進んだ。サイレンの音が近づいてくる。無線から流れてくる声 - - 到着を知らせる声。

「現場は四階のBフラットだ」ケヴィン・マドックスの声「被害者は中華系。正式な名前はわからない。福建人でヘロインの密売に関っていると思われる。死体には拷問を受けた後がある。ヘロイン密売のトラブルかもしれん。麻薬課の連中に問い合わせてくれ」

「了解。まもなく、応援が到着する。殺人課の連中もすぐに駆けつけるはずだ。現場にはあんたとン巡查部長以外、だれも入れるな」

ハリィは車を左折させた。メイン・ストリート。しばらく走って、路肩に車をとめた。頭の中のファイルをめくった。福建系のマフィア。ファイルにはなかった。ヴァンクーヴァー一帯で猛威をふるっているチャイナ・マフィアは大別して三つのグループに分類できる。香港系、台湾系、ベトナム系。他に、北京は上海の連中もいるが、それほど大きな組織ではない。ましてや福建系となれば、数は限られる。おそらく、殺された福建系のマフィアは新顔だ。

そんな男に、呉達龍はなんの用があったのか？

無線を手にした。震えはとまっていた。CLEUの本部に連絡を入れた。



「こちら、対アジア系組織犯罪対策班のハロルド加藤巡查部長だ。グリーンヒル警部に伝言を願いたい。今日、ヴァンクーヴァー市パウエル・ストリートで殺人事件が発生した。調査を担当しているのはヴァンクーヴァー市警。この事件に関する詳細な情報をまとめてほしい」

「わかりました」雑音に囲まれた女の声が返ってきた。「グリーンヒル警部に、そちらに連絡するように伝えますか？」

「冗談じゃない。彼声を聞いたら、仕事をする気がなくなるじゃないか」

くすくす笑う声が聞こえた。感じのいい笑い声だった。

「わかりました。警部には伝言を伝えます」

「君の名前は？」

「タニア」

「タニア、今度、食事でもどう？」

「あなたのフィアンセに悪いわ」

ハリィは無線をダッシュボードに叩きつけた。

「くそっ、みんなくたばっちまえ」

罵り声をあげながら、グラブボックスをあけた。モバイル用の小型コンピュータを引っ張り出した。携帯電話とコンピュータを繋ぎ、CLEUのデータベースにアクセスする。

チャイナタウン - - 新記飯店。液晶モニタにデータが流れ込んできた。

経営者は杜永康。配偶者は鐘碧心。共に香港系のヴァンクーヴァー市民。杜永康の父は杜徳鴻。母親は死亡。鐘碧心の両親も死亡。息子が杜芝霖。新記飯店は、三十年前に、杜徳鴻が開店した。

頭の中のファイルが音を立てて開く。

杜徳鴻 - - 戦前にカナダに移民してきた。チャイナタウンの十賢老と呼ばれる老人たちのひとり。中国系旧移民に重大な影響力を持つ長老。

杜芝霖 - - 蓮花幫のチンピラ。いくつかの犯罪事件に関っていると目されているものの、なんとか警察の追及の手を逃れている。最近のヴァンクーヴァーでは珍らしくもない、クズ以下のチンピラだった。

ハリィはコンピュータの電源を落とした。チャイナタウン。あそこの旧移民は、新移民のことを毛嫌いしている。鄭奎のような輩を忌み嫌っている。呉達龍の目的がわかったような気がした。

あちこちからサイレンの音が聞こえはじめた。サイレンはパウエル・ストリ

ートに向かって集まっているようだった。

呉達龍は杜徳鴻と話をしてからパウエル・ストリートに向かった。チャイナタウンの長老とヘロインの密売人。どう繋がっているのか。

犬の仕事 - - 思っていたよりおもしろくなりそうだった。

\* \* \*

新記飯店には重い空気が澱んでいた。レジカウンターの内側には不貞腐れたようにそっぽを向いている中年女 - - 鐘碧新。厨房には活気がなく、若い料理人たちが手持ちぶさたにしていた。店の奥 - - 老人と中年男が差し向かいで睨みあっていた。老人は杜徳鴻。中年は杜永康。杜徳鴻の目は怒りのために皓々と輝いていた。

「杜先生」

ハリィは北京語で声をかけた。返事はなかった。

「ミスタ・トー」英語に切り替えた。杜徳鴻がわずらわしそうに顔を向けてきた。「わたしはCLEUの捜査官です。少しお時間をいただきたいのですが」

「今度は連邦捜査局か.....もうしわけないが、捜査官。わたしは今忙しい。後日にしてもらえんかね」

訛りはあるが流暢な英語だった。この世代の中華系移民の英語能力は、背負ってきた困難に比例して発達している。杜徳鴻の顔に刻まれた皺は、年月だけが刻んできたわけではないということだった。

「今度は、とおっしゃいましたか？」

ハリィは杜徳鴻の迷惑そうな表情を無視した。

「それがどうした？」

「わたし以外に警察関係の者がだれか来たんですか？」

杜徳鴻はわざとらしくため息を洩らした。

「捜査官、あんたはどこの出身だ？」

黄色い肌をしたものはすべて中国人だと思いこんでいる人間の声だった。

「わたしはハロルド加藤。カナダ生まれのカナダ人です」

「日本人か」

杜徳鴻は首を振った。

「日系のカナダ人です」

「どこが違うのかね？ わたしは確かにカナダ国籍を持っている。だが、アイデンティティを問われれば、わたしは中国人だと答える。日本人は違うのか

ね？」

「わたしはカナダ人です」

ハリィは辛抱強い口調でいった。

「それは、わたしは地球人ですというのと一緒だな」

「ミスタ・トー、わたしはあなたと自分のアイデンティティについて議論する気はありません。二、三、お伺いしたいことがあるんです」

「わたしの方は警官には用はない」

にべもないいい方だった。

「しかし、あなたはヴァンクーヴァー市警のロナルド・ン巡查部長には用があったというわけだ」

「ロナルド・ン？ だれのことかね？」

「呉達龍です」

ハリィは北京語でいった。一瞬、杜徳鴻の表情が歪んだ。その瞬間を待っていたかのように、杜永康がテーブルを離れた。

「失礼、仕事があるので」

杜徳鴻に比べれば、英語とはいえないような代物だった。

杜徳鴻が広東語でなにかを怒鳴った。早口すぎてハリィには聞き取れなかった。杜永康はなにかをいい返し、店の外に出ていった。杜徳鴻は舌打ちをし、レジカウンターの女に鋭い声を浴びせた。女は哀しそうに首を振るだけだった。「ミスター・トー。質問に答えてくれれば、わたしはすぐに退散します。呉達龍をご存じですね？」

「呉達龍 - - 」杜徳鴻は静かにいった。「あいにく、そういう人間は知らないな」

「つい、三十分ほど前、あなたは彼の車に乗ってドライブしていましたよ」

「ああ、彼が呉達龍というのか」

「彼が何者か知らなかったというつもりですか？」

「知らなかった。彼は、警察の者だといっただけだからな」

「身分証を確認しなかったんですか？」

「中国人はそういうことはしないものなのだ」

「最近はそうでもないようですがね.....彼とはなんの話？」

「あの男はヘロイン密売の調査をしているといていたな。わたしになにかを知らないかと聞いてきたんだ。わたしはなにも知らないと答えたが、あの男は

信用しなかった。それで、車の中で簡単な尋問をされたというわけだ」

「ヘロイン密売ね……」

ハリィは疑うような視線を杜徳鴻に向けた。

「わたしはそういう非合法的な商売に関ったことはない」

杜徳鴻は食えない老人だった。多少の変化球では効きそうにうもなかった。ストレートで勝負だ - - ハリィは腹を決めた。

「わたしはこう思っていたんですよ。彼はあなたになにかを頼みにきた。しかし、あなたは断った。それで、呉達龍はあなたを車につれこみ、脅しをかけた」

言葉を切って反応を待った - - 杜徳鴻は枯れ木のように突っ立っているだけだった。

「呉達龍は鄭奎のために働いています。ご存じですね？」

反応はない。

「彼に、鄭奎の選挙のために骨を折ってくれと頼まれたんじゃないですか？」

反応はない。

「お孫さんの杜芝霖のことでなにかいわれませんでしたか？」

反応 - - 杜徳鴻の頬が紅潮した。

「帰ってくれ」

「お待ちください。わたしは - - 」

「帰れといっているんだ。わたしからなにか聞き取れば、正式な書類を持ってくるといい。これ以上わたしの時間を無駄な質問に使うわけにはいかん。時間は、金を稼ぐために使うものだ」

「ミスタ・トー - - 」

「ミスタ加藤、これ以上店に留まっていると、わたしにも考えがあるぞ！」

杜徳鴻は本気だった。我を我を忘れんばかりに怒り狂っていた。

杜芝霖 - - チンピラ以下の孫が、杜徳鴻の弱点なのだ。そこを呉達龍は突いたに違いない。

「わかりました」

ハリィはあとずさった。粘りすぎると藪蛇になるおそれがある。

「また後日にでも、お話しをうかがいに来ると思います。今度は、呉達龍のことだけでなく、杜芝霖についても」

いわずもがなの言葉 - - いわずにいられなかった。杜徳鴻が目を剥いた。

「帰れ！」

凄まじい剣幕だった。ハリィは踵を返した。店を出て、振り返った。杜徳鴻が入り口まで迫ってきていた。

「申し訳ありません。怒らせるつもりはなかったんですが」

「ハロルド加藤といったな？」

杜徳鴻の頬は紅潮したままだった。

「そうですが？」

「加藤明と関係があるのか？」

ハリィは耳を疑った。ガータン・ミン - - 杜徳鴻はハリィの父の名を明確な広東語で発音した。

「父をご存じですか？」

「どこかで見た顔だと思ったわ」

杜徳鴻はハリィの足元に唾を吐いた。広東語でなにかを叫んだ。

「どういう意味ですか？」

思わず聞き返した。

「いったとおりの意味だ。おまえがあれの子供だとわかったからには、もう、遠慮はせんぞ。次にわたしに会いに来る時は書類を持ってこい。いいな。そうでなかったら、おまえがこの店に入ることを、許さん」

杜徳鴻は背を向けた。取りつく島がなかった。

ハリィは首を振り、『新記飯店』を出た。頭の中で疑問が渦巻いていた。杜徳鴻は父を知っている。なぜだ？ それに、杜徳鴻の吐きだした広東語。なんという意味だったか - - 思いだした。豚の息子。杜徳鴻は確かにそうだった。豚の倅はやはり豚だ、と。

振り返った。店の入り口にシャッターがおりるところだった。急いで戻った。遅かった。シャッターは完全に閉じてしまった。

ハリィはシャッターを揺さぶった。

「ミスタ・トー。豚の息子とはどういう意味だ!? おれの親父がなんだって豚呼ばわりされなきゃいけないんだ!？」

返事はなかった。ハリィは同じ言葉を北京語で繰り返した。返事がないのはわかっていた。それでも問わずにいられなかった。

「どうして父さんが豚なんだ!？」

答えはない。シャッターが無機質な金属音をたてるだけだった。

\* 12

マックは時間通りにやってきた。車はベンツだった。

「サム哥、いい服を持ってるな」

富永を一瞥してマックはいった。富永はベンツのバックミラーに映る自分の姿に目をやった。頭のとっぺんからつま先まで、イタリアン・ブランドで固めたスタイル。李耀明からもらった金は、すべて博奕か服に注ぎこんでいる。

「大老はみすぼらしい恰好を厭がるからな」

「確かに。おれも出世するたびに大老には叱られたぜ。それなりの地位についたら、それなりの恰好をしろ、いつまでもチンピラじゃないんだぞってな」

ベンツはだだっ広い通りを走っていた。雨にけぶった街並みは、香港のどぎついネオンに慣れた目にはゴーストタウンのように映った。

「ここはなんていう通りだ？」

口を開いた瞬間、マックの携帯が鳴りはじめた。マックは富永に掌を向け、携帯に出た。

「ああ、おれだ……それで、どういうことになってる？ ……じゃあ、あの福建野郎がくたばったってのは本当なんだな？ ……ああ、わかってる。呉達龍の野郎か？ それで、白粉は？」

富永は顔をゆっくりマックに向けた。呉達龍。忘れていた名前を立て続けに耳にしている。

「ねえだと？ そんな馬鹿な話があるかよ。やつは、白粉をたんまり隠し持ってたはずだ。それじゃなきゃ、女どもにあれだけば撒いてやれるはずがねえ……探せ。どこかにあるはずだ。もし、だれかが持ってたら、かまわねえからぶっ殺して取ってこい」

マックは電話を切った。

「物騒な話だな」

「ああ、今日、福建から来たチンピラが殺されてな」

「あんたらが殺ったのか？」

「いいや。それがわからねえから困ってる」

マックは苦りきったような声を出した。

「どういうことだ？」

「カナダのあちこちで、白粉に関ってる連中が消されてる。人が死ぬだけじゃねえ。白粉も消えちまうんだ。最近じゃ、値段が跳ねあがってな」

「だれかが白粉の儲けを独り占めしようとしてるってことか？」

マックの横顔に笑みが浮かんだ。

「あんた、切れるな。大老がわざわざ日本人を寄越すわけだ」

「あんたらはなにも掴んじやいないのか？」

「だから困ってるんだ。儲けを独り占めしようなんて豚野郎は昔からどこにもいる。ただな、白粉の儲けは半端じゃなくでかい。そんなものを独占しようとするや、どこかから情報が漏れるもんなんだが、それがねえ」

「新興の組織か？」

マックは首を振った。

「そんなものができりゃ、おれたちの耳に入るはずだ。今日殺されたのは福建野郎だっていっただろう？」

富永はうなずいた。

「東海岸はともかく、こっち側じゃ、福建野郎は肩身が狭いんだ。殺された野郎はシアトルか来たってことになってる。それも、涎がでるぐらいの量の白粉を持ってな。おれはあいつを締めあげてやるつもりだった」

「だれかに先を越されたってわけだな」

「そうだ。この街にいる黒社会の連中はおれたちだけじゃねえからな。そんなこともあって、大老のお嬢さんの件も放り出したまんまになってるってわけよ。あんたには迷惑をかけることになる」

「遠慮はいらない。身内じゃないか」

「日本人の身内ってのも、妙なもんだぜ」

マックの唇が歪んだ。富永は昏い目でそれを見つめた。

「晩飯にはだれが来るんだ？」

「リッチモンドで商売をしてるガキどもだ。柄は悪いが、勘弁してくれ。若い連中のことは若い連中に聞くのが一番だからな」

マックは煙草をくわえた。富永はライターを指しだした。

「デュボンのライターか……あんた、徹底してるな」

「他に金の使い道を知らないだけさ」

「ああ、それからな、妙な話がある」

煙が車内に立ちこめた。

「どんな話だ」

「今日、リッチモンドの大老の家におまわりが来た」

「おまわり？」

「大老の家には婆あをひとり雇ってあるんだが、夕べ起きたガキどもの乱闘事件のことで小姐に聞きたいことがあるとって訪ねてきたそうだ」

「乱闘事件というのは？」

「ラリったガキどもの喧嘩さ。何人かが怪我をして、薬やチャカを持っていた悪ガキが何人か逮捕された。それだけだ」

煙が車内に立ちこめる。富永は窓をあけた。冷たい風が流れ込んできた。

「それで、大老の家に来たってのはどんなおまわりなんだ？」

「日本人だそうだ」

マックの唇が歪む。

「日本人？」

「婆さんがそうだった。そいつは酷い発音の北京語と広東語を話したそうだ。肌は黄色いが中国人じゃねえ。ヴァンクーヴァーでいえば、残るのは日本人と韓国人だ。婆さんは、日本人だといいきってるがね」

富永はコートのポケットから煙草を取りだした。赤いマールボロのパッケージ。どういうわけか、香港人はこの煙草を好む。何度かもらい煙草をしているうちに自分もマールボロを吸うようになっていた。

目の前にオレンジ色の炎が差し出された。ジッポだった。マックは富永の煙草に火をつけながら小さく首を振った。

「あんたのデュポンにはかなわねえけどな」

「デュポンなんていつだって買えるさ」

金属質の音をたてて炎が消えた。富永は煙を深く吸いこんだ。笑みを浮かべた。

「なにがおかしいんだ？」

富永はマックに顔を向けた。笑みが広がった。

「香港に来てから、日本人と口をきくのはやくざばかりだった。その日本人のおまわりと会うのが楽しみなのさ」

「日本人といっても、カナダ人だぜ、そいつは」

「かまうもんか」

煙を吐きだす。煙は風に流されて、窓の外に消えていった。

\* \* \*

「ようこそ、チャイナタウンへ」

車がとまった。マックが芝居がかった仕種で車の外を示した。それほど広く



はない一画に無数の原色のネオンが輝いていた。通りを行き交う人の群れ - - なにかに追われてでもいるかのようにせわしない。屋台につまれた中国野菜。レストランにウィンドウの向こうに吊るされた焼豚。ドアを開ければやかましい広東語が聞こえてくるに違いなかった。

「驚いたって顔だな」

「ああ。話には聞いていた。だが、見たのは初めてだ。マック、なんだって中国人は外国にも中国を作りたがるんだ？」

「おれたちの食べ物とおれたちの文化が世界一だからさ - - 降りようぜ」

助手席に座っていた古惑仔がいつの間にか車を降りていた。リア・シートのドアを開け、殊勝な顔をしていた。富永は柔らかに微笑みながら車を降りた。

「唔」

広東語で礼をいった。古惑仔の向こうに広がる街並みに視線をやった。眩しそうに目を細めた。目、耳、鼻 - - 五感を刺激するものはほとんど香港と変わらない。違うのは冷たい雨だけだ。

「ここにくれば、大抵の物は手に入る。香港の食べ物、女、金、噂話。香港にあるものはなんでもある」

マックが隣に佇んだ。自慢げな声だった。

「ここにあって香港にないものはなんだ？」

「白粉さ.....行こうぜ。ここで突っ立ってても濡れるだけだしな。店はすぐそこだ」

マックに背中を押されて、富永は歩きだした。フェラガモの靴が濡れた路面を踏みしめる。狭い道を通り抜けて反対側に渡った。いくつものレストランが並ぶ中、ひときわ派手なネオンが目を射貫いた - - 梁記麻辣火鍋。ネオンは真っ赤。エントランスは火を噴く龍をかたどっていた。マックは脇目も振らずにその店の中に入って行く。富永はあとを追った。龍のエントランスを潜りぬけると、火鍋特有の匂いが鼻をついた。

マックは案内を待たずに店の奥に進んでいく。富永は店の中を見渡した。客の入りは五分 - - みんな堅気だった。家族連れに給仕をしている若い男がマックの背中を視線で追った。目には軽蔑の色が浮かんでいた。

「どこに行ってもやくざは嫌われる」

日本語でいって、富永は店の中に足を踏み入れた。マックは店の一番奥にある扉の向こうに消えていた。ところせましと並べられたテーブルを縫う。店の

真ん中ほどに進んだあたりで、富永の足が凍りついた。視線は左手のテーブルに注がれた。親子連れ - - おそらく、祖母と母と娘。顔に皺を刻んだ祖母が孫の腕に鍋の中身をよそっていた。母親は退屈そうな眼差しでそれを見ていた。富永は女の顔を見つめていた。女が気づいた。

「なにか用？」

突き放すような声 - - 人生に倦んだ女の声。

富永は手袋の上から欠落した小指の部分を撫でた。

「香港でお会いしたことはありませんでしたか、太々？」

慇懃な口調でいった。頭の中では過去が音をたてて再現されていた。芸能人の誕生パーティ。李耀明の代理で出席した。お調子者のプロデューサーが富永をだれかれかまわず紹介してまわった。焦点があう - - 譚子華。その昔、一世を風靡した俳優。その妻として紹介された。売れない女優。顔と身体は図抜けているが、演技がからっきしだと聞かされた。三級片 - - ポルノに出演するか女優をやめるかとプロダクションに迫られ、譚子華と結婚する道を選んだ。名前はたしか、劉燕玲といった。

「だれかのパーティで会ったかもしれないわね。あなた、日本人でしょう？」

声の冷たさは変わらなかった。ファンデーションでごまかしていたが、目の下に微かな隈があった。ヘロイン - - 頭の中で言葉が明滅した。

「そうです」

劉燕玲の母親が胡散臭そうに富永の顔を眺め回していた。富永は微笑みを浮かべたまま頭を下げた。

「お食事中に失礼します。ヴァンクーヴァーに来たばかりで懐かしい顔をお見かけしたものですから」

「酷い発音だね。言葉はちゃんと勉強しなきゃだめだよ」

「気をつけます、大姐」

老婆は鼻を鳴らした。

「こちらにお住まいですか？」

「去年からね - - 」

「サム哥 - - 」

劉燕玲の声にがさつな叫び声が重なった。奥の個室からマックが顔を出して手招きしていた。富永は唇を噛んだ。

「お友達がお呼びのようね」

「残念ながら」

手帳を取りだし、数字を走り書きした。アパートメントと携帯電話の番号。紙を引きちぎり、劉燕玲に手渡す。

「もし、お暇なときがあれば電話をください。しばらくはこっちにいますので - - 必要なものがあれば、いっていただければご用意しますしね」

劉燕玲の目尻が一瞬、震えた。富永は丁寧に会釈してその場を後にした。マックがにやけた顔をしていた。手が速いな - - そう語っていた目が、次の瞬間には曇った。富永は肩ごしに振り返った。

老婆が劉燕玲の手から紙切れを奪いとり、丸めていいるところだった。富永の目が光った。唇の端がめくれあがった。獰猛な顔つきのまま、富永は息を吐いた。

\* \* \*

先客は三人だった。男がふたり、女がひとり。円卓の奥側に座っていた。三人とも若かった。

「紹介するぜ、サム。こいつが、リッチモンドの“中青堂”の幹部のトニィだ」

マックは革のロングコートを着た若者を指差した。短く刈り上げた髪にもみあげを伸ばしていた。立ち上がることもせず、不貞腐れたような態度で煙草をふかしていた。

「トニィ、こちらが香港から来たサム哥だ」

トニィはちらっと視線を送ってきた。それが挨拶のつもりのようなようだった。富永は苦笑した。

「なにがおかしいんだ、サム哥？」

トニィが口を開いた。若いわりには凄味のある声だった。

「日本人はいつだってへらへら笑ってるんだ。深い意味はない」

富永はトニィの真向かいに腰をおろした。

「彼女はシェリィ。シェリィはトニィの妹だ。それから、最後のひとりがウィリーだ」

マックが残りのふたりの名を告げた。シェリィはミニのこげ茶のワンピースを着ていた。ウィリーは革のスタジアム・ジャンパー。

「トニィはまだ二十二だが、リッチモンドの悪ガキどもを仕切ってる。あっちの悪ガキ連中のことなら、大抵のことは知ってるんだ」

マックは富永の横に腰をおろした。手を叩く。待っていたかのように店の人

間が個室に入ってきた。

「火鍋でいいな？ 酒はどうする？ ビールでいいか？」

「ワインがあれば、ワインをもらおう」

「あるさ。さっきいっただろう。香港にあるものはここにもあるってな」

マックが手際よく注文していく。鍋の中身に酒。ガキどもはビール。トニイは相変わらず不貞腐れている。シェリイはトニイに媚を売っている。ウィリーはじっと富永を睨んでいる。香港であったやくざを思いださせる視線。富永は煙草に火をつけた。頭の中 - - 劉燕玲の顔がちらついていた。ウィリーの視線がわずらわしかった。煙をウィリーに吐きかけた。

「トニイになめた真似をしたら、後悔させてやる」

瞬きもしない目でウィリーはいった。

「おい、ウィリー。サム哥はおれの大事な客だ。突っ張らなくてもいい」

マックがいった。ウィリーは怯まなかった。マックは舌打ちした。

「おれの顔を潰す気が、トニイ？」

「ウィリー、日本人を睨むのはやめろ」

トニイの声 - - ウィリーは富永から目をそらした。まるで操り人形のようにだった。ますますあの日本のやくざを思いださせた。

鍋と材料が運ばれてきた。真ん中でふたつに仕切られた鍋。片方の出汁は白く、片方は赤い。鍋に火が灯される。野菜、海鮮物、肉。鍋奉行の役目は無言のうちにシェリイに任された。最後にビールとワインが運ばれてきた。注がれたのは白ワイン。富永はマックに注ぎ返した。ガキどもは勝手にビールを注いでいた。

「それじゃ、乾杯だ」

マックがいった。

「なにに？」

トニイがいった。

「あんまり調子にのるんじゃねえぞ、トニイ」

低い声 - - マックの目が細くなる。愛想笑いが消え、野卑な表情が浮かんだ。

「そんなつもりはないよ、マック哥。日本人がおれたち香港人の問題に首を突っ込んでくるっていうんで、あんまりいい気がしないだけだ」

トニイの顔に薄笑いが浮かんだ。

「サム哥は大老のために働いてる。ってことは、おれの身内だ。日本人だろう

が何人だろうが関係ねえんだぜ、トニィ」

「わかってる。気に障ったんなら謝るよ、マック哥」

「わかりゃぁいい」

マックのこめかみの血管が脈打っていた。富永は煙草を灰皿に押しつけた。

「ビールが冷えちまうぜ」

ワイングラスを掲げた。四人がそれに倣った。

「乾杯の音頭はおれに取らせてくれるか、トニィ？ 日本式のやり方でおまえの未来を祝ってやるよ」

「日本式？ おもしろそうじゃないか。やってくれよ、サム哥」

トニィは“サム哥”という言葉をやっくり発音した。富永の顔に擻猛な笑みが広がった。

「首を洗って待ってな、くそガキ」日本語でいった。「そのうち、ぶち殺してやるからよ。乾杯！」

グラスをさらに高く掲げた。ワインを一気に飲み干した。

「いま、なんていったんだ？」

「無限の可能性が広がる才能豊かな若者の人生に幸あれ、とிட்டんだ」

トニィは疑うような視線を向けてきた。富永は微笑みながらその視線を受け止めた。

「どうした？ 飲めよ」

トニィは富永とグラスを見比べた。意を決したようにグラスを煽った。

「ブラヴォー」

富永は手袋を脱いだ。円卓の上に身を乗り出した。左手ををトニィに差し出した。

「これで、おれとおまえは朋友だ」

トニィはいぶかしげな顔をした。やがて、富永の左手に小指がないことに気づいた。

「日本のやくざなのか、あんた？」

「おれは李耀明大老の身内だ。それ以上でもそれ以下でもない」

富永はトニィの手を握った。細くしなやかな指 - - 握り潰してやりたいという衝動。トニィの手を話す。まだだ - - 自分にいいきかせる。話を聞いてからだ。ぶちのめすのはいつだってできる。

「さあ、挨拶が済んだところで、とっとと飯を食って話を終わらせよう。肉は

もう、煮えてるぜ」

「そうだな」

富永はマックの声にうなずいた。箸を取り、鍋に手を伸ばした。真っ赤に煮たった出汁。肉を摘まみ、口に放りこむ。火を噴きそうな辛さだった。

「それで、サム哥。おれになにを訊きたいんだ？」

「大老の娘に手を出した馬鹿なやつのことを」

「ミッシェルか」

トニィは吐き捨てるようにいった。シェリィが顔をしかめた。ウィリーは反応を示さなかった。鍋をつつきながら、ときどき、鋭い視線を富永に向けるだけだった。

「どんなやつだ？」

「いけ好かないやつだぜ。だれかれかまわずフランス語で話しかけてきやがる。ジュ・マベル・ミッシェル、エ・ヴー？」トニィのフランス語は聞いたものじゃなかった。「馬鹿丸だしたぜ。そのフランス語で片っ端から女に声をかけるんだ。あいつがこっちに来たのは半年ぐらい前だが、もう、百人以上のおまんこ、食っちまってるんじゃないか」

トニィはちらりとシェリィを見やった。シェリィは気がつかない振りをした。富永はうなずいた。シェリィのワンピースから覗く手首 - - 刃物で切った痕がある。ミッシェルに弄ばれて悲観したのか。トニィにこっぴどく折檻されたのか。いずれにせよ、トニィもシェリィもミッシェルを殺したいほど憎んでいる。

「シメてやればいいじゃねえか」

マックが口を挟んだ。

「それがな、あの野郎、なんだか知らねえけど金を持ってやがるのさ。その金で、ヴェトナムのチンピラどもを周りに侍らせてる。ヴェトナム野郎はなにをしでかすかわからねえからな。迂闊には手を出せねえ」

トニィの唇は憎々しげに歪んでいた。

「こっちに来てから半年だっていったな？ その前はどこにいたんだ？」

「モンリオールだって話だぜ」

「なんだってここに？」

トニィはシェリィに顔を向けた。シェリィは首を振った。

「わからねえな」

「ねぐらは？」

トニィがまたシェリィを見た。シェリィはおずおずと口を開いた。  
「ウィリアムズ・ロードにアパートメントを借りてるけど、そこには滅多に帰らないの。そのアパートはベトナム人たちがよく寝泊まりしてるわ」  
「じゃあ、ミッシェルは女のところを転々としてるのか？」  
シェリィはうかがうような視線をトニィに向けた。  
「教えてやれ」  
「そうよ。女の部屋か、そこがだめならモーテル」  
「携帯の番号は？」  
シェリィは首を振った。  
「いくら訊いても教えてくれないの。自分から連絡するからって」  
「あいつはクソ野郎だ。クソ野郎に引っかかる女はそれ以下だ」  
トニィがいった。呪詛のような声だった。シェリィは顔を伏せた。  
「シェリィ - - 」富永は歌うような声でいった。「兄貴ってのは、時々、妹に辛く当たるもんだ。父親の代わりだからな。自分が妹の面倒を見なくちゃならないと思ってるのさ。だから、そんな顔をするな。トニィはおまえのことを愛してるんだ」  
「おい。なに勝手なことくっちゃべってるんだ？」  
「トニィ」富永はトニィに顔を向けた。シェリィに向けた時とは顔つきが変わっていた。「シェリィは傷ついてるんだ。もっといたわってやれよ。妹だろうが、おふくろだろうが、婆さんだろうが、男は女に優しくしてやるもんだ。そうじゃないと - - 」  
「そうじゃないとなんだっていうんだ？」  
富永は左手を掲げた。  
「そうじゃないと、おれみたいに小指を失くすことになる」  
歯を剥いて笑った。  
「女のせいでそうなったのかよ？」  
「馬鹿馬鹿しいか？」  
「いや。おれはただ、家族のことに他人が口出しするのが我慢できねえだけだ」  
「OK。これ以上、口出しはしない。シェリィ - - 」  
富永はネクタイを緩めた。鍋の湯気 - - 唐辛子の効いたスープ。身体が火照りはじめていた。劉燕玲の横顔が脳裏にちらついていた。  
「なんでもいいから、おれに教えてくれ。ミッシェルに会いたかったらどこへ

行けばいいと思う？」

「ビリヤード・バーかカジノ。ミッシェルはそういうところにセクシな恰好をさせた女を連れていくのが好きなのよ」

富永はマックに問いかけるような視線を向けた。マックは首を振った。

「ビリヤードはわからねえが、カジノはおれたちの息がかかっている。小姐を見たって話は聞いてねえ」

「リッチモンドは？」

「あっちにあるのはアンダーグラウンドのカジノだけだ」トニィが煙草の煙を吐きだした。「ミッシェルも李少芳も最近見かけたことはない」

「少芳小姐はどうなんだ？ 完全にミッシェルにいかれてるのか？」

「ミッシェルにいわれれば、人前でも股を開くんじゃねえか。それぐらいいかれてるよ。李耀明も大変だな、あんなのが娘だっていうんだから」

トニィは笑った。富永は笑わなかった。マックも笑わなかった - - テーブルの上で拳を握っていた。

「そんな怖い顔すんなよ。ただの冗談さ」

「冗談だよな」マックが口を開いた。「じゃなきゃ、おれはおまえを殺さなきゃならなくなる」

「だれがトニィを殺すって？」

ウィリーが立ち上がった。すわった目、紅潮した頬、ジーンズのポケットの中に突っ込まれた右手 - - 十中八九、ナイフを握っている。ルールと畏れを知らないガキ。こういうガキが一番始末に負えない。

「だれがトニィを殺すって？」

ウィリーは同じ言葉を繰り返した。マックは答えなかった。代わりに右手をスーツの中に入れた。ゆっくり銃を引き抜いた。シェリィが息をのむ。トニィは平然としていた。

「だれがだれに口をきいてるんだ、ウィリー？」

マックはウィリーの口調を真似た。ウィリーの頬が震えた。

「大人げないぜ、マック」富永はマックの銃身を掌で押しさげた。「李少芳はクソみたいなガキだ。大老は娘の育て方を間違えたんだ。あんだって知ってるだろう」

「サム - - 」

マックが歯を剥いた。富永はそれを遮ってつづけた。口を動かしながら椅子



をひいた。

「それでも、おれたちは大老のためにあの馬鹿娘の面倒を見る。大老に恩があるからだ。頭のいかれたガキを脅してる場合じゃない」

諭すような声だった。マックの目を覗きこむ。瞬き - - 合図 - - おれに任せろ。マックの顔から険が消えた。

「頭のいかれたガキってのはだれのことだ？」

ウィリーの声が俯した。富永は呆れたというように首を振った。

「おまえのことだよ、ウィリー。他にだれがいる？」

「死にたいのか、日本野郎」

ウィリーがナイフを抜いた - - スウィッチ・ブレイド。富永は円卓を蹴りあげた。鍋が飛んだ。煮たったスープが飛んだ。ウィリーの顔に赤い飛沫がぶちまけられた。

悲鳴 - - シェリィとウィリー。トニィは声を立てずに椅子から転げ落ちた。マックがトニィに銃を向けた。

富永は立ち上がった。床を転げ回るウィリーに近寄った。ナイフを拾いあげた。

「熱いか、ウィリー？」

静かな声でいった。ウィリーは唸りつづけた。扉が開いて従業員が飛び込んできた。

「どうしました!？」

富永は振り返った。マックの銃を見て従業員が凍りついていた。

「なんでもない。ちょっと鍋がこぼれただけだ」微笑む。「たいしたことはないから、気にしないでくれ」

「で、でも……」

「嫌なものを見たくなかったら、出ていった方がいいといってるんだ」

微笑みが広がった。富永の歯が剥き出しになった。

「行け」

マックが手を振った。従業員は逃げるように出ていった。

「トニィ」富永は笑ったまま口を開いた。「これはおまえとはなんの関係もない」

「なんだと？」

「おれはおまえが気に入った。おまえは妹思いだからな。だから、おまえとこ

とを構えるつもりはない」

富永は指の腹でナイフの刃先を撫でた。

「だが、ウィリーは別だ。おれは、こういういかれたガキにはムカつくんだ」

「なんの話をしてるんだよ!？」

「こういうことさ」

富永は指先でナイフの柄をつまんだ。刃を下に向けた。両手で顔を掻きむしるウィリー - - その右手を踏んだ。ウィリーがもがいた。足に体重をかける。なにかが折れる音がした。

「なにしやがる！」トニィの絶叫。

「動くんじゃねえ、トニィ！」マックのどすのきいた声。

シェリィとウィリーの悲鳴。

富永は目を閉じた。ナイフを放した。ウィリーの悲鳴が甲高いものになった。ナイフはウィリーの掌に突き刺さった。富永は目を開けた。ナイフごとウィリーの手を踏みにじった。ウィリーの悲鳴がかすれて消えた。富永は舌打ちした。

「気絶しやがった。これからだっていうのに - - トニィ、代わりの用心棒を探した方がいい。ウィリーじゃ話にならない」

富永は歌うような口調でいった。

\* \* \*

ミッシェル - - 柔らかそうな長髪を頭の後ろで束ねている。口許が皮肉に歪んでいる。醒めた目がレンズに向けられている。車窓から差しこむ街の明かりが写真に微妙な陰影をつけていた。

「よっぽどその写真が気に入ったのか？」

マックの声に、富永は視線をあげた。指先でつまんだ写真 - - シェリィから譲り受けた。握り潰された痕がはっきりと残っている。ミッシェルに捨てられ、怒り狂ったシェリィの姿が脳裏に浮かぶ。写真に向かって罵り、涙を流し、それでも、一縷の望みを捨てられない愚かな娘。

「大老の娘を誑かすガキってのはどんなもんかと思ってな」

富永は写真をスーツのポケットの落としこんだ。

「小姐は携帯電話は持ってないのか？」

「持ってるさ。ただ、かけても無駄だ。電源を切ってるんでな」

「行き止まり、か」

「明日から、どうする？」

「ガキどもが集まりそうなところを片っ端から当たってみる。とりあえず、リッチモンドだな。ヴェトナムの連中の溜まり場を教えておいてくれ」

「若いのをふたりばかりつけてやるよ。ヴェトナム系は荒っぽいからな……といっても、さっきのあれを見せつけられたあとじゃ、いうだけ無駄か」マックは何度も首を振った。「正直いってな、日本人になにができると思ってた。まいったよ。あんた、筋金入りだ。大老が気に入るわけがわかった」

「あんたもたいしたもんさ、マック。おれがなにをするか知りもしなかったのに、きっちりトニィを抑えつけてくれた」

「心臓がバクバクいったぜ。それを隠すので精一杯さ……だが、気をつけるよ。トニィはだいじょうぶだと思うが、あのウィリーってガキは、あんたのこと、狙うかもしれないぜ」

「銃は用意できるか？」

「もちろんだ。明日、届けさせる」

富永は視線を窓の外に向けた。雨にけぶる街並みをベントは走っていた。雨はやむ気配がなかった。

「この車はどこに向かっているんだ？」

「あんたのねぐらさ。女が待ってる。飛び切りの女だ」

「そうか……」

劉燕玲の横顔 - - ヘロインでやつれた顔。恭子を思いだす。弾力を失った肌と乳房。恭子は覚醒剤を打つためだけに日々を生きていた。

「悪いが、女は帰してくれないか」

「どうした？ 問題があるのか？」

「血を見た日は、女を抱く気にはなれないのさ」

富永は唇を歪めた。

「普通は逆だぜ、サム」

「あの火鍋屋にいた女、知ってるか？」

「あれはやめとけよ」マックの声から陽気さが消えた。「譚子華の女房だ。バックに新義安がついてる」

新義安 - - 香港黒社会の有力組織。芸能界と深い関りを持っている。

「そいつは怖いな」

「ああ、あんな顔してるが、怖い女なのさ」

だが、だれかがその怖い女にヘロインを売っている - - 確信があった。  
「どうする？ 本当に女を帰すか？」  
「ああ。カジノに行き先を変えてくれ」  
「この街にはショボいカジノしかないぜ」  
富永は肩をすくめた。嬉しそうに笑った。  
「だれかを痛めつけた日は、運がいいんだ。せいぜい稼がせてもらうさ」  
「悪いが、おれは付き合えない」  
「わかってる。福建野郎の後始末があるんだろう」  
「そういうことだ。だれが野郎をぶち殺したのか突き止めねえことには、尻の辺りが薄ら寒くていけねえ」  
ヘロイン - - ヴァンクーヴァー。思っていたよりは楽しめるかもしれない。  
富永は満足そうにうなずいた。

\* 13

くだらない仕事 - - 殺人課と麻薬課の刑事に状況を話す。何度も繰り返す。  
それを書類にしたためる。苛立ちが募る。  
ヘロイン欲しさに身体を売る劉燕玲。ジェシカに預けたヘロイン。両方を手に入れるためには慎重に行動しなければならない。  
阿一 - - 所持していたシンガポールのパスポートは偽造されたものだった。  
正確な身元はいまだに不明。死因は失血死。身体のおちこちに煙草を押しつけられた痕があった。  
床にぶちまけられていた白い粉 - - ヘロイン。純度は高い。鑑識の連中が部屋の中を隈なく捜し回った。ヘロインも指紋も出てこなかった。  
プロの手口 - - タレコミ屋の音が蘇る。カナダは白粉に飢えている。あの時は笑い飛ばした。ヘロイン売買の独占化。今では笑う気にはなれない。阿一のヘロインもだれかが目の色を変えて追いかけているはずだ。  
ジェシカからヘロインを取りあげて、売りさばく - - そのヘロインを使って劉燕玲に近づく。思うだけで背筋に震えが走った。  
最後の文字をタイプする。末尾に署名。呉達龍は椅子から腰をあげた。タイプした書類を束ね、ドレイナンのオフィスに向かった。  
「警部、報告書を書きあげました」  
ガラス張りのドアをノックする。ドレイナンは書類を読んでいた。ゆっくり視線があがる。呉達龍を認めると、その目に侮蔑の光が走った。

「時間がかかりすぎだ」

ドレイナンはいった。

「申し訳ありません」

屈辱をこらえる。抗って時間を無駄にするわけにはいかなかった。ジェシカの手元にあるヘロイン。あの売女がおとなしく自分を待っているとは思えない。

呉達龍は報告書をドレイナンに渡した。ドレイナンが目を通しはじめる。いたたまれない気分が襲われる - - いつもそうだった。くそつたれの白人相手に卑屈になる必要はない。何度自分にいい聞かせてもこの気分は消えない。ヴァンクーヴァーに来るまでは感じたこともなかった。蘭桂坊あたりでたむろする白人連中 - - 馬鹿にしていた。だが、この国に来るとすべてが変わる。自分の運命を握っているのは、目の前のクソ野郎なのだということが身に沁みてくる。

ドレイナンが目をあげた。

「犯人は中国人だな。まったく、どうかしている。おれたちの国に、おまえらのような連中が大拳して押し寄せて、殺し合いをはじめてるんだ」

呉達龍は口を開かなかった。

「おまえたちはどうして人の国にやって来る？ いや、やって来るのはかまわん。だが、どうしてやって来た国のルールを守らんのだ？ おまえらときたら、世界中どこへ行っても、そこが中国だと思いこんでいるんじゃないのか？」

名状しがたい感情が襲ってきた。人の国 - - どこがだれの国だということか。もとはといえば、北米大陸はインディアンの土地だ。それを奪い、好き勝手に作り替えたのはどこのだれなのか。

呉達龍は口を開かない。感情のない目でドレイナンを見つめていた。

「この件は殺人課と麻薬課、それにうちの合同捜査になる。明日の十時にミーティングだ。必ず出席しろ。二度と、今日のようなことは許さん」

「わかりました」

呉達龍は回れ右をした。足早に部屋を出る - - イエロウ・モンキィ。聞こえよがしの声が聞こえた。拳を握りしめた。自分のデスクに戻り、乱暴に腰をおろした。

ビー・クール。英語でつぶやいた。熱くなっている場合じゃない。おまえにはまだ仕事がある。

机の上を整理し、拳銃を取りだした。動作をチェックし、弾倉を叩きこむ。ドレイナンを撃つシーンを思い浮かべる。気分がましになった。

「ヘイ、ロン。銃なんか出して、なにやってるんだ」

呉達龍は顔をあげた。ケヴィンが脇に立っていた。

「あんた、こっちが専門だろう？」

ケヴィンはボクシングの真似をした。

「あの死体を見ただろう。ヤバい連中が相手になるかもしれない。まだ、死にたくはないからな」

「まったくだ。えげつないことをするぜ。あんな死体に出くわす警官は、アメリカの警官だけだと思っていたよ」

「あの程度なら香港でもよく拝めるさ」

ケヴィンは大袈裟に目を丸くした。

「中国人に生まれなくてよかったよ」

呉達龍はケヴィンを睨んだ。

「ジョークだよ、ロン。そんな怖い顔をするなよ。それより、今夜、つきあわないか？ 酷い死体は見るし、美しいレイディとのパーティもおじゃんだ。騒がなきゃ、やってられないぜ」

「悪いが、ケヴィン、今夜はだめだ」

「またアルバイトか？」

「ああ、家族をこっちに呼び寄せる金を稼がなきゃならんからな」

「働きすぎはよくないぜ」

「おれだってたまには休みたいな。けどどな、ケヴィン。あんたたち白人が中国人を締め出すために法律を変えちまったんだ。おれにできるのは、身体を使って稼ぐことしかないんだよ」

\* \* \*

雨にみぞれが混じっていた。午前零時。パウエル・ストリートには人気がない。百メートルほど先の路上のパトカーの屋根の上で赤色燈が明滅している。

呉達龍は車の中に潜んでいた。路肩にとめた車。エンジンをかけたまま停車していると怪しまれる。車内は冷えきっていた。手袋をはめ、コートの際を立てる。それでも、冷気は忍び寄ってきた。

アパートメントを見張りをはじめ二時間が経っていた。床には、チャイナタウンで仕入れてきたテイクアウトの空箱が落ちている。二時間の間に電話を二本かけた。一本は鄭奎に - - 杜徳鴻がイエスといった。鄭奎は満足して選挙に当選した時は特別ボーナスを用意しようといった。呉達龍は相手に聞こえない

ように唾を吐いた。もう一本はタレコミ屋の趙偉に - - 阿一とつきあいのあった連中の名前を片っ端からかき集める。白粉の匂いがする情報をかき集める。趙偉は返事を渋った。飴と鞭 - - うまくいったら金を弾んでやる、断ったら、おまえはフレイザー河に浮かぶ。趙偉もイエスといった。

アパートメントから制服警官が出てきた。その後が続いて私服がふたり。顔に覚えがあった。殺人課の連中だった。阿一の部屋の封鎖を終えて、署に戻るのだろう。だれの顔にも苦役から解放されたという雰囲気漂っている。

「早く行け」

呉達龍は広東語でいった。歯が鳴っていた。寒気にこめかみが痛んでいた。

警官たちがパトカーに乗り込んだ。排気ガスがふきあがった。みぞれのせいで車輪が滑る。二台のパトカーが尻を左右に振りながら去っていく。

呉達龍は腕時計を覗いた。吐く息が白い。そのまま、五分待った。辺りに変化はなかった。みぞれ混じりの雨がアスファルトを叩く音がするだけだった。身を起こし、エンジンをかけた。身体の節々が痛んだ。無線のスイッチを入れた。ヒーターをオンにした。スピーカーから声が流れてくる。耳を傾けながら、身体を入念に揉みほぐした。

不審な情報はない。アパートメントに警官が残っているという情報もない。当然だ。ここはアメリカじゃない。

ジェシカは部屋にいる。仕事に出たいといっても警官が許さなかったはずだ。繰り返される事情聴取。部屋の中に隠した白粉。ヘロイン中毒のジェシカ。気も狂わんばかりになって、今ごろはヘロインを打っている。

呉達龍は車を移動させた。人目につかない場所。闇にまぎれることができる場所。パウエル・ストリートではそんな場所は簡単に見つかる。打ち捨てられた商店の脇の路地に車を入れた。エンジンを切り、手袋を外した。銃を点検する - - 異常なし。自分の心の中の声に耳を傾ける - - 白粉を手に入れろ。もう一度手袋をはめた。車を降りた。パウエル・ストリートに出た。左右を見渡した。人影はない。雨を跳ね上げる車の姿もない。

ゆっくり、アパートメントに近づいた。もう一度、左右を確認し、アパートメントの中に入った。

階段を使って二階へ。Bフラット。ドアをノックする。

「だれ？」

ひそめられた声。

「あんたのビジネス・パートナーだ」

呉達龍はいった。チェーンが外れる音がしてドアが開いた。弛緩した顔。どこか焦点のあわない瞳。ジェシカはご機嫌だった。

「遅かったじゃない」

ジェシカは身体を横に開いて呉達龍を招き入れた。呉達龍の背中で扉が閉じる音がした。部屋の中はむっとするほど暖かった。ジェシカはキャミソールの上にカーディガンを羽織っていた。むくんだ肌が憐れさを醸しだしていた。

「今日は仕事は休みか？」

「あんたのお仲間が入れ代わり立ち代わりやってきて、それどころじゃないわ。損害賠償してもらいたいぐらいよ」

呉達龍はジェシカの腕を掴んだ。カーディガンを払い落とす。右腕の静脈に注射の痕があった。

「なにすんのさ！」

ジェシカは呉達龍の手を振りほどいた。落ちたカーディガンを拾いあげ、羽織った。

「今夜の稼ぎなんて、あのヘロインを売っばらえば、あっという間に回収できる」

「そのことなんだけど - -」

呉達龍が“ヘロイン”といった途端、ジェシカの顔から険が消えた。売女特有の媚が滲みはじめた。

「お酒でも飲みながら話さない？ あんたの手、冷たいわ。凍えてるんじゃないの？」

「飲ませてくれるっていうなら、もらおうじゃないか」

呉達龍は足を踏みだした。ジェシカの部屋の作りは、阿一のそれと同じだった。廊下の先が狭っ苦しいダイニング、その奥にベッドルーム。ダイニングは阿一の部屋よりはましという程度に片づいていた。古いが味わいのあるダイニング・テーブルが中央に据えられていた。阿一の部屋と違うのはダイニングとキッチンがカウンターによって仕切られているところだった。

「なにを飲む？ たいがいの物は揃ってるわよ」

その言葉で、ジェシカがこの部屋を仕事に使っていることがわかった。ホテル代も払えない貧乏人専用の娼婦。香港にも腐るほどいた。彼女たちは大陸から成功を夢見てやってくる。香港ドリーム。そんなものは存在しない。この世



を統べる真理は、金持ちはさらに儲け、貧乏人はとどまることなく貧しくなっていくという事実だけだ。

「ブランディをくれ」

呉達龍はいいながら、腰をおろした。

「ブランディね。中国人って、どうしてブランディが好きなのかしら」

ジェシカが背を向けた。カウンターの向こうに歩いていく。呉達龍は腰のホルスターから素速く拳銃を抜いた。銃身を下に向けて腿の間に挟んだ。その間もジェシカの背中から目を離さなかった。ブランディになにを入れられるか、わかったものじゃなかった。

「ねえ、あのヘロインなんだけど」

ジェシカが振り返った。カウンターに肘をつき、グラスを揺らした。怪しい動きはなかった。だが、最初からグラスかボトルになにかを仕込んでおけば、確かめる術はない。だが、ジェシカの緩慢な動きを見ると、それも杞憂だという気がした。

「ヘロインの話の前に、悪いが、それを飲んでみてくれ」

呉達龍はいった。平板な声だった。

「どういう意味？」

「あのヘロインを売って手に入る金は、身内だって殺しかねない額だってことだ」

ジェシカの顔に陰が蘇った。映画の特撮を見ているような変わりぶりだった。

「わたしがあんたを殺すと思ってるの？」

「そうは思っていない。あんたはおまわりを殺すことのリスクを心得てるはずだからな。ただ、用心のために、それを飲んでほしいのさ」

「まあ、確かに - - 」ジェシカはグラスを掲げた。「あんな量のヘロイン、見たことないわ。売れば凄いお金になるわよ」

グラスが傾いた。琥珀色の液体がジェシカの口に流れ込んでいった。呉達龍はじっと見守った。

「これで満足？」

ジェシカの目には陶酔の色があった。ヘロインがもたらした偽りの魔力。呉達龍を丸め込めるつもりでいる。

「合格だ。ビジネスの話をしよう。ヘロインはどこだ？」

呉達龍は煙草をくわえた。腿の間に挟んだ銃の感触を確かめた。

「その前に、分配の方法を決めましょうよ」

ジェシカは唇を舐めた。誘うような目で呉達龍を見た。化粧で隠そうとした皺 - - ごまかしきれしていない。呉達龍は劉燕玲を思った。あの滑らかな肌もいつかジェシカのようになる。その前に、なんとしてでもいただいでしまいたい。「それもそうだな。あんたはどうしたい？」

「わたしが六割であんたが四割」

「馬鹿をいうな」

「変な話ってわけじゃないわ。考えてみなさいよ、あんた。もし、わたしが警察に駆け込んだらどうなる？ 中国系の刑事が殺された人の部屋からなにかを持ち出して、わたしに預けたって」

「そんなことをすれば、あんたもただじゃすまない。他の刑事が来たときにどうしていわなかったんだってことになる」

「あんたが恐かったのよ」

ジェシカは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。わかっている。それでも、鳩尾の辺りが熱くなるのを抑えられなかった。鄭奎の傲慢な命令、CLEUの捜査官、杜徳鴻とのやり取り、叶えられなかった劉燕玲への想い、そして、ジェシカ - - 絡み合って沸騰しそうだった。

「そういうわ。たとえ、信じてもらえなかったとしても、わたしは微罪。だけど、あんたはそうはいかない。違う？」

刑務所行きは間違いなかった。広州にいる子供たちを呼ぶというプランもおしまいだった。

「そんな怖い目で見ないでよ」

勝ち誇った笑みと憐れむような視線。嘔きでそうなどろどろとした感情。ジェシカの顔に鉛の弾丸を叩きこむことを想像した。

「わたしは別に、全部よこせっていったわけじゃないのよ。あの粉を売ることを考えなきゃならないし、女ひとりじゃ危険だもの。悪徳警官と手を組めるなら、これ以上のチャンスはないでしょう？ それに - - 」

ジェシカはもう一度唇を舐めた。羽織っていたカーディガンを払い落とした。捻った腰に手を当てた。

「わたしのいい分を聞いてくれたら、好きなときにやらせてあげるわ。どう？ いい話じゃない？ 白人女を好きにできるのよ」

喉が震えるのを感じた。笑いが込みあげてきた。

「なにがおかしいのよ？」

笑い声は部屋中に響いた。

「なにがおかしいのかって聞いているのよ！」

「おまえみたいなくたびれた売女を、だれが好き好んでやりたがるっていうんだ？ 冗談も休み休みいえよ」

ジェシカの目尻が吊りあがった。唇がわなないた。

「イエロウ・モンキィ！ わたしを馬鹿にするのは許さないよ」

「おれが猿なら、おまえは豚だろう。薬のやりすぎで、食うこともできないクズの豚だ」

ジェシカが動いた。腰に当てていた手を、カウンターの下に伸ばそうとした。呉達龍は腿の間に挟んでいた銃を手にした。ジェシカに向けた。

「動くな！」

低いがよく通る声で命じた。ジェシカの動きがとまる。凍りついた表情が銃に気づいて歪みはじめた。

「そのまま動くなよ、白豚め」

呉達龍は立ち上がった。銃をジェシカに向けたままキッチンに向かった。カウンターを回り込む - - カウンターの下は抽斗と棚になっていた。銃身でジェシカを押しつけた。半分開いた抽斗の中を覗いた。銀色に輝く銃があった。小振りのリヴォルヴァー。左手で拾い上げ、ジェシカに向き直った。

「知ってるか？ 猿と豚じゃ、猿の方が知能が高いんだぜ」

「許して……」

ジェシカの声は震えていた。目に宿っていたヘロインの魔力が消え失せていた。呉達龍は銃口をジェシカの額に押し当てた。

「許すかどうかはおまえ次第だ。ヘロインはどこだ？」

「べ、ベッドルームよ」

「案内してもらおうか。変な真似をしようと思うなよ。イエロウ・モンキィはすぐに引き金を引きたがる生き物だぜ」

「撃たないで。お願いよ……」

「歩け」

呉達龍はリヴォルヴァーをコートのポケットに入れた。あいた手でジェシカの肩を押した。ジェシカは操り人形のように歩きはじめた。

\* \* \*

ベッドルーム - - 精液の匂いがこびりついているような気がした。

ジェシカが明かりをつけた。すべてが古びていた。ベッドだけが分不相応に立派だった。

「どこにあるんだ？」

目を細めて部屋の中を見渡しながら呉達龍は訊いた。

「お願い……」ジェシカが振り向いた。「もう、馬鹿なことはしないわ。だから - - 」

「ヘロインはどこだ？」

「わたしを殺すつもりなのね？」

「そこまではしない」呉達龍はジェシカの目を覗きこんだ。「おまえが、おれを警察に売ったりはしないと納得できたらな」

「そんなことしないわ。信じて」

「だったら、ヘロインの隠し場所を教えろ」

「冷蔵庫の中よ」

ジェシカの目から涙がこぼれはじめていた。ジェシカの目を彩ったマスカラが涙に溶けて滲んでいた。

「ヘロインはベッドルームにあるといわなかったか？」

「ごめんなさい。もう、嘘はつかないわ」

ジェシカの息が顔にかかった。香港で嗅いだことのある匂いがした。黒社会の掟に逆った連中が吐く息と同じ匂い。もうすぐ死ぬことを宣告された連中の息と同じ匂い。呉達龍は知っていた。こういう匂いに息を吐く連中は嘘をつかない。そうした連中は、金よりも自分の命の方が大切だということを悟っている。

「ベッドにあがれ」

呉達龍は銃身を振った。涙に濡れたジェシカの目が怪訝そうに曇った。

「ベッドにあがれ。好きにしていいいんだろう？」

「わ、わたしを抱くの？」

「そうすれば、おまえも安心だろう。このままおれがヘロインを持って出ていけば、おまえは不安になる。おれが分け前をくれるだろうかってな。抱いてやるよ。それで、おれを喜ばせてみる。満足したら、おれは白豚を飼ってやってもいいと思うかもしれないぜ」

ジェシカは唇を噛んだ。屈辱と打算が瞳の奥で火花を散らしていた。

呉達龍は右手の銃をホルスターにしまった。まき餌 - - ジェシカはすぐに引  
っかかった。

「いいわ」

震える声がジェシカの口を割って出た。ジェシカはベッドに腰をおろした。  
カーディガンとキャミソールを脱ぎはじめた。

「この商売、二十年もやってるのよ。男を喜ばせる方法はいくらでも知ってる  
わ」

荒れた肌があらわになった。たるんだ皮膚が揺れた。萎びはじめた乳房。栗  
色の陰毛。ヴァンクーヴァーに行ったら、白人女を買うんだろう - - ふいに言  
葉が蘇る。香港皇家警察の同僚の言葉。そのつもりだった。すぐに実行した。  
そして、売女の目の奥に潜む蔑みに我を忘れた。沸騰しそうだった感情 - - い  
まは煮えたぎっていた。

ベッドが軋んだ。ジェシカが身体を横たえた。

「来ていいわよ。楽しませてあげる」

呉達龍はジェシカのうえに屈み込んだ。左手をコートのポケットに突っ込ん  
だ。リヴォルヴァーが手に触れた。グリップを握った。

「ねえ、コートと手袋ぐらい、脱ぎなさいよ」

媚を含んだ声。呉達龍は右手を萎びた乳房に伸ばした。左手をポケットから  
抜いた。乳首を摘まむ。固くなった乳首 - - おぞましかった。吐き気を覚えた。  
ジェシカに体重をかけた。

「あ、あんた - - 」

身体の下で、ジェシカがもがいた。呉達龍はジェシカの口を手で塞いだ。

「白豚め、身のほどを思い知らせてやる」

広東語で囁いた。口を押さえたまま、左手の銃でジェシカを殴った。皮膚が  
裂け、血が飛び散った。阿一を殺った連中の手口だと思わせる - - だれかが囁  
く。何度も殴った。力を込めすぎないように意識を集中させなければならな  
かった。ヒーターの熱気、重いコート、煮えたぎる感情。汗が流れ落ちてくる。

ジェシカが動かなくなった。呉達龍はゆっくりジェシカのたるんだ肌から身  
体を離れた。重厚に抉られた顔。静かに隆起する胸。白豚の末路 - - 笑みが込  
み上げてくる。

銃を右手に持ち替えた - - ジェシカの股間に押し当てた。銃口を強引に褻の  
中にめり込ませた。

手を伸ばして枕を取った。ジェシカの股間を枕で押し包んだ。引き金を引いた。くぐもった銃声がした。ジェシカの身体が大きく跳ねた。

もう一度、引き金を引いた。銃声。腕に衝撃が伝わる。心臓がひときわ強く脈打った。枕から腕を抜いた。血まみれの銃身が鈍い光を放った。手袋とコートにも血は飛び散っていた。

呉達龍は銃を放り投げた。キッチンへ向かう。冷蔵庫 - - フリーザーの中。ビッグサイズのアイスクリームのパッケージ。中にはビニールに包まれた白い粉。

また、笑いが込み上げてきた。今度は抑えることができなかった。呉達龍は腕の中にヘロインを抱えて、涙を流しながら笑いつづけた。

\* 14

「相変わらず、お坊ちゃんの住む部屋は違うな」

パットはへべれけだった。アルコール。あるいはマリファナ。あるいは両方。目がうるみ、口もとが垂れさがっていた。うるんだ目は部屋の中をさまよっていた。

「どこで飲んでたんだ？」

「どこで？」パットは窓際によるめいていった。いつもの儀式 - - 窓の外に広がるヴァンクーヴァーの夜景を見おろす。「わかってるだろう、ハリィ。リッチモンドのビリヤード・バーで黒社会の連中とおだをあげたのさ」言葉のあとに、口笛。「いつみても恐ろしい景色だぜ、ここは。いつか、おれも住んでみたいもんだ」

「住めるさ」

「馬鹿いえ」パットは振り向いた。「こんなアパートメントに住めるおまわりはな、数億ドルの資産を持つくそつたれを親父に持ったおまわりだけだ」

「親父が金持ちなのはおれのせいじゃないよ、パット」

ハリィの声は弱々しかった。ベッドルームが三つあるアップタウンのアパートメント - - 確かに、普通の警官の給料で借りられる部屋ではない。

「そんなことはわかってる。親父がくそつたれの金持ちで、おまえ自信は上昇志向の鬼ってわけだ。たいした連中だぜ、日本人ってのはよ」

「パット - - なにがあつたんだ？ 今日はやけに荒れてるじゃないか？」

パットは口を開き、閉じた。唇の端がかすかに痙攣した。目からうるみが消えた - - くたびれたような表情が浮かんでくる。

「悪かったな、ハリィ。こんな仕事をしてると、いろいろあるのさ」

「おれでよかったら、悩みを聞くよ」

パットはよろめくような足取りでリビングを横切った。崩れ落ちるようにソファに腰をおろした。

「明日、トロントに行ってくる」

うなだれたながらパットはいった。

「トロント？」

「ヘロインを運ぶのさ - - 酒をくれよ、ハリィ。もう、絡んだりはしないから」

「ブランディでいいか？」

うなだれたままでパットがうなずいた。口だけが動きつづけていた。

「おまえも知ってるだろう。秋あたりから、この国のヘロイン市場はきな臭いことになってる」

ハリィはパットの声に耳を傾けながら部屋の隅に足を向けた。黒光りするカウンター。ここに越してきたときからあった。ハリィは取り外させようとしたが、父親がそれを阻んだ - - ホームパーティを開くときは、こういうものがあつた方がいいんだ。この部屋でパーティを開いたことはない。

「毎日のようにタレコミがある。市警や騎馬警察の連中は手入れに大忙しだ。タレコミがなけりゃ、組織同士の奪い合い。おかげで、ヘロインの値段は跳ねあがりつづけてる」

ハリィはカウンターの裏の棚からヘネシーを取り出した。ブランディグラスに注いだ。

「ああ、確かにおかしいことになってるな。うちでも対策本部を作ろうかっていう話が出ているぐらいだ」

いいながら足元の冷蔵庫をあけた。よく冷えたボトルを掴んだ。菊姫の大吟醸。去年、父親の仕事仲間から譲り受けた酒。とっておきの酒。パットのブランディグラスと一緒に両手に持った。

「黒社会の連中は、疑心暗鬼に陥ってるのさ。こんなこと、今まではなかった。だれかがなにかを企めば、だれかの耳に伝わる。それがこの世界だ。ところが、今度のヘロイン騒動に関しちゃ、だれもなにも知らないんだ」

ブランディグラスをパットの前に置いた。パットはグラスを手にした。匂いを嗅ぎ、口をつける。それだけでグラスを置いた。

「それとおまえのトロント行きになんの関係があるんだ」

ハリィは用意した小振りのグラスに日本酒を注いだ。

「おれは疑われてるのさ」

「おまえが？ C L E U 最高の潜入捜査官といわれてるパトリック・チャウが？」

「いっただろう。いま、黒社会は疑心暗鬼の雲で覆われてるんだ。ボス以外のだれもが疑われる」

パットはもう一度ブランディグラスに手を伸ばした。両手で包み込むようにグラスを掴む。口はつけなかった。ブランディの中にだれかがいるとでもいうように、グラスの中身を凝視するだけだった。

ハリィはその横顔を盗み見た。無精髭が生えた顎。日焼けした首筋には深い皺が刻まれている。

この二年でパットは変わった。初めて会ったのは三年前。広州からやって来た陽気で頭の切れる中国人。滑らかな肌と、人の心を見透かすような鋭い目が印象的だった。潜入捜査官としての歳月が、パットを変えた。薄汚れ、ひび割れた肌。素面のときは相変わらず陽気だが、酒がすぎれば一変する。昏い目 - - 煉獄で生きながら身体を焙られている者の目。

その目がハリィを見た。

「わけがわからないって顔だな、ハリィ。そりゃそうだ。ヘロインを運ぶことぐらい、今までだって何度もやってるからな」

「だったら、どうして？」

「状況が今までとは違うからさ。おれは今まではうまくやってきた。そうだろう？」

ハリィはうなずいた。

「おれは黒社会の阿呆どもを手玉に取ってきた。大物を気どってるやつらだって、おれがおまわりだなんてこれっぽちも気づきやしない。リッチモンドのワルどもで、臆病者の阿強を知らないやつはいない。根性が座ってないからひどい悪さはできないが、気のいい阿強。金がありゃ仲間に奢り、なけりゃたかる。C L E U に引き抜かれてからの二年間、おれはずっとそうやってきた」

パットの声 - - だんだん甲高くなっていく。ハリィはバーに行き、ヘネシーのボトルを持ってきた。ほとんど減っていないパットのグラスに注ぎ足す。

「飲めよ、パット。飲んで、少し落ち着け」

「いらん。おまえが飲め」



「他に欲しいものは？」

パットは首を振った。

「みんなおかしくなってやがる。このおれがヘロインの運び屋だぜ。ことわったら、バラすと脅された。こんな時期に運び屋をやりたいがるやつなんてどこにいる？」

呻くような声。パットの気持ちは十分に理解できた。

「今日もダウントウンで殺しがあった。福建から来たやつがバラされただろう？」

パウエル・ストリート433。呉達龍が見つけた死体。

「ああ、それなら知ってる」

「そいつも運び屋だったって話だ。シアトルからヘロインを運んで、自分で売りさばいてた。こっちの流通網がガタガタになってる隙を狙ってやって来たハイエナ野郎だ。あいつが殺されて、みんな喜んで。ところがだ、ハリィ。だれがあいつをバラしたのかはだれも知らないんだ。みんな、犯人を血まなこになって捜しまわってる。あいつがシアトルから運んできたはずのヘロインが見つからないってな。このグレート・ヴァンクーヴァーで、黒社会に情報が一つも流れてこないんだぜ。前はこんなじゃなかった。去年の秋あたりから、なにかが変わっちまったんだ」

パットは頭を抱えた。アルコールとマリファナがパットの神経を過敏にしていた。それとも、神経が過敏になっているからアルコールとマリファナが必要だったのか。いずれにせよ、パットは変わった。ハンサムで気のいい中国人はどこかに消えてしまった。

「怖いのか、パット？」

小刻みに震える背中 - -ハリィは悲しげに首を振り、その背中に腕をまわした。パットの体温と恐怖が伝わってきた。

「ああ。もう、終わりにしてほしい。おれは十分にやった。普通の仕事に戻してもらってもいいころだと思わないか？」

「グリーンヒルには相談したのか？」

パットの震えがとまった。

「あのクソ野郎」

それだけで答えがわかった。レイモンド・グリーンヒル - -冷徹な策謀家。部下の言葉に耳を傾けるとは思えない。

「おれが明日、話してみるよ」

ハリィはいった。乾いた笑い声 - - パットの背中がまた震えはじめた。

「おまえが話してくれる？ 同じだよ、ハリィ。あのクソ野郎がおれたちアジア系の話を聞いてくれるもんか」

憐憫と屈辱が入り交じった声だった。ハリィは辛抱強くパットに語りかけた。

「おれはキャスイと婚約したよ、パット」

笑い声がやむ - - 震えもやんだ。

「嘘だろう？」

パットが顔をあげた。ハリィはうなずいた。

「キャサリン・デボア・ヘスワースとハロルド加藤が婚約した？」

「そう。うまくいけば、おれは上院議員の婿だ。あのクソ野郎のグリーンヒルだって、おれの話は聞くさ」

「本気か、ハリィ？」

「本気だ。エンゲージリングも渡したよ」

「あんな女と.....そうまでして出世したいのか？」

「おれが出世すれば、おまえを潜入捜査から外す。約束するよ」

パットはグラスに手を伸ばした。一気に中身を飲み干した。

「おれにはわからんよ、ハリィ」ブランディで濡れた唇を拭いながらパットは首を振った。「親父さんの会社にいれば、出世なんて思いのままだろうが。なんだって、警官なんて割りに合わない商売についてるんだ？」

「おれの母さんは強盗に殺された。そいつを逮捕して死刑台に送ってくれたのはヴァンクーヴァー市警の警官だった - - 」

「だからおまわりになったなんていうなよ。おまえがそんなやつじゃないことは百も承知だからな」

「だけど、そうなんだよ、パット」

「だったら、出世の亡者になってることはどう説明するんだ？」

「簡単だ。親父の血が流れてるからさ」

パットはため息をついた。

「お手上げだ。おまえのことを理解するにはおれの脳味噌じゃ力不足だ」

「だったら、パット、仕事の話をしてよう」

ハリィはいった。パットは唾を吐きかける真似をした。

\* \* \*

電話 - - たたき起こされる。日本酒の復讐。頭が割れるように痛んだ。うなりながら受話器を掴んだ。

「加藤巡查部長ですか？」

機械的な女の声がした。CLEUのくそったれのオペレーター。ハリィは枕元の時計を見た。午前六時三十分。もう一度、うなった。

「そうだ。なにがあった？」

「昨日、照会されましたヴァンクーヴァー市パウエル・ストリート433で発生した強盗殺人事件ですが、つい先程、新しい通報がヴァンクーヴァー市警に入りました。グリーンヒル警部の指令で、連絡をしています」

頭痛がひどくなる。

「新しい通報？」

「同じアパートメントでまた殺人事件です。被害者はジェシカ・マーティン。昨日起こった殺人事件現場の階下に住む女性です。データベースを検索すると、名前がありました。娼婦です。情報を集めますか？」

ハリィは飛び起きた。呉達龍のいかつい顔が脳裏を駆けめぐった。

「頼む。すぐに行くから、できるだけ集めておいてくれ」

「了解しました」

福建出身の中国人 - - 売女。繋がり - - ヘロイン。それ以外、考えられない。震えがくる。パジャマも着ずに寝ていた。ベッドをおりる。半分勃起したペニスが寒々しかった。痛む頭をかかえ、リビングに向かった。飲み散らかした酒とつまみ - - 跡形もなかった。パットも消えていた。グラスや皿はきちんと洗われて、キッチンに積みあげられていた。

断続的な頭痛の合間に記憶がよみがえった。

李耀明の娘の話。一緒にいた男はミッシェルと名乗るケベックから来たチンピラ。ヴェトナム人と吊るんでいる。ヴェトナム人たちのねぐらを転々としている。

飲み干したグラス - - パットの体臭。

パットは話した。

ミッシェルは気どっている。ミッシェルは金を持っている。ミッシェルは女を口説きまくる。李耀明の娘がその度に泣き喚く。ミッシェルは毎晩、ヴェトナム系のチンピラたちとパーティを開く - - カラオケ、ビリヤード、ハシッシとヘロインのカクテル。

ミッシェルの現われそうな場所を教えてくれ - - ハリィはいった。

いいとも - - パットは答えた。

その先は記憶が途切れている。覚えているのは大吟醸の芳香。パットの体臭。  
パットの体温 - - 素っ裸で眠っていた自分自身。

なにをした？ なにをしなかった？

思いだせなかった。

ハリィはよろめきながらバスルームへ向かった。

\* \* \*

C L E Uの本部は閑散としていた。眠たげな目をした夜勤の連中がむっつりと職務をこなしているだけだった。

対アジア系組織犯罪班のオフィスに向かう。デスクの上に何枚かのプリントアウトが置かれていた。

ジェシカ・マーティン殺害事件の概要 - - ジェシカ・マーティン。白人。女性。一九五七年オタワ出身。一九七五年、ヴァンクーヴァーへ。二十二歳のとき、売春の容疑でヴァンクーヴァー市警風紀班に逮捕されて以来、売春で生計を立てている。年をとり、落ちぶれ、今ではホームレス相手のたちんぼう。

第一発見者はそのホームレス。ビル・クレイモア。酒に酔い、手軽なセックspartnerを求めてパウエル・ストリート433のアパートメントを訪れた。ドアに鍵はかかっていなかった。部屋に入り、異常を悟った。ベッドルームでジェシカの死体を発見、警察へ通報。注意書 - - 市警はビル・クレイモアを拘留中。

再び、ジェシカ・マーティン。死体は現在解剖中。ヴァンクーヴァー市警殺人課、ジョン・シモンズ警部補の所見。ジェシカ・マーティンは局部に銃を押しつけられ、二度、撃たれた。凶器は現場に落ちていた三八口径のリヴォルヴァー。持ち主は不明。怨恨、もしくは犯罪組織とのトラブルの線で捜査を開始。

プリントアウトはそれで終わっていた。

犯罪組織とのトラブル - - ヘロイン。パットの声がよみがえった。殺された中国人はシアトルからヘロインを運んできた。

ハリィは電話に手を伸ばした。コンピュータ・セクションの内線番号を押した。

「はい。コンピュータ・セクション」

不機嫌な女の声が聞こえてきた。

「こちらは対アジア系組織犯罪班のハロルド加藤巡查部長 - - 」

「あなたね、こんな朝っぱらから仕事を持ち込んできたのは」

「すまない。もう一つ、頼みがある」

ため息 - - 仕事にくたびれた中年女の姿が臉に浮かんだ。

「昨日、パウエル・ストリート433で殺人事件があった」ハリィは慌てていった。「殺されたのは中国人だ。その現場でヘロインが発見されたかどうか調べてもらいたいんだ」

「ヘロインね.....」

回線の向こう - - キーボードを叩く音。

「殺害現場の床に大量のヘロインがばら撒かれていた。ヴァンクーヴァー市警はそれを回収。満足？」

「いや.....まとまったヘロインが押収されたという記録は？」

また、キーを叩く音。

「ないわね。市警の方はだれかが現場から持ち去ったおそれがあると見てるらしいけど」

それだ - - ジェシカ・マーティンがヘロインを持ち去った。殺された。だが、どうやって持ち去った？ だれに殺された？ 呉達龍の顔がちらついた。そんなはずはない - - 自分にいい聞かせた。悪徳警官といっても、警官は警官だ。殺人まで犯すはずがない。それに、証拠もなにもない。

「ありがとう」

ハリィは受話器を置こうとした。女の声がそれを遮った。

「本当にそう思ってるなら、今度、食事でも奢ってもらいたいわね、ハリィ」

甘い声。不機嫌な響きは消えていた。頭の回路が繋がって、ハロルド加藤が何者かを思いだしたようだった。

「ぼくにはフィアンセがいるぜ」

「知ってるわ。ジム・ヘスワースの娘さんでしょう？ 胸に脳味噌を吸い取られたって評判だわ」

低く押さえた笑い声がした。腹は立たなかった。

「オーケー。君の名は？」

「スザンヌよ」

「時間ができたら電話するよ、スザンヌ」

ハリィは受話器を置いた。

\* \* \*

発信器とナビゲーション・システムが、ケヴィン・マドックスはパウエル・ストリートにいと告げていた。呉達龍もそこにいるはずだった。

道路は凍っていた。慎重に車を運転した。ヘイスティングス・ストリートのパーキングメーターの前で車をとめた。歩いてパウエル・ストリートに向かう。

アパートメントの前には警察の車が何台もとまっていた。頬を紅潮させたホームレスたちが周りを取り囲んでいた。ハリィはアパートメントに近づいた。ホームレスたちの背後からアパートメントの入り口を覗きこんだ。無表情な顔をした制服警官がふたり、見張りを務めている。カメラと道具箱を持った鑑識の連中が忙しく出入りを繰り返している。私服の刑事がホームレスたちに聞き込みをしていた。

「なにがあったんだ？」

目の前にいたホームレスにハリィは訊いた。

「ジェシカが殺されたのさ」

ホームレスは振り向きもしなかった。

「ジェシカ？」

「知らねえのかよ？」

ホームレスがやっと振り向いた。

「たった二十ドル（一カナダドルはおよそ八十円）でおれたちのあれをくわえてくれる女さ。性根は腐ってたが、あんな安い女はいなかった。これから、おれたちはどうやって溜まったもんをぶっぱなせばいいんだ？」

「そうだな。二十ドルでしゃぶってくれる女はなかなかいないな……犯人は捕まったのかい？」

「おれが知るかよ。おまわり連中はおれたちからいろんなことを聞きたがるが、なにひとつ教えちゃくれねえからな」

かすかなざわめきが起こった。ホームレスが前を向く。アパートメントの入り口からだれかが出てくる - - ケヴィン・マドックス。その後ろに呉達龍。

ハリィは唾を飲みこんだ。

呉達龍の短く刈った髪にはところどころに白いものが混じっていた。薄い眉の下に大きな目、潰れた鼻、厚ぼったい唇。目は寝不足を物語るように血走っている。

頭の中の映像 - - くたびれた娼婦を殺す呉達龍。血まみれの手でヘロインを

掴む呉達龍。違和感はなかった。

やめろ - - 映像にストップをかけた。思いこみや予断は厳禁だ。警察学校でそう教わったはずだ。

呉達龍は入口を出たところでケヴィン・マドックスと立ち話をはじめた。身振り、手振り - - 腕利きの警官そのもの。

ハリィはアパートメントに背を向けた。

\* 15

ジェシカが見つかるのが早すぎた。あと、四、五時間は余裕があるはずだった。その間に白粉を隠すつもりだった。

呉達龍は眉をしかめた。血の匂いが鼻をついた。

自宅のキッチン - - フリーザーの中。結局、ジェシカがやったのと同じようにヘロインを押し込んで飛び出てきた。意識がすぐにフリーザーに向かう。

昨日の殺しと関連しているに違いない、すぐに現場に向かえ - - ドレイナンからの電話。心臓が止まりそうになった。

ジェシカの死体はすでに運ばれたあとだった。鑑識の連中が忙しげに動いている。殺人課の連中が眉を寄せてなにかを話しあっている。

「しかし、驚いたな。昨日の今日で、あの売女が殺されるなんて」

ケヴィンがつぶやいた。

「そうだな」

「どうして殺されたと思う？」

「あの中国人を殺したやつを見てたんじゃないか」

「だけど、あの売女、そんなことはいわなかったじゃないか」

だれがこいつを採用したんだ - - 舌打ちをこらえる。

「金になると思ったのさ。ところが、相手はそんなヤワじゃなかったってところだろう」

フラッシュが焚かれた。ベッドの上の血痕。背筋を震えが駆けぬける。

「外へ出よう」ケヴィンに声をかけた。「ここにいてもすることがない」

ヘロインが気になってしょうがなかった。

\* \* \*

凍えるような寒さ。気温は零下を割っている。ヴァンクーヴァーでは珍しい。車をおりるのが億劫だった。だが、働かねばドレイナンにどやされる。

「次はどこに行く？」

ケヴィンが右の拳をさすりながらいった。ケチな売人を殴った痕が赤くなっていた。

チャイナタウンを行ったり来たり。午前九時前。黒社会の連中が眠りにつく時間だった。めぼしい連中を捕まえないなら、夜を待たなければならない。

「こんな時間に街をうろついて、だれも捕まりはしないぜ、ケヴィン」

「だったらどうする？」

「家に帰って眠ろう。夕方になったら落ち合って、チャイナ・ギャングたちをとっ捕まえた方がいい」

「いい考えだが、ドレイナンにばれたらどうする？」

「どうやったらばれるっていうんだ？ おれとおまえが口をつぐんでれば、だれにもばれやしない。ゆうべは遅くまで飲んでたんだ。それなのに、朝っぱらから叩き起こされた。眠らなきゃ、身体がもたない。おまえだってそうだろう、ケヴィン？」

「そうだな。昨日の夜は、ガスタウンのバーでなかなかいける女を引っかけたんだが、この女が凄くてな。なかなか満足してくれないんだ……」

ケヴィンの自慢話 - - 吳達龍は小さなため息をもらした。

ケヴィンの下品な声が女のバストを品定めしはじめたとき、携帯が鳴った。

「悪いな、ケヴィン。電話だ」ほっとしながら電話に出た。「ハロー？」

「わたしだよ、ロン」

鄭奎の気どった声が聞こえてきた。

「どうしました？」

吳達龍は広東語で答えた。

「英語だとまずいのか？」

鄭奎の声も広東語に切り替わる。ケヴィンの顔を盗み見た。唇を尖らせていた - - 話を途中で遮られたことが気に入らない。ただ、それだけだった。

「相棒と一緒になんで」

「そうか。わかった。今夜、時間は取れるか？」

「ちょっと難しいですね。昨日、今日と立て続けに同じ場所で殺人事件がありまして、そっちに駆りだされてるんです」

「三十分程度でいいんだが」

鄭奎の声が不機嫌になる。犬に反抗された主人の声だった。

「それぐらいなんらなんとか」



いつものような怒りは湧いてこなかった。フリーザーの中のヘロイン - - 好きにいわせておけと囁いている。

「では、七時半にフォーシーズン・ホテルで会おう。ヘスワースのやつがパーティを開く。わたしもそこに呼ばれてるんだ」

「七時半にフォーシーズンですね？」

「部屋を取っておく。フロントで確認するといい」

電話が切れた。待ち構えていたというように、ケヴィンが女の話を開いた。

\* \* \*

ヘロイン - - 魔法の白い粉。三キロはありそうだった。これを使ってあの女に近づくことができる。これを売れば、広州にいる子供たちに市民権を取ってやることができる。

だが、売り時は慎重に選ばなければならない。その時がくるまでは、安全に保管しておく必要がある。

安全な場所 - - 思い浮かびもしない。香港ならそんな場所はいくらでもあった。だが、ヴァンクーヴァーにはない。

呉達龍はフリーザーのドアを開けた。アイスクリームのパッケージを取り出した。ビニールに包まれた白い粉。手が震える。パッケージをテーブルの上に置いた。テーブルに腰をおろし、ヘロインを見つめた。身じろぎもせずに見つめつづけた。

百五十万ドルにはなるはずの白い粉 - - 頭の中で札束が舞う。

ナイフでビニールの上の方を切った。スプーンでヘロインをすくい、用意しておいたフィルムケースに詰め込んだ。ケースがいっぱいになったところできつく蓋をとじた。

布製の梱包テープでビニールの切り口を塞ぎ、アイスクリームのパッケージを閉じた。梱包テープを蓋の周囲に何重にも巻きつけた。

手の震えはおさまっていた。パッケージをフリーザーの奥に押し込んだ。リビングに向かい、電話を取った。

広州への国際電話。回線はすぐに繋がった。

「畏？」

幼い声が答える。緊張していた神経が弛緩していく。呉達龍は静かに微笑んだ。

「阿兒、まだ寝ないで起きてたのか？」

呉達龍は七歳になったはずの娘 - - 呉探兒の愛称をやさしい声で囁いた。

「パパ？」

「そうだ。パパだ。元気だったか、阿兒？」

「うん、パパは？」

「パパは元気だ。一生懸命働かないと、おまえたちに会えないからな」

「今度、いつ会えるの？」

「近いうちに会いに行くよ」

「春節に会えると思ってたのに、パパ、来なかったから」

「悪かった。仕事が忙しかったんだ。浩南はどうしてる？」

「もう、寝ちゃった。ねえ、パパ、聞いてよ。南仔ったら酷いのよ。わたしのスカートの上におしっこ漏らしちゃったんだから」

呉達龍の笑みが大きくなった。浩南 - - 探兒の三つ下の弟。浩南が生まれて一年もしないうちに、呉達龍は香港を後にした。

「そいつは酷いな。お爺ちゃんに叱ってもらわなきゃ」

「お爺ちゃんは南仔には甘いんだから。ちっとも叱ってくれないの」

「お爺ちゃんは起きてるか？」

「うん。かわる？」

「そうしてくれ.....ああ、阿兒、なにか欲しいものはあるか？ パパが買ってやるぞ」

「新しいスカート。南仔のおしっこ臭いスカートなんてはけないもの」

「わかった。すぐ買って送ってやる」

「約束だよ、パパ」

「ああ、約束する。だから、お爺ちゃんにかわったら、早く寝るんだ。明日も学校だろう？」

「赤いスカートがいい」

「わかったよ」

探兒の気配が遠ざかっていく - - 呉達龍の顔から笑みが消えていく。

「達龍か？」

嘎れた声 - - すぐに咳込みに変わった。

「だいじょうぶですか、お義父さん？」

「いつもの気管支炎さ。それより、達龍、春節にも子供たちの顔を見に来んとはどういうつもりだ？」

「申し訳ありません。仕事が片づかなくて……」

「いつも、仕事、仕事、仕事だ。仕事が大切なのはわかっておる。しかし、おまえの娘と息子になにより必要なのは、父親の愛情じゃないか - - 」

林健國はまた激しく咳込みはじめた。

母親の愛情もな - - 喉まで出かかった言葉を飲みこんだ。林健國の娘。探児たちの母親。呉達龍の妻。林惠文。三年前、男を作って家を出た。

「わかってるんです、お義父さん。しかし、金を稼がなければ、阿兒たちをこちらに呼ぶ子とができないんですよ」

「わたしも先は長くない」荒い息で林健國はいった。「いつになったら、阿兒と南仔はカナダに行けるんだ？」

「今年中にめどをつけますよ、お義父さん」

「去年もそういつてなかったか、達龍？」

「今度こそだいじょうぶです。こっちの有力者とコネができましたから」

「そうか。頼んだぞ、達龍。老い先短い老いぼれより、父親と一緒に暮らす方が子供たちにはいいんだ」

「また、電話しますよ、お義父さん。……なにか、必要なものはありますか？」

「金だ。今の広州にはなんでも揃っておる。足りないのは金だけだ」

「送ります。その金の中から、阿兒に新しいスカートを買ってあげてください」

林健國がなにかいう前に、呉達龍は電話を切った。娘と話していたときに浮かんでいた穏やかな表情は跡形もなかった。

\* \* \*

ダウンタウンからリッチモンドへ。自分の車を飛ばした。気温があがり、凍っていた路面が濡れはじめていた。

時間がない - - 夕方になれば、ケヴィンが迎えにくる。かといって、スピードを上げるわけにもいかなかった。

苛立ちだけが募っていく。林健國の囁れた声が耳にこびりついていて、ヘロインのことを考えても、子供たちのことを考えても、耳にこびりついた声は消えない。

金 - - あの老人はいつだって金のことしかいわない。愛情の話をして、金の話をする。探児と浩南は人質というわけだ。

対向車線を走っていたトラックが派手に水しぶきをあげた。視界が一瞬、奪われる。頭に血がのぼる - - 呉達龍はルームミラーを睨みながらクラクション

を鳴らした。

広州じゃ、女がべらぼうに安いんだぜ - - だれがいったのかはもう思いだせない。深鋤なんか問題にならないくらい安くていい女が揃ってる - - その言葉にのって広州へいった。もう、九年前のことになる。

広州 - - 呉一族の父祖たちの土地。年老いた親戚たちから、嫌になるほど聞かされていた街は、共産党がすすめる改革開放政策のせいで様変わりしていた。その街で、呉達龍と同僚たちは、飲み、食い、歌い、買った。なにもかもが香港の十分の一以下の値段だった。香港では汲々として暮らしていても、広州に来れば大尽遊びができた。

中でも、女たち。香港女のきつい性格に慣れていた目には、だれもが天女のように思えた。

林恵文。たまたま入った海鮮レストランで働いていた。すべての女が天女だと錯覚していた男と、香港のきらびやかさに憧れていた女。その日の内に交わった。何度も何度も。

手紙と電話のやり取り。休暇が取れば、広州に通った。やがて、恵文は探兒を身ごもった。晴れやかな結婚式。呉一族と林一族のセレモニー。だが、香港政府は恵文の移住を認めなかった。恵文の腹の中にいる子供に香港の市民権を与えることもしなかった。

暗転 - - 優しかった女は本性をあらわしはじめた。常に眉間に皺をよせ、呉達龍を詰るようになった。

警官のくせに、わたしを香港に行かせることもできないの？

恵文には香港と大陸の違いがわからなかった。

失ったものを取り戻そうとする努力 - - 金が必要だった。恵文は金以外のものを信用しなかった。林健國がそうであるように。

黒社会とのつきあいが深くなり、恵文はますます遠ざかっていった。そして、浩南。

恵文は浩南を墮ろすといった。どうしても産めというなら別れるといった。手切れ金が必要だといった。

自分の子供を人質にする気か？ - - 呉達龍の詰問は冷笑とともに葬られた。呉達龍には折れるしか方法がなかった。煮えたぎるような憎悪を噛み締めながら。

浩南が生まれた。恵文が死んだ - - 呉達龍が殺した。恵文の首を絞めたとき

の感触はまだ、手の中に残っている。

惠文は広州の郊外の森の中に埋まっている。周りの連中は男を作って逃げたと思っている。

車はフレイザー河を渡りきった。

呉達龍は頭蓋骨の中で荒れ狂う記憶の波を振りきった。

\* \* \*

フランス・ロード5811。子供たちの声が訝している - - 近くに小学校がある。

呉達龍は車をおりた。札入れに留めたバッチを確かめた。上着のポケットに入れたフィルムケースを確かめた。周囲を見渡した。真っ昼間の住宅街は静寂の中に沈みこんでいた。

譚家明 - - 譚子華の家。前庭を横切り、玄関に続く階段をあがる。ドアをノックしようとして、インタフォンがあるのに気づいた。呉達龍はボタンを押した。

「どなた？」

しばらく間が合って、スピーカーから広東語が聞こえてきた。予想していたのと違って、年老いた女の声だった。

「ヴァンクーヴァー市警の呉達龍巡查部長です。劉燕玲さんはご在宅ですか？」

「警察がうちの娘になんの用だい？」

「ちょっとお聞きしたいことがあるんですが」

「娘は警察の世話になるようなことはなにもしてないよ」

「奥さん、わたしは娘さんを逮捕しに来たわけじゃありません。少しお伺いしたいことがあるだけです。娘さんとお話しさせていただきませんか」

「わたしの娘はね、譚子華の妻なんだよ。知ってるだろう？ 譚子華だよ。あんな有名人の嫁が、警察の厄介になるわけないだろう」

クソ婆め - - 呉達龍は深く息を吸った。ここがダウンタウンなら、ドアを蹴破ってぶちのめしてやる。

「娘さんと話をさせてください。どうしてもだめだというなら、次は令状を持ってきますよ」

「あんた、何様のつもりだね!? わたしのいってることがわからないのかい？ 娘は譚子華 - - 」

「なにしてるの、お母さん！」

若い声が割り込んできた。劉燕玲。

「阿玲、わたしはただ - - 」

「だれと話をしてるのよ？」

「警察だといってるよ」

沈黙。

「劉燕玲さんですね？ こちらはヴァンクーヴァー市警の呉達龍といいます」

「どんなご用件でしょう？」

怯えと警戒が入り交じった声 - - 呉達龍は劉燕玲の表情を想像した。

「昨日、福建からきたヘロインの売人が殺されてね」

呉達龍は英語でいった。息をのむ気配が伝わってきた。

「それが、わたしになにか？」

劉燕玲も英語でいった。元女優のはずだった。それにしてもあまりにも芝居が下手だった。

「あんたはあの福建野郎からヘロインを買っていた。買う金が足りなくなると、あいつにいわれて身体を売って稼いでいた - - あんたの横にいる強突くばりのばばあに聞かれたくなかったら、おれのいう通りにした方がいいんじゃないか？」

また、沈黙 - - やがて諦めのため息。

「どうすればいいの？」

「おれの車で話を聞こう」

「わかったわ。支度をするから少し待ってて」

呉達龍は笑った。

「五分だ。それで出てこなかったら、なにがどうなってもあんたはかまわないと思ってると思なすぞ」

「五分で行くわ」

スピーカーの音声が途切れた。呉達龍は笑いを浮かべたまま車に戻った。窓をあけ、煙草に火をつける。

運が向いてきたのかもしれない - - 煙を吐きだしながら考えた。劉燕玲の声を聞いただけで、ここ数日に募ったいらいらが掻き消えた。劉燕玲の素晴らしい身体を思いどおりにする。ヘロインを売りさばく。金を使って子供たちを呼び寄せる。あまった金で商売をする。刑事稼業とおさらばする - - 昔、夢見て

いた暮らしをする。

煙草を吸い終わるころ、劉燕玲が出てきた。顔には化粧っ気がない。かわりに鮮やかなブルウのコートを着ていた。思い詰めたような表情。目の下の隈がはっきり見える - - 禁断症状寸前の中毒患者。

ドアが開き、劉燕玲が乗り込んできた。香水の香りが漂った。

「IDを見せて」

劉燕玲は強ばった顔を前に向けたままいった。呉達龍はコートポケットから札入れを出した。札入れを開き、留めたバッチを劉燕玲に見せた。劉燕玲の視線が一瞬、動いた。それだけだった。

「車を出して。人に見られたくないわ」

「仰せのとおり」

呉達龍は煙草を灰皿に放りこんだ。アクセルを踏む。車が動きだす。

「阿一から買ったヘロインが切れたのか？」

なにげない口調でいった。

「なんの話かしら？」

「とぼけるなよ。二日ほど前だ。あんたは阿一に呼び出されてカジノで儲けた客と寝た。くだらない嘘はつくな。おれは阿一を尾行してたんだ。その金でヘロインを売ってもらったんだろ？」

交差点 - - レイルウェイ・アヴェニューを左折した。劉燕玲の顔 - - 頬のあたりが痙攣していた。

「昨日、阿一が殺された。おれがあんたとやつの仲を報告すれば、間違いなくあんたは取調べを受ける。譚子華の女房で元女優の劉燕玲がヘロイン欲しさに売春.....スキャンダルだな。香港からも記者連中がどっと押し寄せる」

「なにが欲しいの？」

気丈さを装った声 - - 語尾の震えが劉燕玲の努力を裏切っていた。

「情報。それと - - 」

呉達龍は右手を伸ばした。ブルウのコートの裾を払った。黒いパンツに包まれた太股に手を置いた。

「あんたの身体だ」

「映画によくある台詞だわ」

劉燕玲の身体は強ばっていた。呉達龍は彼女の太股をなで回した。筋肉は強ばっている。だが、薄い布地を通して、劉燕玲の肌の滑らかさが伝わってきた

ような気がした。

「現実には映画より陳腐なんだよ - - 」手を離す。その手を自分のコートの下に突っ込んだ。「もっとも、ただで全部よこせとはいわねえ。おれみたいな醜男にいいよられても、あんたは嬉しくないだろうからな」

フィルムケース - - 劉燕玲の膝の上に置いた。

「蓋を開けてみる。ゆっくりだぞ。中身をぶちまけたら面倒なことになる」

劉燕玲の顔がゆっくり呉達龍に向いた。極度の緊張に凍りついていた表情がかすかに動いた。

前方で信号が赤に変わった。呉達龍はブレーキを踏んだ。ウィリアムズ・ロードとの交差点。左折のためにウィンカーをつけた。

「遠慮することはない。早く開けてみるよ」

劉燕玲は視線を落とした。おずおずとフィルムケースをつまんだ。蓋に手をかける。期待と興奮 - - 荒い息づかいが聞こえた。それがため息に変わる。

「本物なの？」

「ああ、純度も高いはずだ」

信号が青に変わった。クラッチを戻し、アクセルを踏んだ。

「そんな顔をしなくてもなくなりゃしない。しまえよ。後でたっぷり打てばいい」

劉燕玲がフィルムケースの蓋をしめる。呉達龍はまた右手を彼女の太股の上に置いた。今度は遠慮なく指を這わせた。

「中身がなくなったら、おれにいえ。好きなだけ用意してやる」

股間に指を伸ばす - - 劉燕玲の太股に力がこめられた。

「それとも、おれとやるのは嫌か？」

太股をこじ開ける。劉燕玲は唇を噛んだ。ヘロインを見て血の気の戻った顔がふたたび蒼醒めていく。

「今日はだめよ.....」

呉達龍は太股のつけ根に這わせた指に力をこめた。劉燕玲の顔が歪んだ。

「母と娘が家にいるの。時間がかかると、なにをしてたのか聞かれるわ。お願い - - 」蒼醒めた顔が懇願する。「今日は許して。明日なら、いつでも時間を作るから」

呉達龍は路肩に車をとめた。窓の外 - - 白い息を吐きながら歩く通行人。車に注意を向ける人間はいない。



劉燕玲の顎を指で掴んだ。引き寄せた。目を覗きこんだ。

「おれを騙そうとしたら、とんでもないことになるぞ」

「今日はだめなの。お願い……信じて。わたしには夫がいるし、ヘロインが必要だわ。裏切ったりしないから」

震える唇 - - 吳達龍は自分の唇を押しつけた。逃げようとする劉燕玲の頭を右手で押さえこんだ。舌を入れた。舐めまわした。目は開けたままだった - - 劉燕玲の顔が嫌悪に歪むのを見ていた。

いいさ。せいぜい嫌ってる。そのうち、おれがいなけりゃどうにもならないようにしてやるからな、この売女が。

唇を離し、突き飛ばした。劉燕玲は背中をドアに打ちつけた。

「こっちの方は明日まで待ってやる。阿一のことを話せ。どうやってやつと知りあった。やつからなにを聞いた？」

劉燕玲はハンカチで口を拭った。吳達龍はハンドルをきつく握りしめた。アクセルを踏む - - 車が蹴飛ばされたように発進した。

「あの男と会ったのはカジノよ」

今にも泣き出しそうな声だった。吳達龍はアクセルを緩めた。自分に怯える女の声 - - 気分が良くなる。

「どこのカジノだ？」

「わからないわ。友達に連れていってもらったの……憂さ晴らしに」

太空人の女房同士の連帯というやつだった。足を踏みはずす女には、必ず、先に足を踏みはずした友達がいる。

「それで？」

「ブラック・ジャックやルーレットで遊んだわ。久しぶりだから、楽しかった。気がつくと、午前三時を過ぎていて、千ドルほど負けていた。ちょっと疲れた気がして、バーで飲み物を飲んでいたので」

「そこにやつが現れたってわけか」

「下手くそな広東語で話しかけてきたわ。お疲れのようですね、奥さん」

劉燕玲はわざと声調を外した広東語でいった。それ以外の声は平板だった。話し続けることで気持ちを紛らわしている。

「それで、ヘロインか」

「その時はコカインよ。あいつは疲れが取れる薬だといったけど、それが悪い薬だってことはわかってた。でも、どうでもよかったのよ。あいつは、こうい

う薬が欲しかったら連絡をしてくれとって、携帯電話の番号を書いた紙をくれたわ。その番号に一週間後に電話したの。それだけよ」

「その時もコカインか？」

「ヘロインよ。わたしはコカインが欲しいっていったけど、あいつはヘロインしかないって……注射器も一緒にもらったわ」

「ただで？」

「ただだったわ」

見え透いた手口。だが、退屈で我を忘れた女には十分に通じる。

「だが、そのうち金を要求された」

「そうね」

「金額はどんどん跳ねあがっていった」

「そうよ」

「金が足りなくなると、身体を要求された。その次は、売春だ」

「なんでもご存じってわけね。だったら、わたしに聞く必要はないんじゃない？」

香港の女はすぐにつけあがる。呉達龍は開いた右手で劉燕玲の頬を殴った。小さな悲鳴。劉燕玲は左頬を押さえて身を引いた。

「おれに向かってなめた口をきくなよ、売女め。おれがご主人様でおまえは牝犬だ。そのことを忘れるな」

興奮が体内を駆け回る。チンピラたちをどやしつけているときと同じ種類の興奮。自分が絶対者だと思えるときに感じる興奮。おれのいうことをきかせてやる。ひざまずかせてやる。おれの靴を舐めさせてやる。

「わかったわ……わかったから、殴らないで」

「おまえはおれの質問に答えてりゃいい。次の質問だ。今までに何人ぐらいの客と寝た？」

「わからないわ」

「答えろ！」

「二十人ぐらい……もっと少ないかもしれないし、多いかもしれない。わからないわ」

「旅行者ばかりか？」

「地元の人もいたと思うけど、ほとんどそうだと思うわ」

「みんな中国人？」

「そうよ……いえ、ひとりだけ、日本人がいたわ」  
日本人 - - 神経がささくれ立つ。CLEUのやつも日系だった。  
「日本人？ 確かか？」  
「わからない。その人、ずっと英語を話してたからそう思ったの。韓国人かも  
しれないわ」  
「名前は？」  
「聞かなかったわ」  
「いくつぐらいの男だ？」  
「知らない - - 」  
「考える」  
「五十から六十の間だと思う」  
二十人のうちの、たった一人の日本人。しかも老けている。腑に落ちなかつた。  
「なんだって阿一はおまえに日本人をあてがったんだ？」  
「知らないわ。本当よ。わたしはあいつにいわれた通りにしただけよ」  
「その日本人と寝る前に、阿一はなにかいってなかったか？ 思いだせ。おれ  
をごまかせるとするなよ」  
答えはなかった。呉達龍は反射的に拳を握った。助手席に視線を走らせる。  
劉燕玲は考え込んでいた。必死で。人差し指の第二関節を噛みながら。主人を  
喜ばそうとする犬の顔だった。呉達龍は拳を開いた。  
「たしか……大切なお客さんだから、しっかりサーヴィスしろといわれたわ」  
福建人と日本人 - - 大切な客。ますます腑に落ちない。  
「その日本人はどんな顔つきだった？」  
「わからないわ - - 本当よ。わたし、なるべく相手の顔を見ないようにしてる  
の。嫌だから。ああいうの、本当に嫌だから」  
「それでも、ヘロインは欲しいんだろう？」  
車が交差点に差しかかる。ギルバート・ロードに入り、北へ車を向けた。こ  
のまま直進すると、再びフランシス・ロードにぶつかることになる。呉達龍は  
腕時計を覗きこんだ。劉燕玲を乗せてから、まだ十分も経っていなかった。  
「これからは、おれにだけ股を開けばいいんだ。前よりはずっと楽だ」  
返事はない。劉燕玲は蒼白な顔で前を見つめていた。  
「もう一つ聞かせろ。阿一からヘロインのことでなにか聞いてないか？ どう

やって仕入れているとか、バックにだれかがいるとか、そういった話だ」

劉燕玲は首を振った - - その動きが途中でとまった。

「一度、いつもの半分の量しかくれなかったことがあるの。わたしが文句をいったら、こんなものはすぐ手に入るから心配するなとってたわ。聞いたことがあるのはそれだけよ」

カナダはヘロインに飢えている - - 趙偉がいていた。市警の記録もそれを裏づけている。大量に押収されたヘロイン。黒社会はヘロインの供給源を確保するために目を血走らせている。それなのに、阿一は簡単にヘロインを手に入れていた。

吳達龍は車をとめた。グラブボックスからメモ帳を取りだし、自分の携帯の番号を走り書きした。

「おれの携帯の番号だ。毎日、十二時に電話を入れろ」

破りとったメモを劉艶麗に渡した。

「おまえの携帯の番号は？」

劉燕玲は懇願するように吳達龍を見た。吳達龍は首を振った。劉燕玲の唇が開く。吳達龍は番号を書きとめた。

「明日の夜、時間を開けておけ。今日できない分、たっぷり可愛がってやる。おれから逃げようとは思うよな。そんなことをしたら、地獄の底まで追いかけてまわしてやるからな」

\* 16

昼過ぎに迎えが来た - - 鼻のつぶれた中国人。広東語に訛がある。恐らく、広州出身だろう。名前 - - 阿寶と名乗った。呼びにくければ、ポールでもいい、と。

富永は嗤った。

車でリッチモンドへ。車はホンダだった。ベンツ - - マックが使っているのだろう。

ホンダはヴァンクーヴァー市街を東に向かっていた。整然とした街並みは香港島を思い起こさせる。違うのは天候だった。どんよりと垂れこめた雲。ぴかぴかの新築の高層ビルすら濛んで見える。香港なら、昼だろうが寄るだろうが、大通りを行けば気分が盛りあがってくる。街にエネルギーが満ち溢れている。ここは違った。だらだらと降りつづける雨 - - 気持ちが塞ぐ。

「カジノはどうでした、サム哥？」

阿寶が口を開いた。ホンダは橋を渡っていた。だだっ広い道路。ステアリングを握ってはいても、喋っていなければすることがないともいいかげんな表情がルームミラーに映っていた。

「ショボいな。粵門のカジノが懐かしいよ」

「粵門には、一度行ったことがありますけど、カジノには行けなかったな」

「仕事か？」

「人を殺しに行ったんです。頼まれてね」

「凌一族のだれかを殺したっていうんじゃないだろうな？」

マカオのカジノ産業を牛耳る男の顔が脳裏に浮かんできえた。凌鍾宇 - - 李耀明のお供でマカオに行ったときに、ちらりと顔を見た。近ごろはヴァンクーヴァーにも進出して、不動産を買い漁っているはずだった。

「まさか。そんなことをしたら、今ごろ生きてませんよ」阿寶は歯を剥いて笑った。顔はいかついが、笑うと愛敬があった。

「凌鍾宇の知り合いに頼まれて、おまわりをひとり殺したんですよ」

警官殺し - - マカオでは極道の命より警官の命の方が安かった。

「香港から粵門に入って、その日の内におまわりを殺して、香港に戻ったんです。で、そのままヴァンクーヴァーに来ましたよ。十万ドルとカナダの市民権が報酬だったんです」

「アメリカドルか？」

「まさか。香港ドルですよ」

日本円にして百五十万足らずの金だった。高いのか安いのか - - 凌鍾宇絡みなら、もしかすると破格の値段かもしれない。富永の知っている大陸から来たチンピラは、十万円程度の金で人を殺す。

「そろそろリッチモンドですよ」

阿寶の声に促されて、富永は視線を窓の外に移した。マッチ箱のような家が整然と並ぶ街並みが広がっていた。

「これが？」

思わず聞いた。阿宝がうなずく。富永は嘆息した。想像していたのとは大違いだった。香港が中国に返還されることが決まってから、大量の香港人がカナダに逃げだした。アメリカが門戸を閉ざした後では、カナダがもっとも移民しやすい国だったからだ。中でも、太平洋岸のヴァンクーヴァーの人気は高かった。金のある連中はヴァンクーヴァーの高級住宅街に家を買った。そうじゃな

い連中は郊外に住みついた。中でも、リッチモンドは有名な風水師がありがたいご宣託をくださったせいで、全人口の二十五パーセント近くが中華系移民で占められている。

富永はもっとごちゃごちゃした街を想像していた。香港のような街を。たとえば、そこが中華文化の及ばない最果ての地であったとしても、自分たちの流儀を押し通す - - それ香港人、いや、中国人だと思っていた。目の前に広がる景色は、中国人の流儀にはまったくそぐわなかった。

「本当にこんなところに香港人がうじゃうじゃいるのか？」

「腐るほどいますよ」

阿寶がまた笑う。ホンダは橋を渡りおえた。

「結局、みんな様子を見てるんですよ」阿寶はいった。「一九九七年の七月以降、共産党が香港をどうするつもりなのか、それがわかるのを待ってるんです」

「たいしたことがないとわかったら、みんな香港へ帰るつもりなんだな？」

「そうです。だから、みんな白人連中が作った家を買ってるんですよ。骨を埋める気なら、もっと自分たちの住みやすい家を建てるでしょうからね。それに、香港と違って、こっちは土地と家がべらぼうに安いってこともありますけど」

「意外とインテリだな、阿寶」

「からかわないでくださいよ」

阿寶が笑う。富永は想像してみた - - 愛想のいい笑みを浮かべながら警官を殺す阿寶の姿。簡単だった。

\* \* \*

「とりあえず、飲茶をしましょう。腹も一杯になるし、この街の空気もわかりますよ」

阿寶がいった。否定する理由はなかった。

ホンダは街路樹がたちならぶ道を走っていた。両脇にはアメリカンスタイルの家々。濡れた歩道から湯気がのぼっていた。前方にだだっ広い駐車場があった。その奥にはショッピングモール。看板にアルファベットで「ヤオハン」の文字。

「知ってますよね、日本のヤオハンは？」

「ああ。大陸の連中に騙されて酷い目にあってるらしいな」

「このショッピングモールも、元々はヤオハンが建てたんですけどね、今は台湾系の企業のもですよ。名前はヤオハンのままですけどね」

阿寶はHondaを駐車場にいった。ショッピングモールの入り口に近い場所にスペースを見つけ、そこにとめた。

「中に入ったら驚きますよ」

車を降りながら阿寶は思わせぶりに微笑んだ。

「中に入ると、いきなり香港みたいになってるんじゃないだろうな」

「どうしてわかったんです？」

阿寶は驚いたように目を開いた。

「冗談でいってただけさ」

富永は車のドアを閉めた。霧のような小雨が顔にまとわりついてきた。湿って重い空気の中に、覚えのある匂いが混じっていた。香辛料 - - 五香粉の匂い。香港の街に立ちこめている匂い。

阿寶が小走りで入口に向かっていった。富永は悠然とした足取りであとを追った。阿寶がガラス張りのドアを開けて富永を促した。中に入る - - 足がとまる。

冗談ではなかった。モールの中は香港だった。目に入ってくる色は赤か金 - - 漢字で書かれたセール札。鼻に入ってくるのは広東料理の香り。耳に入ってくるのは、さざ波のように響き渡る広東語のリズム。外の景色とは一八〇度違った。モールの中はまさしく香港だった。

「やっぱりね、中国人は中国人なんですよ、サム哥」

阿寶が肩を叩いてきた。

「まったくな。おまえたちは本当にとち狂ってるぜ」

富永は大きく息を吸い込んだ。途端に空腹を覚えた。世界中どこへ行っても、チャイナタウンの匂いは食べ物の匂いだった。

「早く飯にしよう」

エレベーターで二階へ。昇りきった正面に映画館があった。ウィンドウに貼られたポスターは香港映画のものだった。つい先日、香港で公開されたばかりのはずの映画。主演男優と女優の顔が大写しになっている。吹き抜けになっている通路を縫って歩いた。貴金属店があり、香港ブランドのショップがあった。レンタルビデオ屋があった。雑誌や新聞を売る店があった。香港にあるものはなんでも揃っていた。

匂いが強くなる - - 人だかりがしている場所があった。中華レストラン。広東名菜・大香港 という文字が派手なエントランスの上で躍っていた。

「ここです。味は香港でいうところに中の上ってところですけど」

「待ってる連中がいるじゃないか」

富永は人だかりに顎をしゃくった。

「サム哥、おれたちは黒社会の人間ですよ」

そういって、阿寶は笑うのをやめた。愛想の良さが消え、険呑な雰囲気醸しだされる。

「ちょっと待っててください」

阿寶は行列をかき分けて入口の脇にある受け付けデスクに進んでいった。チャイナ服を着た中年女が阿寶の言葉に何度もうなずいていた。

「サム哥、どうぞ」

阿寶が叫んだ。行列を作っている連中が非難の視線を向けてくる。富永は笑みを浮かべて足を踏みだした。

「唔該」

押し殺した声でいうと、行列が割れた。空いたスペースを通過して、店の中に入る - - また足がとまった。

広いフロアはほぼ満席だった。天上や壁に客たちの話す声が反響してどよめいていた。

「まるっきり香港の飲茶レストランじゃないか」

「やっぱりおれたち、とち狂ってますかね？」

阿寶は笑った。言葉とは裏腹に、その笑いには身内を自慢するような色があった。

\* \* \*

味は中の上だと阿寶はいった - - 減点一。餃子類は蒸しすぎで皮が破け、腸粉のタレは甘すぎた。中の下 - - このクラスの店は香港なら一ヶ月も保たずに閉店に追いやられる。

「ここら辺りじゃ、これでもましな方なんです」

阿寶はいった。いいわけがましかった。

點心を食べながら周りの人間の話に耳を傾ける。話題 - - 仕事、金、香港、家族。とりわけ、ガキたちの話題が多かった。うちの孫が最近、悪い連中とつきあっている。うちの娘の着るものが派手になった。うちの娘なんか、だれが父親かもわからん子供を孕みやがった。息子の服を洗濯したら、ズボンのポケットから白粉が出てきた - - リッチモンドのガキども。香港並にいかれている。



「この後、どうしますか？」

ポーレイ茶をすすりながら、阿寶がいった。

「悪ガキたちの溜まり場を案内してくれ。特に、ヴェトナム系の連中の溜まり場だ」

「この時間に行っても、だれもいませんよ」

「場所と雰囲気を知っておきたいだけだ。夜になったら、もう一度回る」

「わかりました」

阿寶は手をあげた。

「おい、勘定だ」

ボーイがすっとなでくる。テーブルの上の伝票をつまみあげる - - 破り捨てた。

「お客様、お支払いはもうお済みです」

引き攣った微笑。まだ若いボーイだった。阿寶を見る目に、畏怖と憧憬の色が同居していた。

「そいつは気づかなかったな」

阿寶は薄笑いを浮かべた。ポケットからしわくちゃの紙幣を取りだし、テーブルの上に置いた - - 十ドル。

「料理長に伝えておけ。もう少しましな料理を作らないと、フレイザー河に沈めるぞ。まずい料理のせいで、おれは香港から来た客の前で恥をかかされた」

「つ、伝えておきます」

阿寶は満足げに鼻を鳴らした。鼻の穴が広がり、鼻毛が顔を覗かせる。阿寶は平気で人を殺すだろう - - 上の命令には忠実に従い、それ以外のことは歯牙にもかけない。そんなタイプなのがはっきりと見て取れた。

「行くぞ、阿寶」

富永は腰をあげた - - 電子音。椅子の背もたれにかけたコートのポケットから携帯電話を取り出した。

「畏？」

「わたしのこと、覚えてる？」

押し殺した女の声 - - 英語。それでも聞き違いようがなかった。富永は携帯を握りなおした。

「もちろん、太々。香港でもヴァンクーヴァーでも、あなたを忘れる人はいませんよ。でも、どうしてこの番号を？ わたしが書いたメモをお母さんが捨て

るのを見ましたが - - 」

「助けて」

劉燕玲は富永の話を遮った。英語の広東語訛りが酷くなった。

「どういうことですか？」

鼓動が速くなるのを感じた。このショッピングモールと劉燕玲。カナダも捨てたものではないと思えてきた。

「酷い男に脅されてるの。主人の知り合いには頼めないわ。あなたしか頼れそうな人がいないのよ」

「今、どこに？」

「家よ」

「すぐに行きますよ」

「だめよ。義母と娘がいるの」

「では、どこか別の場所で？」

「夕方には時間が作れるわ」

脳味噌が音をたてて回転する - - テレビのニュースで見た情報が吐きだされる。フォーシーズンズ・ホテル。上院議員選挙候補者のパーティ。鄭奎に面通しするつもりだった。

「ヴァンクーヴァーまで出てこれますか？」

「ええ、だいじょうぶよ」

「では、午後六時に、フォーシーズンズ・ホテルに来てください。部屋を取っておきます。わたしの名前は - - 」

「サム富永。知ってるわ」

劉燕玲は富永の姓を広東語で発音した。背中が肌が一斉に粟立った。

「それでは、お待ちしてますよ、太々」

「アイリーンよ。こっちではそう呼ばれてるの」

「わかりました、アイリーン」

電話が切れた。富永は携帯の通話解除ボタンを押した。そのまま、携帯を握った手を阿寶に突きだした。

「フォーシーズンズ・ホテルに電話して部屋を取ってくれ」

「なにかあったんですか、サム哥？」

「野暮用だ」

「わかりました」

阿寶は下卑た笑いを浮かべた。携帯を受取、電話をかけはじめた。

富永は煙草に火をつけた。電話をしている間に、若いボーイの姿は消えていた。

劉燕玲 - - 向こうから飛び込んできた。ものにしない手はない。

「サム哥、部屋はツインの部屋でいいですか？」

阿寶が聞いてきた。

「野暮用だといっただろう、阿寶。ダブルだ。でかいベッドの上で、いい女とやりまくるんだ」

富永は煙を勢いよく吐きだした。

「金がありゃ、スイートを取るんだがな」

日本語でつぶやいた。

\* 17

レイ・グリーンヒル警部はオフィスにいた。塵ひとつ落ちていない部屋で、眉を曇らせて書類に目を通していた。ドアをノックすると、視線だけを向けてきた。

「入れ」

声に従ってドアを開けた。部屋にはコーヒーの匂いが充満していた。

「なにか用か、ハリィ？」

「ご相談したいことがあります」

グリーンヒルは執務デスクの向かいにある椅子を顎でさした。

「掛けたまえ。ちょうど、わたしも君に聞きたいことがある」

ハリィは椅子に腰をおろした。グリーンヒルの左斜め向かい。グリーンヒルはよく横目で人を睨む。そうすることで相手は自分を畏怖すると思いこんでいる。だから、椅子は常にこの位置に置かれている。

「まず、わたしの質問からはじめてもいいかね？」

「どうぞ」

ハリィはうなずいた。

「パウエル・ストリーの殺人事件だが、いやにご執心のような。理由を説明してくれ」

ハリィは唇を舐めた。グリーンヒルの顔色を読む - - 読めなかった。口を開いた。

「同じアパートメントで二十四時間以内に二件の殺人事件が立て続けに起こり

ましたからね。警官であれば、だれでも興味を持つと思いますが」

牽制球 - - グリーンヒルは慌てなかった。

「わたしの時間を無駄にするな、ハリィ」

グリーンヒルの目が動く。ハリィは肩をすくめた。

「最初の中国人の殺人事件ですが、第一発見者はヴァンクーヴァー市警凶悪犯罪課のロナルド・ン巡查部長です」

「その巡查部長になにかあるのかね？」

「鄭奎の犬です - - まだ、確証はありませんが」

「中国人かね？」

「カナダ市民です」

「わたしの聞きたいことはわかっているだろう」

「中華系移民です。出身は香港。ご存じのように、鄭奎も香港から移民してきました」

「あの男がカナダに来たのは二十年以上も前のことだよ」

グリーンヒルはデスクの上のコーヒーカップに手を伸ばした。まず、香りを嗅ぎ、口に含む。眼鏡の奥のグレイの目は冷たい光を放っている。

「それで、その巡查部長が鄭奎の代わりに、棍棒を持って、チャイナタウンの老人たちをどやしつけているというわけか？」

「おそらく」

「早速辿りついたというわけだ。わたしが見込んだだけのことはあるじゃないか、ハリィ」

「ぼくの手柄ではないんです」

グリーンヒルの目が瞬いた。ハリィは唇を舐めた。

「どういうことだね？」

「パトリック・チャウが知っていたんですよ。鄭奎の尻を舐めている警官はだれだと聞いたら、彼は即座に教えてくれました」

パット - - やつれ、荒んだ顔。飲み散らかした酒。裸で寝ていたハロルド加藤。ハリィは小さく首を振った。やめろ。余計なことは考えるな。

「つまり、どういうことだね？」

「中華系の警官の間では有名な話だそうです。ロナルド・ンは札つきの悪徳警官だ、と」

「しかし、わたしも君も知らなかった」

「多分、聞かなかったからそうだったのでしょ」  
「実に興味深い話だな.....そう思わないかね、ハリィ？」  
「うちに限らず、カナダの警察組織は中華系移民に対して、もっと具体的な対策を練るべきです」  
「そのとおりだ.....よろしい、この二件の殺人事件に関する情報を優先的に扱う権限を君に与える。その、ンとかいう巡査部長を徹底的にマークしろ」  
「わかりました」  
「次は、君の番だ。話したまえ」  
ハリィは椅子の上で背筋を伸ばした。  
「今、話に出たパトリック・チャウのことなんですが - - 」  
「彼がどうかしたのかね？」  
「彼を潜入捜査から外してください。精神的に、かなり参っています。このまま潜入捜査を続けるのは危険です」  
グリーンヒルは興味を失ったというように視線を落とした。コーヒーカップに手を伸ばし、飲んだ。もったいぶった仕種 - - 尊大で冷徹な男。ハリィは口の中に唾が溜まるのを感じた。  
「この部署の人事権はわたしにあることは知っているかね、ハリィ？」  
「もちろんです」  
グリーンヒルはカップをソーサーに戻した。陶器が触れ合う冷たい音 - - グリーンヒルの目はコーヒーカップに向けられたままだった。  
「ということはだ、ハリィ。君はわたしのやっていることに文句をつけているということになる。どうしたものかな？」  
「そういうつもりではないんです、警部。ぼくはただ - - 」  
「ただ、次期上院議員の義理の息子として、友人のために口をききに来たということか」  
グリーンヒルは頭が回る。そのことだけは認めなければならなかった。  
「率直に言えば、そうなります」  
ハリィはいった。今さら言葉を飾っても意味がなかった。  
「チャウ巡査部長が精神的に参っているという話だが、わたしはそれには賛成しかねるな、ハリィ。彼はわたしが抱える中でも最高の潜入捜査官だ。つまり、並外れて芝居がうまいということだよ」  
「そんなことはありません」

思わず腰が浮いた。グリーンヒルが掌を向けてきた。

「落ち着いたまえ、ハリィ。君が友人を思う気持ちはわかる。しかし、上司はわたしだし、君はいやだと思っても、わたしの意見を聞く義務がある」

ハリィは椅子に座りなおした。鳩尾の辺りが熱を持っていた。デスクの上のコーヒーカップ - - グリーンヒルに中身をぶちまけてやりたかった。

「パトリックは確かに疲れているのかもしれない。今の仕事にうんざりしているのかもしれない。それでも、だ。彼が最高の潜入捜査官である事実が変わりはない。彼を外して、代替りの者を使えば、その捜査官の身元がばれて殺される可能性の方が高い。わかるかね、ハリィ？ パトリックを今の仕事から外す気はない。もしパトリックが今の仕事に耐えられないというなら、わたしに辞表を出すしかないんだ」

「ぼくがお願いしても、ですか？」

「次期上院議員と深い関りのある者に頼まれれば、考えを変える余地はあるかね」

グリーンヒルは眉を吊りあげた。暗く沈んだ目 - - おまえの願いを叶えたらなにを貰えるんだといていた。

「変えてください、警部。昨夜、パットと話をしました。彼は怯えています。ヘロイン・マーケットできな臭い動きが起こっていることはご存じでしょう？ チャイナマフィアの間で疑心暗鬼が広がっているとパットはいいました。いつ、だれが殺されてもおかしくない、と」

「そして、身代わりを送りこんで殺させる。君はそういうわけだ」

「いけませんか？」

グリーンヒルが微笑んだ。グリーンヒルにいわれた言葉を思いだした - - 君は冷徹な人間だ。そのとおりなのかもしれない。だが、ハリィ以上に、グリーンヒルは冷酷な人間だった。

「かまわんよ。本当に君が上院議員の家族になるのなら、だがね。友人を思うなら、仕事に精を出すんだ、ハリィ。その巡査部長を徹底的に追い回せ。鄭奎の尻尾を掴むんだ。ミスタ・ヘスワースの最大のライバルはあの男だ。彼が選挙レースから脱落すれば、君の友人は望む部署につくことができる。わかったかね、ハリィ？」

ハリィはただ、うなずいた。喉が渴いていた。口の中に、大吟醸の芳香がよみがえる。憔悴したパットの横顔 - - 真っ裸のハロルド加藤。頭を振った。グ

リーンヒルは書類に目を落としていた。これ以上話はないということだった。

ハリィは席を立った。グリーンヒルはハリィを見ようとしなかった。

\* \* \*

発信器とナビゲーション・システム - - 点滅するドットを追跡する。ケヴィン・マドックスはウェスト・エンドにいた。ダウンタウンの住宅街。路肩にとめられた車。車内に人影はなかった。

五分待った。マドックスと呉達龍が戻ってくる気配はなかった。ハリィは車に近づいた。ピックアップ・トゥールで鍵を開けた。ダッシュボードの下に潜り込み、デッキからテープを取り外す。新しいテープをセットする。ドアを閉め、鍵をかけ、逃げるように自分の車に戻った。

テープ - - デッキにはめ込む。再生する。くぐもった音が聞こえてくる。

呟き、囁き、舌打ち。悲鳴 - - だれかがだれかを殴る音。広東語 - - 呉達龍。殺された中国人のことを聞いている。ヘロインのことを聞いている。

静寂 - - また、声

「次はどこに行く？」マドックス。

「こんな時間に街をうろついて、だれも捕まりはしないぜ、ケヴィン」呉達龍。

ふたりは仕事をサボる段取りをつけはじめた。やがて、マドックスの自慢話が始まった - - 早送り。もう一度、再生。マドックスの声がまだ続いていた。早送りしようと伸ばした手がとまる。携帯電話の着信音。続いて、呉達龍の声。「悪いな、ケヴィン。電話だ.....ハロー？.....どうしました？」

英語から広東語 - - 呉達龍の言葉が切り替わる。ハリィは耳に神経を集中させた。

「相棒と一緒になんで」呉達龍の声 - - つまり、人に知られたくない相手と話しているということだった。相手の声は聞こえなかった。

「ちょっと難しいですね。昨日、今日と立て続けに同じ場所で殺人事件がありまして、そっちに駆りだされてるんです.....それぐらいなんらなんとか.....七時半にフォーシーズンですね？」

呉達龍の声が消える。マドックスのくだらない話が再開される。

ハリィはテープをとめた。

人に知られたくない相手。広東語で会話できる相手。ハリィの広東語の能力では細かいニュアンスはわからなかった。それでも、呉達龍が相手に敬意を払

って話しているのはわかった。

鄭奎 - - 間違いなかった。呉達龍は鄭奎に呼び出されたのだ。

七時半にフォーシーズンズ。ジム・ヘスワースのパーティが八時に開かれる。鄭奎もそのパーティに出席する。

ハリィは口笛を吹いた。無線に手を伸ばした。

「こちら、ハロルド加藤巡查部長。グリーンヒル警部を頼む。大至急だ」

アドレナリンが体内を駆け回った。送話器を握る掌が汗でびっしょり濡れていた。

\* \* \*

鄭奎はフォーシーズンズにスイートを取っていた。いつ、チェックインするかはわからない。科学捜査班の連中が大急ぎで盗聴機を取りつけた。

隣の部屋を確保する。可もなく不可もないダブルの部屋。ベッドサイドに置かれた受信機が不釣り合いだった。受信機には科学捜査班の巡查がふたり、張りつくことになっていた。

すべての準備が整うのを確認して、ハリィは腕時計を覗きこんだ。午後二時四十五分。着替えをすませてキャスイを迎えに行くには早すぎる。

フォーシーズンズを出て、リッチモンドへ。じっとしていることはできなかった。憔悴したパットの横顔と真っ裸のハロルド加藤 - - 頭の中から追い出したかった。

\* \* \*

ビリヤード・バーとカラオケ店。まだ時間が早いせいか、ろくな連中がいなかった。李耀明の娘とミッシェルと名乗る男を知っている人間は捕まらなかった。

五件目に寄ったビリヤード・バーで顔見知りのチンピラを見つけた。ヘロインを買う金欲しさに、リッチモンド市警のタレコミ屋をやっている男 - - 目くばせ。ハリィは店を出た。五分ほど待つと、男が後を追ってきた。車に乗ってきた男のポケットに二十ドル札を押し込んだ。

「なにか変わったことはないか？」

「阿寶って知ってるかい、刑事さん？」

頭の中のファイルが音をたてて開く。阿寶 - - 書類上の名前は梁志寶。中国広東省出身。許光亮の部下。許光亮は香港の李耀明の組織の幹部。月光に浮かび上がった李耀明の娘とミッシェルのシルエットと結びつく。



「知ってる。鼻の潰れた大男だろう？ 普段はヴァンクーヴァーにいる」

「そう、その阿寶が香港から来た男と一緒にこの辺を歩いてる」

「香港から来た男？ 何者だ？」

「わからねえよ。ああいう連中が、おれらみたいなチンピラにいちいち自己紹介してくれるわけもないしさ。ただ、広東語を話してるのを聞いたけど、訛りがあったな。日本人か韓国人だと思うぜ」

香港から来た男。恐らくは李耀明の肝いり。日本人？ 韓国人？

「阿寶とそいつは今、どこにいる？」

「知らねえな.....なんか、だれかを探してるみたいだったけど」

二十ドル札をもう一枚、男に握らせた。

「そいつを見かけたら、連絡してくれ。その時は、百ドル払ってやる」

男の唇が吊りあがった。

「悪いね、刑事さん。だったら、今すぐ百ドルもよこせよ」

「どういうことだ？」

ハリィは目を細めた。男は慌てて両手を突きだした。

「待てよ、あんたをはめたってわけじゃないんだ。あれを見てくれよ、あれを」  
男の視線の先 - - 道路の向かい側にあるカラオケ店。ちょうど人が出てくる  
ところだった。

鼻の潰れた大男と仕立てのいいコートを着た男 - - 酷薄さと尊大さを感じさせる顔つき。頭の中のファイルをめくる。コートを着た男には見覚えがなかった。

阿寶と男は路肩に駐めてあった車に乗りこんだ。メタリックブルーのホンダだった。

「降りろ」

ハリィはエンジンをかけた。

「待てよ。百ドルはどうなったんだ？」

「後で銀行にでも振り込んでやる。とっとと降りろ」

ホンダが動きだした。ハリィは男を叩き落とし、アクセルを踏んだ。

\* \* \*

慎重に尾行した。ホンダはリッチモンドを後にしてヴァンクーヴァーに向かった。オークストリート・ブリッジを渡ってグランヴィル・ストリートへ。キング・エドワード・アヴェニューを西へ。ダンバー・ストリートを北へ。瀟洒

な造りの家の前でホンダはとまった。

頭の中のファイル - - 見つけた。張文健が親戚に貸し与えていた家。張文健は新華僑系の大ボスのひとりだった。

ハリィはホンダの二十メートルほど後ろに車をとめた。観察する。家は静まり返っていた。

阿寶と男が家の中に入っていった。

間違いない。男はあの家を与えられている。張文健が親戚を追いだした - - 男は大物だということだった。李耀明の子飼。それ以外、考えられなかった。

ハリィは無線に手を伸ばした。

「加藤巡查部長だ。グリーンヒル警部を頼む」

しばらく待たされて、グリーンヒルの声が聞こえてきた。

「今度はなんだね、ハリィ？」

「尾行チームを用意してください」

「なんのために？」

「まだはっきりしたことはわかりません。ただ、例の巡查部長の件に関っているとされる人物を調べたいんです」

嘘 - - かまうことはなかった。

「確かなんだろうな？」

「ほぼ確実です」

「その人物は中華系か？ 尾行するだけでいいのか？」

「中華系です。できれば、どこへ行き、だれとなんの話をしたかまで掴めれば……」

「わかった。尾行班に話をつけよう。ターゲットの住所と特徴を教えてくれ」

ハリィは教えた - - 的確に。

\* 18

シャワーを浴びた。念入りに身体洗う。グッチのスーツ、グッチの靴。迷った末にヴェルサーチのネクタイをしめた。鏡でチェックする - - 昏い目をした男が見つめ返してくる。

「小便臭い小娘の尻を追いかけまわす仕事よりよっぽどマシだ。そうじゃないか？」

呟いてみる。昏い目をした男は笑わなかった。

富永はバスルームに背を向けた。

\* \* \*

部屋は九〇五号室。ダブルの部屋といっても、広々とした雰囲気があった。香港や東京の同じクラスの部屋と比べても、広さは歴然としていた。ルームサーヴィスで赤ワインを取った - - なにもすることがなくなった。待った。

五時五十八分 - - ドアが叩かれる。

劉燕玲はサングラスをかけていた。人目を避けるためだとしたらお笑いだった。目の下の隈を隠すためだとしたら物悲しかった。左手にエルメスのバッグ。毛皮 - - 恐らくは黒テン - - のロングコートの裾からエナメルのような光沢を放つブーツが覗いていた。

「君のような女性は時間にルーズなものだと相場は決まってるんだがな、アイリーン」

富永は広東語でいった。くだけた言葉、くだけた口調。言葉つきとは逆に、丁寧な仕種で劉燕玲の手を取った。

「昔はそうだったわ」

劉燕玲は臆する様子もなく部屋の中に入ってきた。

「昔は？」

「そう。結婚して、約束に遅れるたびに殴られるようになって、時間に敏感になるようになったの。おわかり？」

「了解した」

富永はいった。譚子華 - - 酒乱だという噂を聞いたことがあった。

富永は劉燕玲の背中にまわった。毛皮に手をかける。劉燕玲はそれが当然というように毛皮を縫いだ。毛皮の下は真っ赤なスーツ。ブランドはわからないが、多分、フレンチ・メイド。タイトなスカートは膝上十センチ。形のいい脚は黒いストッキングとロングブーツで覆われていた。

受け取った毛皮をクローゼットにかけて、富永は振り返った。劉燕玲がソファに腰をおろし、脚を組んだ - - 反射的に視線がスカートの奥に行こうとする。富永は抑制した。

「喉が渴いたわ」

劉燕玲がサングラスを外した。昨夜見たときにあった目の下の隈は消えていた。ファウンデーション - - ノー。目は眠たげだった。ヘロイン - - イエス。携帯電話にかかってきた声は怯えていた。今は気怠げだった。どこかでヘロインをぶち込んできたに違いなかった。

「準備怠りなしてわけか - - 」

富永は日本語で呟いた。

「なんですって？」

「綺麗だといったんだ」

劉燕玲は富永の言葉を鼻で笑った。

「このワイン、いただいてもいいのかしら」

「お注ぎいたしましょう」

富永は優雅な手つきでボトルを掴んだ。ワインをグラスに注ぐ。ルビィのよ  
うな液体が音をたてて流れた。

「貴方は飲まないの？」

「食事の前にワインを飲むと眠くなるんでね。おれのことは気にしないで飲ん  
でくれ」

「そう.....じゃあ、遠慮なくいただくわ」

劉燕玲はグラスを傾けた。ワインが口に流れ込む。喉が隆起する。富永は立  
ったまま劉燕玲を見つめた。赤いスーツの胸元 - - インナーは見えなかった。  
妄想 - - 膨らむままに任せた。

「美味しいわ、このワイン」

劉燕玲は微笑んだ。艶やかという形容が相応しい笑い方だった。

「おれの一ヶ月分の稼ぎがふっ飛ぶぐらい値が張るワインだからな」

富永は行って、劉燕玲の横に腰をおろした。劉燕玲が脚を組みなおした。露  
になった太股に手を置く - - 撥ねつけられることはなかった。そのまま指を這  
わせた。

「あの男も同じことをしたわ」

劉燕玲の顔が嫌悪に歪んだ。

「あの男？」

「電話でいったでしょう。わたし、脅されてるの」

「どういうことになってるんだ？」

劉燕玲はため息を洩らした。グラスの中のワインを飲み干し、富永を見た。  
富永は太股から手を離れた。ワインを注ぐ。掌に残った温もりが、ボトルの冷  
たさに中和された。

「わたし、ヘロインをやってるの」

劉燕玲は話しはじめた。愚かな女の転落の物語。元女優。今は有名俳優の妻

にして麻薬中毒。それに、売春婦。

恭子を思いだす。恭子はストリッパーだった。それが極道の目にとまった。新宿でも名の通った組の若頭。将来を囑望された極道。片手ではきかない女を囲っていた。恭子は富永と知り合った。ただれた性 - - 覚醒剤の魔力。恭子は皮と骨だけになって死んだ - - 殺された。富永と恭子の関係に気づいた極道は恭子を手下たちに投げ与えた。穴という穴を犯され、絶え間なく覚醒剤を打たれ、恭子は死んだ。

富永は逃げた。復讐することもせず、恭子のために泣くこともせず、ただ恐怖に囚われて逃げた。

今でも、恭子の声が聞こえることがある。恭子という - - ありがとう、脩。怨むでもなく。憎むでもなく、いう。なくなった小指の疼きとともに恭子は現われ、消える。

「それで、悪徳刑事に脅されてるってわけか.....」

劉燕玲の話が終わるのを待って、富永はいった。

「そうよ。酷い男。がさつで醜くて.....それがわたしの脚を撫でまわして、嗤うのよ」

「どうしておれに縋ってきた？」

「知り合いに知られたくないの。ヴァンクーヴァーの黒社会の連中は、みんな夫を知ってるわ。そんな人たちに頼んだら、すぐに夫の耳に伝わるもの」

「おれも黒社会の人間だよ、アイリーン。あんたの旦那も知ってる」

「でも、あなたは日本人だわ.....昨日、あなたはわたしに誘いをかけてきた。ただの黒社会の人間なら、報復が怖くてそんなことしないわ」

「おれが日本人で、あんたとやりたがってるからか？」

「いけないかしら？」

「おれがどんな人間かも知らないのに？ もしかすると、後で君を脅すかもしれないぜ」

「あなたはそんなことはしないわ」

劉燕玲は笑った。自信に満ち溢れた笑みだった。

「なぜいい切れる？」

「これでも、わたし、いろんな男を見てきたわ。だから、わかるの？」

「君を脅してるおまわりはどうだ？ 君のためにヘロインを用意するとまでいってるんだろう？ それでも、君の眼鏡にはかなわないのか？」

「あの男は虫酸が走るわ」

吐き捨てるような口調だった。富永はきいた。

「それで、そのおまわりの名前は？」

「呉達龍」

富永は絶句した。

「どうしたの？」

「いま、なんていった？」

「あの警官の名前は呉達龍よ。それがどうかしたの？」

呉達龍のいかつい顔が脳裏に浮かんだ。富永は笑いだした。

「なによ？ なにがおかしいの？」

劉燕玲の顔に陰が宿った。違う、そうじゃない - - いおうとしたが、言葉にならなかった。こみあげてくる笑い - - 富永は噎せながら劉燕玲のワイングラスに手を伸ばした。笑いをこらえて飲み干す。

「取引き成立だ、アイリーン。そいつのことなら、おれに任せておけ」

劉燕玲の脚に手をかける - - 笑いの発作が収まった。顔を近づける。拒まれる様子はなかった。富永は劉燕玲の唇を食った。

\* \* \*

劉燕玲はベッドに行きたがった - - 許さなかった。劉燕玲は服を脱ぎたがった - - 許さなかった。都合のいい男ではないということを思い知らせておく必要があった。

ズボンのジッパーをおろした。熱をもって固くなったものを引きだした。

「口でももらおうか、アイリーン」

「そんなこと、したことないわ。嫌よ」

劉燕玲は富永の股間から目をそむけた。富永はウェイヴのかかった髪の毛を掴んだ。かすかな悲鳴があがる。劉燕玲の顔を股間に押しつけた。

「馬鹿なことをいうなよ、アイリーン。譚子華が女とどういふふうにするのか、おれが知らないとでも思ってるのか？」

譚子華は名うてのポルノコレクターだった。あらゆるツテを使って、アメリカ産のポルノビデオを集めまわっている。黒いレースの下着 - - ガーター・ベルトにストッキングを身につけた金髪女優がお好みだという話だった。本番よりもフェラチオのシーンに目を輝かせるという話だった。日本人に比べれば可愛いものだった。

「しゃぶれよ、アイリーン。おれを喜ばせた方が君のためだ」

上目づかいに睨んでくる双眸 - - ヘロインで麻痺しかけた理性。

「明かりを消して……」

「だめだ」

劉燕玲のルージュを塗った唇が開いた。富永はぬめった感触を覚えた。くわえこまれ、舐めあげられる。あまり上手だとはいえない動きだった。日本なら、渋谷あたりを闊歩している女子高生の方がよっぽど淫らな舌づかいを知っている。

富永は劉燕玲のスーツの胸元に手を伸ばした。指を差しこんだ。想像していたとおり、スーツの下は下着だけだった。シルクの指ざわり。布地をかき分け、乳首に触れた。固かった。指先で弄る - - 劉燕玲が呻いた。

「やめるな。続けるんだ」

劉燕玲はソファの上で四つんばいになっている。富永の股間に覆いかぶさっている。スカートに包まれた尻が艶めかしく動く。新宿のシティホテルで、恭子にも同じことをさせた。シャネルのスーツ - - 下着はつけるな。恭子は恥ずかしかった。しきりにスカートの裾を気にした。エレベーターの中で、スカートの中に指を這わせた。恭子はいつもより濡れていた。

劉燕玲の身体の下に、エルメスのバッグがあった。気づかれないように開ける。指だけで中を調べる。財布。化粧ポーチ。ポケットティッシュ - - 香港人はハンカチは使わない。フィルムケース。富永は指の動きをとめた。カメラが入っている気配はなかった。化粧ポーチを指で押す。細長いものを探す - - 注射器。それらしいものがあった。バッグを閉じた。

「よし、背もたれに手を突いて、尻を突き出せ」

劉燕玲の顎に手をかけ、いった。劉燕玲が顔をあげる - - 唇が唾液に濡れて光っていた。

「どういうこと？」

富永は答えなかった。立ち上がり、劉燕玲の腰を抱えた。

「背もたれに手を突くんだ」

スカートをまくりあげる。

「こんなの、嫌よ。やめて！」

劉燕玲がもがいた。

「黙れ。いわれたとおりにするんだ」

押し殺した声 - - 嘎れ、ひび割れていた。掌で劉燕玲の尻を叩いた。乾いた音がした。

「ぶたないで。身体に痕がつくわ。お願い。ぶつのはやめて」

「痕がつく？」

富永は嗤った。パンティストッキングとショーツを一気に引きおろした。滑らかな白い肌 - - 太股のつけ根が変色していた。注射痕。

「尻に痣ができるくらい、これにくらべたらどうってことはないだろう……脚を開け」

富永は注射痕を指でさすった。劉燕玲の内腿が細かく痙攣する。

「なにをしている。早く脚を開け」

指先を上にならず - - 劉燕玲は濡れていた。恭子のように。

尻を抱え、突き入れた。劉燕玲のそこは、なんの抵抗も示さずに富永を受け入れた。堪え切れないうように、劉燕玲が振り向く。

苦しげに歪んだ顔。切なげに細められた目。唇が開く。快樂の呻きが漏れてくる。富永は腰を振りながら、その唇を塞いだ。

\* \* \*

「煙草、ある？」

バスルームの扉が開き、劉燕玲の声が流れてきた。

「ああ」

富永はベッドの上で寝返りをうった。背中が冷たいものに触れた - - 劉燕玲の中から溢れ出てきた自分の精液の名残だった。

舌打ち - - サイドボードに手を伸ばす。煙草のパッケージは空だった。もう一度、舌打ち。ベッドをおり、クローゼットを開ける。コートのポケットから真新しいパッケージを取り出した。

「日本人はスケベだって聞いてたけど、本当ね」

劉燕玲がバスルームから出てきた。髪の毛は乾いたまま。化粧を拭き取った顔 - - それほど変わりはない。眉が薄くなったように感じられる程度だった。

富永は煙草とライターを放り投げた。劉燕玲は器用に受け止めた。煙草を取りだし、火をつける。落ち着き払った顔 - - つい二十分ほど前まで富永に絡みつき、腰を振った女の面影はない。ソファで後ろから貫かれた後は、自分から富永を求めてきた。富永の命じる淫らな姿態を積極的にとった。



エルメスの中のヘロイン - - 奪い取れば、落ち着き払った顔が不安に歪むだろう。

劉燕玲はベッドの縁に腰をおろした。

「こっちに来て……」

富永は従った。横に腰かけ、肩に手をまわした。劉燕玲が首を傾げる。富永の首に唇を押しつけてくる。煙草の煙が漂う。股間に手が伸びてくる。

「二回もしたのに、まだ頑張れそうね」

「相手によるんだ」

富永は劉燕玲の手を押しつけ、立ちあがった。床に散らばった服をかき集め、着はじめた。

「シャワー浴びないの？」

「今夜はおまえの匂いをつけたままでいたくてね」

「気障なのね」

微笑 - - 恭子はあまり笑わなかった。いつも、なにかに追い詰められているような表情を浮かべていた。劉燕玲は恭子ではなかった。

「ねえ、あの警官のこと、本当にちゃんとやってくれるんでしょうね？」

「任せろといっただろう。心配なら、今すぐ手を打ってやろうか？」

「本当にそんなことができるの？」

「もちろん」

富永はサイドボードの電話に手を伸ばした。その下のデジタル時計 - - 午後七時十分。時差を考えれば、広州の連中が起き出す時間だった。

電話をかけた。しばらく待って、回線が通じた。広東語が聞こえてきた。

「畏？」

「灣仔のサムだが、楊先生はいるかい？」

「ちょっとお待ちください」

ちらりと横を見る。劉燕玲が真剣な眼差しで見守っていた。

「こんな短い間に二度も電話をしてくと珍しいじゃないか、阿サム」

楊の声。

「この前お話した件、覚えてますか、先生？」

「ああ、覚えておるとも。呉とかいう刑事の子供たちの話だろう？」

「そう。呉達龍の子供たちをさらう話です」

富永は呉達龍の名に力をこめていった。劉燕玲の肩が震えるのがわかった。

「こちらでトラブルがありましてね、どうやら呉達龍が一枚噛んでるようなんです。あいつを黙らせたいんですよ、大哥」

「それで、子供たちをさらえというのか？」

「ほんの二、三日さらうだけです。あいつが子煩悩だという話は有名ですから、すぐにこっちのいい分を聞くでしょう。そうしたら、子供たちは自由です」

「報酬は？」

考える - - 香港でアソウから奪った金がまるまる残っていた。五万香港ドル - - 日本円にして八十万弱。劉燕玲を見る。その金に値する女か？ - - 自問する。暇つぶしにはなるだろう - - 答えが返ってくる。

「五万香港ドルでいかがですか？」

「請け負った」

楊がいった。

「それじゃ、早速今日中にお願ひできますか？」

「これからすぐ、若い者を行かせよう」

「お願いします、大哥」

富永は電話を切った。煙草の煙 - - 劉燕玲の指に挟まった煙草。灰が落ちそうだった。煙草をもぎ取る - - 灰が落ちる。かまわず、短くなった煙草を吸った。

「こんなもんだよ、アイリーン」

「でも、相手は子供よ」

劉燕玲の声は震えていた。富永は劉燕玲が連れていた少女を思いだした。母親 - - ろくでもない。

「子供だろうと大人だろうと関係ないさ。問題なのは、呉達龍がおまえを脅したってことだ。身の程知らずにも、な。余計なことを考えるのはやめろよ、アイリーン。おまえが善良な人間じゃないことは、おれもおまえもわかっている。人間ってのはな、やるべきことをやって生きていくんだ」

「燕玲よ」

劉燕玲の唇が開いた。声はまだわななしている。だが、官能とヘロインに蕩けていた瞳に、一瞬、力強い光が宿った。

「わたしのことは燕玲と呼んで。アイリーンなんて、馬鹿みたいだと思わない？」

\* \* \*

エレベーターが下降する。燕玲は富永の腰にしがみついていた。

「だれかが乗ってきたらどうするんだ？」

「その時はその時よ」

声には媚が含まれていた。燕玲は男が持つ力に弱いタイプだった。それが錯覚だったとしても、自分にはない力を見せつけられると、従順になる。

「次はいつ会える？」

富永は燕玲の髪に鼻を埋めながらきいた。匂いを嗅ぐ。嗅ぎながら、尻の肉を驚づかみにする。燕玲が震える - - 心地よかった。

「いつでも.....さっき教えた携帯の番号に電話して。都合がつくかぎり、必ず会いに行くわ」

「おれと会うときは、いつもスーツにしろ。そして、下着はつけるな」

恭子にした命令 - - 恭子は抗わなかった。

「恥ずかしいわ」

「おまえは譚子華の女房だ。娘の母親だ。だが、おれと会うときは、ただの女でいるんだ。いいな？」

強い口調でいう - - 燕玲はうなずいた。エレベーターがとまった。ドアがスライドする。ロビー - - 人でごった返していた。八時から始まるパーティの客たち。燕玲が身体を遠ざけた。

「ここでいいわ、サム。やっぱり、だれかに見られるのが怖いから」

「気をつけて。呉達龍のことは心配するな」

サングラスに隠れた目 - - 表情はわからない。それでも、燕玲は唇だけで微笑んでみせた。

「それじゃ.....」

燕玲は踵を返した。遠ざかっていく背中を富永は見守った。ふいに、燕玲の足がとまった。背中が緊張に強ばった。燕玲は巨大な植え込みの影に隠れて、頭を低くした。こちらを振り向く - - 唇。なにかを訴えている。

燕玲が進んでいた先 - - 左脇にフロントデスク。スタッフになにかを聞いている男。薄くなった頭。浅黒い肌。いかつい顔。

呉達龍。

富永は目を細めて、呉達龍の横顔を睨んだ。

\* 19

スイートの部屋。だだっ広いリビングの奥にベッドルーム。風呂はおそら

くジャグジー。呉達龍が住んでいるアパートメントの倍は広がった。

鄭奎はソファにふんぞり返っていた。携帯電話でだれかと話している。二人の秘書 - - というよりはボディガードといった方がぴったりくる連中が忙しげに部屋の中を行き来していた。

おあずけを食わされている犬 - - 呉達龍は煙草を吸いながら鄭奎の電話が終わるのを待った。いつもと違って苦痛を感じることはなかった。掌に残る余韻 - - 劉燕玲の太股の感触。明日のことを考えると、自然に笑みが浮かんでくる。「待たせたな、ロン」

鄭奎の気どった英語が聞こえてきた。鄭奎は携帯電話を秘書に渡し、部屋から出ていくように指示していた。

呉達龍は煙草を消した。秘書たちが部屋を出ていくのを待った。「チャイナタウンの件はご苦労だった。ベニーにボーナスを渡しておくようにいつてあるから、あとで受け取るといい」

鄭奎は広東語でいった。ベニー - - 秘書の内のひとりのイングリッシュ・ネーム。呉達龍はうなずいた。

「ありがとうございます」

「来月から本格的な選挙戦がはじまる。その前に、障害はできるだけ排除しておかねばな」

「次はだれを痛めつけると？」

「年寄りには頭が固いし、民主主義を訴える人権派は鼻持ちならん」

鄭奎は言葉を切った。スーツの内ポケットから紙切れを取り出した。紙切れ - - 中華系新聞の切り抜きだった。呉達龍は切り抜きに目を通した。

台加交流協會理事長、香港系移民協會を糾弾 仰々しい見出しのあとに記事は続いていた。要するに、カナダ政府が中華系移民のために設立した基金の大半を、香港系移民が独占していることに対して、台湾系移民が腹を立てているということだった。中でも、台加交流協會理事長の王聖哲は鄭奎を名指して批判していた。

記事の内容は概ね事実即していた。かつての華僑はそのほとんどが広東人だ。そのせいで、世界各地のチャイナタウンでは広東語が主流言語であり、広東語を話せない中国人には身の置きどころがなかった。今でも、台湾や大陸からやってきた連中は酒を飲みながらこんな口をいう - - 北米大陸じゃ、広東語を話せない中国人は中国人じゃないのさ。

移民の歴史が古い分、地元とのかかわりも広東系の人間の方が深い。そもそも、白人連中には広東語と北京語の区別もつかない。だから、白人のどんな様方が恵んでくださる貴重な金は、すべて広東人 - - 今では香港系移民に吸いあげられることになっている。もちろん、鄭奎もそこに深くかかわっている。

「台湾の連中は難しいですよ」呉達龍は切り抜きをテーブルの上に放り出した。

「ガキどもならまだしも、前からカナダにいる連中はインテリぞろいだし、身持ちも固い。それに、連中は徴兵を経験してるんで、二、三発殴られたぐらいじゃ屁とも思いませんしね」

「そこをなんとかするのがおまえの仕事だろう」

鄭奎は唇をねじ曲げながらいった。

「しかし - - 」

「言葉はいらん。わたしが欲しいのは結果だけだ。そのためにおまえを雇っている。違うか？」

呉達龍は答えなかった。新しい煙草をくわえ、火をつける。鄭奎は険しい表情を浮かべていた。地が覗いている。テレビカメラの前でどれだけ愛想のいい笑みを振りまいても、鄭奎が黒社会の一員であることに変わりはない。

鄭奎のいいたいことはわかっていた。脅しをかけるための梃子になるものがないのなら作りだせ - - そうしたことだ。台加交流協會。メンバーのほとんどがインテリか実業家層だった。だが、欲望を持たない人間はいない。その欲望を知れば、つけ込むことができる。フリーザーの中の白粉 - - 売りさばくまでは鄭奎の力がまだ必要だった。

「わかりました。なんとかしましょう」

鄭奎の顔に笑みが広がった。

「そういつてくれると思ったよ。いいか、わたしが上院議員になったあかつきには、おまえにどれだけのことをしてやれるか.....そのことを忘れるな」

鄭奎が呉達龍を動かすための梃子 - - 金と権力。上院議員になれば、娘と息子のための市民権を手に入れてやる。その必要はない - - 呉達龍は喉の奥で吐き捨てる。あんたの手は借りない。白粉を売った金で市民権は買い取ってやる。その時はあんたにも代価を払わせてやる。

呉達龍は腰をあげた。煙草を灰皿の中に放り投げた。

「それでは、失礼します」

「パーティには出んのか？」

「柄じゃないんで」

「少しだけでも顔を出していくといい。敵を知るのは兵法の基本だぞ」

敵 - - ジェイムズ・ヘスワース。

「そうですね」呉達龍はいった。「小腹も減っていることだし、サンドイッチでもつまみながら、白い連中の顔を眺めるのも悪くはないかもしれない」

\* \* \*

ホールは人でごった返していた。ドーム型の天上に反響した声が鼓膜を震わせる。呉達龍は来たことを後悔した。

ビールの入ったグラスを受け取り、隅の比較的目立たない場所に移動した。ビールをちびちび飲みながら辺りを観察する。中央に料理を並べた馬鹿でかいテーブル。その奥にマイクを仕立てたステージ。空いたスペースは人で埋まり、立錐の余地もない。客の七割は白人。残りが東洋系。華人の他に日系や韓国系も混じっている。いずれにせよ、着飾った男と女。どの顔にも似たような笑顔が広がっていた。

鄭奎はステージの近くにいた。年老いた中国系の男と話し込んでいる。鄭奎の背後ではふたりの秘書が目を光らせていた。

呉達龍は視線を会場への入口に移した。出入りする人間の顔をチェックする - - 刑事の習性。くだらないが、他にすることがなかった。入口を見張りながら、ジャケットの胸の部分を押さえた。百ドル札の束の感触 - - 一万ドル。たいした金ではない。胸くその悪くなる仕事の報酬にしては少なすぎる。それでも、まとまった金であることに違いはない。

思考が白粉に飛ぶ。あれをすべて売りさばけば、いったいいくらの金を手にすることになるのか。金を手に入れたなら、真っ先に娘たちを呼び寄せる。蛇頭組織に関係している連中に五万ドルもくれてやれば、ことは楽に運ぶ。市民権の問題はそれからだ。金があれば大抵の問題はクリアできる。アメリカの市民権を買い取ってもいい。いずれにせよ、ヴァンクーヴァーは出る。この街にはうんざりだ - -

拍手が起こった。客たちの視線が一斉にステージに向けられた。大柄な白人がマイクの前に立っていた - - ジェイムズ・ヘスワース。髪は白く、年の割りに若々しい肌は白というより赤みがかっていた。顔に張りついた笑みは苦勞を知らない者特有のそれで、茶色い瞳は傲慢さを物語ってあまりあった。

ざわめきが消えた。ヘスワースが演説をはじめた。呉達龍はあくびを噛み殺

した。政治家のたわごとには興味が持てなかった。もう一度、視線を入口に向ける - - 動きがとまる。

一組の男女が慌てた様子で入ってくる場所だった。ダークスーツの東洋人と、派手なドレスを着た白人のカップル。呉達龍の目は男に張りついて動かなかった。

ハロルド加藤。CLEUの捜査官。なぜあいつがここに？ - - 脳裏に浮かんだ疑問を呉達龍はすぐに打ち消した。ハロルド加藤はお坊ちゃんだった。こういうパーティに出席するのはお手の物だろう。

「失礼」

呉達龍は周りにいた人間をかき分けた。ハロルド加藤と女は、ステージの方向に向かって歩いている。気づかれないように後を追った。

ふたりはステージの前に陣取っていた集団に加わった。集団の中心にいるのは初老の東洋人だった。初老の男の周りには他にも東洋系の男たちがいた - - 呉達龍は首をひねった。ステージのまん前にいるということは、集団はヘスワースの支持者たちということになる。その中にいる東洋人。理解できなかった。鄭奎の立候補に反対する中華系は腐るほどいる。だが、白人に加担する中華系などいるはずもない。

ハロルド加藤は初老の東洋人と話しはじめた。仲がいいというわけではない。どちらかといえばよそよそしい態度だった。それでも、ふたりの間になんらかの繋がりがあることはうかがえた。

加藤の脇で女が不機嫌そうに顔をしかめている。黒いドレス - - 超弩級の胸。婚約者。あるいはそれに近い存在。女は視線をステージに向けた。そこで初めて笑みを浮かべた。ステージの上でヘスワースが女に微笑み返した。ヘスワースと女 - - どこか似た雰囲気。頭蓋骨の中で警報ベルが鳴り響いた。女はヘスワースの娘だ。ハロルド加藤はなんのために自分に近づいてきた？ 自分の女のために。女の父親のために。それ以外、考えられなかった。

呉達龍はその場を離れた。鄭奎を探す。情報が足りない。どんな些細なことであったとしてもハロルド加藤に関する情報が必要だと本能が告げていた。

鄭奎は同じ場所にいた。薄笑いを浮かべながらヘスワースの演説を聞いていた。

「鄭先生」

広東語で呼んだ。鄭奎は露骨に顔をしかめた。

「どうした？」

「お話したいことがあります。ちょっと来ていただけませんか？」

「パーティの主役が演説している最中だぞ」

「お願いします」

鄭奎の強い視線がまともに浴びせられた。呉達龍は怯まなかった。それ以上に強い視線で睨み返した。

「くだらない話じゃないんだろうな」

鄭奎が折れた。呉達龍は鄭奎の肩を抱き、ホールの隅の方へ誘った。周りには白人しかいない。ここなら、広東語の意味を聞き咎められることもない。

「あそこにいる男をご存じですか？」

呉達龍はハロルド加藤と初老の東洋人のいる方角を指差した。

「ああ、加藤明じゃないか。彼がどうかしたか？」

広東語で発音された名前 - - 日本人。ハロルド加藤=加藤明。ふたりは親子だ。

「なにものですか？」

「貿易会社の社長だ。古いつきあいのある人間さ。彼がどうしたんだ？」

「横にいるのは息子ですね？」

鄭奎は目を細めた。顔の筋が強ばっていく - - すぐに強ばりは消えた。

「ああ、ハリィだ。彼の息子だよ。しばらく見ない間にいい面構えの若者に育ったな」

「ハロルド加藤。CLEUの対アジア組織犯罪班の捜査官です。先日、署に顔を見せましたよ。李耀明の娘を探しているといっていた。本当かどうかは知りませんがね。加藤明はジェイムズ・ヘスワースを支持してるんですか？」

「ハリィが李耀明の娘を探している？ どういうことだ、それは？」

「わかりません。もし必要なら調べますが - - 」

「そうしてくれ」

「それより、加藤明はヘスワースを支持しているんですね？」

鄭奎はまた視線をステージの前に向けた。

「どうやら、そのようだな」

力のない声 - - 鄭奎のいつもの態度にはそぐわない。神経になにかが引っかかる。だが、それを確かめるにはあまりにも気が急いでいた。

「だとしたら、李耀明の娘の話をもとに信じることはできませんね。あなた



の敵対者を指示する人間の息子がわたしに接触してきた。しかも、そいつはCLEUの捜査官だ。加藤明の息子はわたしを探りに来たんです」

「ロン - - 」

「聞いてください。もし、わたしの読みが当たっていたらまずいことになりません。CLEUには中華系の捜査官もいる。もし、あの息子がそいつらを使ってチャイナタウンに聞き込みをかけはじめたら、わたしたちのやってきたことがばれます」

「どうしたいというんだ？」

間延びした声 - - 鄭奎は呉達龍の願いに気づいている。

「殺します」

呉達龍は低い声でいった。

「だめだ。警官殺しはスキャンダルになる。殺されるのが加藤明の息子となればなおさらだ。あれがヘスワースの有力な支持者だというのは周知の事実だ。わたしは痛い腹を探られることになるし、ヘスワースは加藤明の息子を英雄に仕立てあげて自分の選挙戦に利用する。殺すのはだめだ」

「しかし、放っておけば、確実にまずいことになりますよ」

鄭奎は腕を組んだ。唇を噛みながら、加藤明の方をまた見やった。

「加藤明とは古い付き合いだ。初めて彼と会ったのは七十年代のはじめだった。今でこそふたりとも成功し違う道を歩いているが、あの頃は違った。ふたりとも若く、貧しかった。このカナダで生きていくために、いろいろなことをやった。わかるか？」

鄭奎は呉達龍に向き直った。挑むような視線を向けてきた。

「わかりますよ。あの日本人も叩けば埃の出る身体だということでしょうか？」

「そうだ。息子の件は、わたしから加藤明に話してみよう。おまえが手を出すことは許さん」

「あなたの選挙のことだけじゃない。わたしの将来のこともかかっているんです」

「わたしを信用しろ」

鄭奎はいった。取りつく島があるようには思えなかった。

なぜだ？ - - いくつもの疑問符が頭の中を飛び交った。殺すのが一番手っ取り早い。なのに、なぜ躊躇う？

「不満があるのはわかる。だが、我慢してくれ。加藤明とは本当に古い付き合い

いなんだ - - さて、わたしは仲間のところに戻らなければな」

鄭奎は踵を返そうとした。呉達龍は手を伸ばした。鄭奎の肩を掴む。

「まだなにかあるのか？」

鄭奎が振り返った。目に苛立ちの色があった。呉達龍は口を開き、閉じた。不満、怨嗟、憤り - - いくつもの感情が絡み合って声にならなかった。

「久しぶりだな、呉達龍」

ふいに背後から声がした。呉達龍は肩ごしに声の主を見た。

仕立てのいいスーツを着た男が笑っていた。記憶の波が呉達龍を飲みこんだ。富永脩 - - 日本鬼。

「どうして、おまえが……？」

「呉達龍、鄭先生を紹介してくれよ。それぐらい、かまわんだろう」

富永脩を見るのはほぼ三年ぶりだった。三年の間に富永は変貌を遂げていた。死ぬために香港に来た - - そういわれていた当時の面影はなかった。広東語も上達していた。

「こちらはどなたかな？」

鄭奎が富永を認めた。如才のない政治家の笑みが顔に浮かんでいた。

「呉達龍の古い友人で、富永脩といいます。サムと呼んでください」

「日本人か？」

「ええ。今は李耀明大老の下で働かせてもらっています」

「おお、李耀明は元気かね？ マカオの問題で頭を抱えていると聞いたが」

李耀明の名を聞いて、鄭奎の目が輝いた。

「ええ、マカオの件は相変わらずです。それに加えて、大老には手のかかる娘がいますので……」

鄭奎の視線 - - 呉達龍はうなずいてみせた。

「李少芳といったかな、娘さんの名前は？ 彼女がどうかしたのかね？」

「ジゴロまがいの男に騙されて、家出してしましまして。それで、わたしがヴァンクーヴァーにいるわけです。娘を捜し出せ、娘を誑かしたチンピラにお灸を据えてやれという大老のきつい命令でしてね」

「なるほど……」鄭奎は何度もうなずいた。「李耀明もそれでは大変だ」

「実は、大老から、ヴァンクーヴァーで困ったことがあったら、鄭先生にお願いしてみるといわれておりまして」

「ああ、わたしで力になれることならなんでも協力しよう。わたしに会いたけ

れば、この呉達龍に連絡するといい。今は選挙で忙しいが、李耀明のためとあれば、なんとか時間を作る」

「よろしくお願いします」

富永は深々と頭を下げた。

「それでは、失礼する。人を待たせているものでね。ロン、彼のことは頼んだぞ。李耀明の手の者なら、わたしにとっても大切な客人だからな」

「わかりました」

呉達龍は抑揚のない声で答えた。鄭奎は満足そうにうなずき、人ごみの中に消えて行く。

「ロンなんて名前と呼ばれてるのか？」

富永がいう。唇の端に皮肉混じりの笑みが浮かんでいた。

「なにしにヴァンクーヴァーまで来た？」

呉達龍はいった。鄭奎に向けた声とは違い、刺があった。

「おれの話聞いてなかったのか？」

「いつからここにいる？」

富永は煙草をくわえた。

「答えろ」

富永は煙草に火をつけた。呉達龍は視界が暗くなったように感じた。こめかみの血管が脈打っているのがわかった。

「そんなに熱くなるなよ、呉達龍。ここは香港じゃないんだぜ」

「おれの質問に答えろ」

呉達龍は歯を食いしばった。そうしなければ叫んでしまいそうだった。

「あんたと鄭奎が話をはじめてすぐさ。鄭奎を探してたもんでね」

「おれが周りを見渡したときには、おまえはいなかった。盗み聞きするつもりで近づいてきやがったな」

「たまたま耳に入っただけさ。もっとも、警官を殺すとか、そういう物騒な話が聞けるとは思ってもいなかったがね」

「貴様 - - 」

呉達龍は富永に向かって足を踏みだした。富永が火のついた煙草の穂先を突きだしてきた。

「よせって。あんた、血の気の多すぎるところは本当に変わってないな」

「なにを企んでる？」

呉達龍は両手で拳を握った。鼻から息を吐き出した。

「別に。さっきいったように、おれは李耀明から娘を捜し出せという命令を受けてる。そのために、鄭奎に手を貸してもらいたいと思っただけさ」

「そんなたわごとが信じられるか。この街にはは、李耀明の息がかかっている連中が五万という。そいつらを使えば、あばずれ娘のひとりやふたり、捜し出すのは簡単だ。もう一度聞くぞ、日本鬼。なにを企んでる？」

「久しぶりに聞いたな、その言葉」富永は煙を吐き出した。「香港にいたときにいわなかったか？ 今度おれをそんなふうに呼んだら、ただじゃおかないって」

「どうするつもりだ、日本鬼」

富永の目が細くなった。皮肉混じりの色が消え、険呑な光を放ちはじめた。呉達龍の背中を歓喜の波が駆けのぼった。ハロルド加藤を目にしたときからわき起こっていた感情 - - 呉達龍の忍耐の限界を越えて煮えたぎっていた。だれかをぶちのめしたい - - それが目の前の日本人なら好都合だった。

「じゃあ、おれがどうするつもりか教えてやろう。劉燕玲から手を引け」

暴力への期待 - - 急速に消えていった。

「なんだと？」

「あれはおれの女だ。てめえの薄汚れた手でどうにかしようなんて、二度と考えるな」

腰のあたりに冷気が忍びこんでくる。暴力への期待 - - 殺意に切り替わる。

「相変わらず、女には手が早いな、日本鬼」

「あんたのガキ、可愛い盛りらしいな」

殺意が急速に膨らむ。

「どういう意味だ？」

「電話してみろよ。今ごろ、親代わりの爺さんが慌ててるんじゃないか」

殺意 - - 子供たちの顔に塗りつぶされる。パニックに似た恐怖が襲いかかってきた。

「貴様.....子供たちになにかあったら、貴様を殺してやる」

呉達龍は携帯を取り出した。震える指で電話をかける。

「おれの知り合いがちょっとだけあんたのガキを預かるといっていた」

富永の声 - - 意味が掴めなくなっていた。回線が繋がるまでの時間が無限に思えた。

「あんたが劉燕玲から手を引いて、あんたの持ってるヘロインをおれに渡したら、ガキがちは無事お爺ちゃんの家に戻ることができるそうだ」

回線が繋がる - - 呼びだし音。相手が出た。

「畏？ 子供たちは？」

「達龍か？ どうした？」

「子供たちはどこにいる？」

「まだ、学校に行っている時間だが、なにがあったんだ？」

「すぐに見つけてくれ。黒社会の連中に誘拐されたかもしれん」

「まさか - - 」

呉達龍は電話を切った。顔をあげた - - 富永は消えていた。